
俺の非常識女神様

ごり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の非常識女神様

【Nコード】

N7383A

【作者名】

ごり

【あらすじ】

高校生というのは俺が知らなかっただけで実はこんなにエキサイティングな職業だったのだろうか。突然過去に連れて行かれたり、かと思えば巨大なマントヒヒみたいな顔した怪物に食われかけるし、一体全体どうなっているやがる。特にあの女、夢矢瑠璃め。顔だけはいいくせに未来人がどうのこうのって……ああもう！非日常よ！どーんと来い！日常・非日常混在学園(?)ファンタジー！

プロローグ（前書き）

初めての小説です。故に最初の方ほとんど文章力がないので、つまらないかと思いますが、物語が進むにつれ文章力があがっていきますので、それに期待して読み進んでいただけるとありがたいです。

プロローグ

気付けばそこにいたということを誰かに話して誰がそのことを説明してくれよう。

記憶はないが記録ならある。

猿が画鋏を踏んで痛がってるような顔の生まれたての写真、初めて立って歩き出したときの写真、初めて父親に向かいなぜかママと言ったときの四角い記録媒体に録画された映像。

どれもこれも単なる親バカとしか言いようがなく、いくら親がそのことをいつまで経っても思い出しては幸せそうにしたって、肝心な記録された本人が覚えてないんじゃないやという疑問は親のただの自己満足ということにしておけばいいのだが、そのころ親も知らない何か自分たちが気付かない間に自分の子供におきたところで、その子供を含め誰が覚えていられようというのか。

俺の記憶があるのは最も古いところで幼稚園の年中のときに行った遠足であり、友達とぶつかった衝撃によりチャックが半開きになっていた背中に背負っていたリュックから弁当が落ち、せっかく作ってくれた母親の苦労も虚しく、直射日光により熱されたアスファルトの上にカラスにつつかれてさらにゴミ荒らしをくらったかのごとく散乱した自分の元昼食を見て、その友達に言い知れぬ憤りを感じたくらいのことしか思い出せず、それより以前の記憶はもう頭を雑巾のようにこれでもかとしぼったところで一滴も垂れてきやしないだろう。いやはや、人間の脳みそとは所詮こんなものかと思わされる。

先程へ最も古いところで〳と俺は言ったが、その言葉の通りその

部分を断片的に覚えているだけであってそれ以降のことを完全に覚えていないわけではない。よってあまり大事に思わなかったことなどは部屋の目立たないところに追いやられたエアコンのコードなみにそのころのおれにはどうでもいいことであって、記憶から抹消こそしないもののよほどのことがないかぎり思い出せない脳みそのタンクスと壁の隙間の場所に保管されるのであった。

このころはまだ気付かなかったんだ、あれがあんなに大事なことだったなんて。

だから…

だから俺はその未来的重大事件に関する記憶を、脳みそのわずか2センチ程の隙間に押し込んでそのままにしてしまっていた。

第一章：その一

清々しい春の陽気も今の俺の気持ちと比べちまえば、俺の気持ち＞春の陽気と言った感じだろうか。かと言って決して俺の心がオーストラリアのグレートバリアリーフなみの青々しさをほこっているわけではなく、むしろその真逆であり、暗澹たる気分の中、今日はこの高校の入学式である。

なんでそんなに暗いのかって？そりゃあとわりわけやりたいスポーツがあるわけでもなく、ある学問が逸脱してできるわけでもなく、特殊能力や不思議な力を持ってるわけでもないのに、さあこれから高校生活エンジョイしてやるかなんて気持ちは40分割したミジンコレベルの大きさ程もでてきやしないからだ。

長々と続く校長の催眠音波を右の耳から左の耳へと聞き流したあと、どうでもいい各クラスの担任紹介などがあり、すっかり夢の国の住人になっていた俺が中学時代の友達に肩を叩かれ起こされたときには、すでに体育館少数民族となっていた。

昇降口に貼ってあったクラス分けの紙を見たところ、俺はどうやらA組のようだった。まだ眠気眼の俺は体育館を出て渡り廊下をとぼとぼ歩き階段を四階まで体を火照らせながら上り、多少疲れ気味のままA組へと入っていった。

教室に入ってもクラスの視線が集まるなんてスター的またはイジメの对象的現象が起きるわけもなく、クラスのやつらはそれぞれ適当にグループを組んでワイワイガヤガヤやっていた。

「おせーぞ進^{しん}！」

そう聞こえた方に目をやってみると、そこには小学校からの腐れ

縁のアホ面が片手を上に挙げて手首から先で手招きしている。無視するのも可哀想なので（というのは冗談で声をかけてくれるやつがいて少し安心して）しかたなくそいつのいるグループに足を運んだ。

俺がそいつの前で足を止めると、そいつは難しそうな顔で、

「今まで何やってたんだ？はっ！まさか入学早々ナンパしてたのか？」

勝手な妄想は止めてほしい。俺は断じてそんな軽い男ではない。

「んなわけあるか。」

それもそうだなと言わんばかりにそいつはゲラゲラ笑いながら頷いた。一体何がそんなに面白い。

「まあまあ、そんなことより見ろ！新しい親友だ！」

そいつは横にいるやつに人差し指を向けた。とうか会った当日に親友っておまえには一体何人の親友がいるんだ？よもや一方的な親友じゃないだろうな。もしそうならさっさと離してやれ、きつと迷惑がってるぞ。

「なにをっ！？こいつは今さっき意気投合した正真正銘の親友だ！」

まあそうカッコするな。一步踏み出した足を引っ込めろ、顔が近い。握り拳も降ろせ。

「そうですよ落ち着いてください竜さん。進さん：でしたっけ？初めまして。某^{それがし}一樹です。以後お見知りおきを」

どこのセレブの坊ちゃんだみたいな話し方と超爽やかスマイルが何とも言えない絶妙マッチを繰り広げながら握手を求めてきたこいつが竜の新しい一方的親友か。うん。どうやらおれの見解は間違っていないかったようだ。だがまだ疑問が残る。

「そいつらは？」

某が竜の新しい一方的親友なのはよく分かった。だが、某の隣にいるあと二人は一体誰だ？まさかかつあげの最中だとは言わせないからな。

「違いますよ。彼らは僕の友達で今竜さんに紹介してたところです。

そうだ、進さんにも紹介しますね。」

そう言って某は左に立ってるメガネくんを紹介してきた。どこか気品のある感じだが、なんせメガネがメガネだ。黒ぶちの幅広メガネのせいで気品40パーセントオフだな。

「彼は僕と同じ学校だった張祐樹チャンユウキくんです。」

メガネくんはメガネの真ん中を中指でくいとあげてから、

「張だ」

それだけ言うともたまたメガネくんはメガネを中指でくいとあげた。一体一日で何回やるのか数えてみたいものだ。もしかしたらサッカーボールのリフティング世界記録をゆうに超えるかもしれない。いや、そんなことよりも、

「張ってことは中国人か？」

メガネくんはまたメガネの（以下略）あげてなぜか口元をニヤツとさせて、

「ハーフだ」

その一言。何をそんなに誇らしげに言うのかはこの際100歩譲って置いておくことにしよう。某はメガネくんが言い終わったのを見るとニコツと爽快スマイルを張にあげせるが張はまったく見向きもせず、少々がっかり気味になったようがすぐはっと我に返ったかのようにそのとなりを指差して、

「え、えっと、気を取り直して。彼は僕や張とは違う学校なんですたにかわのぼるが、部活や塾で同じだった谷川昇くんです。」

ほほう。谷や川を登るのか、親はなかなか笑いのセンスを持っているようだなどとは絶対いえるわけもなく、ただ必死に笑いをこらえる他人のペットに対して『ガッツ石松に似てますね』と言う位失礼な俺。

「ちっす。谷川、よろしく。勉強できねえけど体力なら自信あるぜ」なるほどその体力は谷や川を登ってるうちに鍛えられたわけかなどとも言えるわけがなく、二度目の口内爆発危機。客観的にいうがほんと失礼なやつだな俺。

その後すぐに担任の白川しらかわが入ってきて、全員がささっと席につき今頃になって何緊張してんだこいつらはみたいなことを考えつつも白川の自己紹介を終え、自分たちの自己紹介も無事終え、そのまま今日はとくにやることもなしに帰りということになり、俺が配られたプリントなどを鞆にしまい込んでいると、

「ちょっと」

突然肩をつつかれ低めの女子ボイス。何かかと思いい後ろを振り返ると、

「あんた、名前は？」

髪は肩まで程の長さの黒髪、妙に目を輝かしたえらい美人がそこにいた。

「さっき自己紹介したろう。聞いてなかったのか？」

おそらく聞いてなかったのだろう。あんなの聞いているやつのが少ない。

「あんなの聞くはずないでしょ。それより名前は？」

はあとため息をつきながら言ったそいつはまた俺のことを睨んできた。

「まあまあ。まずこういうときは自分から名乗るものだろう。」

そう、それが常識だ。まずはそっちから名乗ってもらおうじゃないか。

「じれったいわねえ。」

なにがだ。

「私は夢矢。夢矢瑠璃ゆめや るり。さ、次はあんたよ」

はつきり言って偶然のはずだ。それでも俺はこいつに出会った。つた。

あとから俺はこの学校に入ったことを後悔するようになる。なんでこいつに出会っちゃったのかと。

第一章：その二

高校生活初日の帰り道、俺はおそらく一般男子高校生は普通ならば経験し得ないだろうことをしていた。

だって初日の帰り道なのに俺の隣を歩いてるのは違う中学から来た今日会ったばかりの一見超絶美人さんなんだぜ？こんなことがあっていいものなのだろうか、いやあってしまったんだから仕方ない。全国の今日入学したばかりの高校一年生の諸君、恨むなら俺を恨むんじゃなく今俺の隣にいるこいつを恨め。なぜ俺のもとに来なかったんだこんちくしょう、とな。

だが俺はこのあとすぐ自分を恨むことになる。

それは曲がり角から左右の確認もなしに猛スピードで前を横切る自転車なみに突然やってきた。

「ねえ進」

「なんだ？」

「未来人っていると思う？」

「…へ？」

正直耳を疑ったね。何言ってるんだこいつ？どこかで頭でも打ったんじゃないか？そう思いたかったよ。

俺はバッチリ聞こえてたが一応念の為、冗談は通じないぞと思わせるため隣の突然奇妙な言葉を発した女に聞いた。

「…すまん、なんだって？」

この時点で聞き流しとくべきだった。瑠璃は目をキラキラ輝かしながら、

「未来人よ、未来人！ま、あんたがいるわけないだろうって言うってあたしはその未来人と直接出会って会話までしちゃったから人に聞くまでもなくいるのは確かなんだけどね！」

…うわあ。

どうやら俺は入る高校を間違えたらしい。前言撤回だ、俺は全国の男子高校生を恨む。なぜこいつがお前らのところに行かなかったんだ、とな。未来人だと？ しかも話したことがあるだとな？

バカかこいつ。

そんなものは書籍やマンガやテレビの中のおもしろ住人達が繰り広げる世界でのみ起こりうる非現実的戯言であって、この非の打ち所のない超平々凡々な極普遍的日常に起こるわけがないのだ。

俺が完全に引ききった目で見ているのに対し、隣のこいつはそりやもう何がそんなに嬉しいんだっていうくらいの幸せ半分期待半分の笑顔でさらにこんなことまで付け加えてきやがった。

「ちなみにね、その未来人ってのは実はこの近くにいるのよ。誰だか教えてほしいでしょ？ 教えてあげるわ。」

至極嫌な予感がする。俺が今すぐこの場を逃げ出して自分の出せるスピードをはるかに超越した速さで家に退散するか突然気絶したことにしてこの場に体の側面からゆっくり倒れようか考え始めたところで、瑠璃は体全体からあたしはいまむちゃくちゃ興奮してんによオーラを存分に放出しながら、

「あたしが以前出会った未来人、そいつの名前は…」

そう言いながら瑠璃は俺に人差し指を向けてきた。おいおい、冗談はいい加減にしてくれ。瑠璃はニマニマ笑いながら、

「なんてね、まだ教えるつもりは無いわ。たぶん、まだ教えちゃいけないと思うから。」

なんじゃそりゃ。

突然未来人に会ったことがあるとか言い出したあげくそれが誰か教えてあげるなどというでっちあげにしるもうちょいいいのを思いつくであろうことを言ったと思ったらまだ秘密だとな？

くそ、そこまで言われると逆に気になっちまうじゃねえか。

さっきまでは知りたくもないと思ってたのに…ああ、くそ、誰か俺に改造手術を施してこの探求心を消せ。そうだな、どうせなら中

三の夏休み前くらいから記憶ごとききれいさっぱりなくしてくれ。なんでこの高校を選んだかを忘れられる。ついでに特撮的超人特殊能力でもつけてくれたら俺はそいつを神と讃えてやってもいい。

だがなにかが引つかかる。何が引つかかっているのか分からないのがむかつく。喉仏の2センチ下くらいまで出かかっているんだが、いかんせんそこから上に出てきそうにない。誰かこの場に走ってきて、それはこういうことです、と俺に教えてくれ。今回に限って特例で謝礼を払ってやろう。四万ペソくらいなら払ってやる。…一ペソっていくらだ？

俺が相当難しい顔をしていたんだろう。瑠璃は俺の顔を覗き込んでいた。こいつが突然トカゲもびっくりしすぎて尻尾をちぎり忘れるくらいの驚天動地発言をしなければキスでもして一気に距離を縮めてやろうとかおもうのだが。いや、どっちにしろやらないけどね。

「あのな、夢矢。誰がどんなことを考えようとそいつの自由だが、いくらなんでも常識ってもんがあるだろ？おまえが夢を追うのは結構だが、もう少しまともな夢を追え。今日あったばかりのやつにいきなりそんなことを豪語したって信用してくれるやつは世界中探したって指が六本あるやつの世界合計人数より少ないと思うぞ。ミス研（ミステリー研究部のことだ）だってこいつは何を言ってるんだ？と心底思うはずだ。だからもっと恋愛とかスポーツとかに精を出してだな…」

「うるさい。あんたにそんなこと言われる筋合いはないわ。ま、そのうちあんたにもわかるわよ。」

なにかだ。

「未来人がいるってことにきまつてるじゃないの！」

そう言い残すと瑠璃はサツと身を翻して走って行ってしまった。

第一章：その三

世間一般で考えてみれば高校の入学式当日なんてのはこれから自分が通い続ける見慣れない校舎に新鮮味と期待と不安を覚えつつ無事何事もなくほっと一息ついて帰ってくるのが普通。と、まあこんなところだろう。普通なら会ったばかりの他中の女子生徒と肩を並べて帰ってきたりその女子生徒がいきなりあたしは未来人とおしゃべりしたことがあるのよとは言ってきたりはしない。俺はどちらがいかと聞かれたら普通の方がいいと流鏑馬で放たれた矢よりも早く答えるだろう。誰だってそう答えるに違いない。

だが俺が今日経験したことと言えど何だ？完全に後者じゃねえか。やばい、このままこの高校で生活していったらきつと後悔するよな気がしてきた。

はあ…過去に戻りてえ。

「戻してさしあげましょうか？」

「……へ？」

情けない声をあげつつ振り返ると、そこにあったのはどっかで見ただ必殺納涼ハンサムスマイル。

ええっと……どちら様でしたっけ？

「酷いですね、今日会ったばかりなのに。まあ一日で人の名前を脳裏に焼き付けるのはさほど簡単なことではありませんし、もっとも、劇的な出会いもしくは強烈なインパクトのある登場でもしたのなら話は別ですが。残念ながら僕はあなたに竜さんの一方的親友としか見られてなかったためか劇的な出会い又は強烈なインパクトが無かったようですね。故にあなたは僕の名前を忘れてしまっている。ですが、ここまで言ったらいくらなんでも思い出すでしょう？」

ああ。そういえばいたな、そんなやつ。教室に入ったあと竜の次

に俺に話しかけてきた爽やかスポーツマン系超絶ハンサムスマイル君。ううむ。笑顔が眩しいですなあ。

「で、何の用だ？」

本当はバッチリ聞こえてた。だがまだ聞き間違えの可能性が：

「過去に戻して差し上げましょうか、と言ったつもりだったのですが」

なかったね。うん。

くそ、わざわざ露出してしかも立て札まで建てられてる大型地雷にかかと落としを食らわせて底無しの後悔を味わうようなことをするんじゃないかった。実際に今俺は底無しの後悔を味わいながら思考回路がぶっ飛んで停止中だ。あ、今直った。

さて直ったところで考え直してみることにする。こいつは今確かに『過去に戻してやる』と言った。つまりあれか？タイムスリップさせてやるってことか？おおー。それはうれしいね。一回やってみたかったんだよな。タイムスリップ。

ってアホか。どうしてこの高校にはこんなやつばかり集まりやがる。さっきは未来人と話したことがある、で今度は過去に飛ばしてやる、だと？ふざけるのもいい加減にしがれ。呆れるのを通り越してだんだんイライラしてきた。さっさと帰って寝よう。じゃないと俺の常識が染み込んだこの右拳がこいつか俺自身を殴ってしまいそうだ。

俺は身を翻してその場を去ろうとした。が、俺が歩き始めようと右足を踏み出したとき、

「帰ってもらっては困りますね。これは既定事項です。少なくとも僕らの時間ではね。なのでちょっと強引ではありますが」

俺は聞く耳を持つとしなかった。帰ってもらあたりまでは聞いていたがあとは聞いていない。これ以上変態に付き合ってられ：あれ？

急に視界が歪む。立ちくらみの感覚に似てるが少し違う。暗くはならずただ見えてる世界がぐにやりと曲がる。なんだ、なにが起き

てる？

「…ぐっ、てめえ何しやがった…」

足がガクガクいい始めた。吐き気もする。だめだ、立ってられない。

バタツと音を立てて俺はその場に倒れこんだ。

だんだん意識が遠のいて行く中、俺の耳に入ってきた最後の言葉はこうだった。

「すいません。少々苦しいと思いますが、我慢してください。では、いきますよ」

意識が飛んだ。ほんとにそうなのだろうか？意識が無かったら考えることは不可能なはずなのに、現に今俺には思考能力がある。

それにしても気持ち悪い。なんだこの浮遊感は。下りの角度89度のジェットコースターでどこまでも落ち続けてるような感覚だ。おえ、吐きそう。

俺は近くにビニール袋はないかと探していたが、浮遊感はいつまでも続いたわけではなくむしろ今思い返せばあれは一瞬のことだったような気もする。

俺の手は春だというのにまだ寒い夜の空気に晒され冷たくなっているアスファルトを掴んでいた。

「つきましたよ。これを見てください」

某は近所の赤ちゃんを優しそうな目で見守るおばさんのような表情のまま、俺に銀色に光る腕時計のデジタルの数字を俺に見せてきた。左上にあるアンテナのような模様、どうやら電波時計のようだ。俺の目に西暦と日付が写った。

ん？なんかおかしい。俺は目を擦ってもう一度綺麗に並ぶデジタル数字を見た。

「まじかよ…」

なんてこった。そこに当然のように並んでいる数字は確かにこうなっていた。

2004／4／9。

ちなみに今は2006年のはずだった。

第一章：その四

にわかには信じきれない現象が自分の目の前・身の回りで起きたとき、人間という哺乳類はどんな反応をするのだろうか、という質問に対する答えというのは決して一つであるわけがなく、むしろたくさんありすぎてどういう反応をしているのかわからない、というのが実は一番多い答えなのではないだろうか。

今まさにそんな状況に置かれているのは他でもなく、俺だった。

ええっと、これはあれだ。きっと夢だ。もしくは規模のデカイ冗談ないしドッキリと言ったところだ。そうに違いない、というかそうであって欲しい。

冷静に判断してみることにしよう。無論、冷静にというからには客観的に、だ。高校の入学式当日、帰り際に突然他中の女子に声を掛けられ、妄想未来人トークをされ、その次の瞬間にはこれまた今日会ったばかりの涼しげなスマイルを存分に振りまいてる時間関係の変人につれられ、二年前に来てしまったかもしれない、というわけか。

ふむ、なるほど。冷静に再確認して分かったことが一つある。

果たしてこれは夢ということの間違いないだろう。冗談でもドッキリでもなく、ただの夢。イツマイドリーム。初対面のやつに前者みたいなことやる意味が、頭のイカレた連続殺人犯の殺害動機並みに俺にはわからないからな。分からないどころかそんなものやる意味なんかこれっぽっちも見いだせやしない。

よってこの普段の普通の普遍的な日常から脱線事故を起こしている現状は、脱線事故どころかまだ発車すらしてなかった、という結論に至るわけだが如何だろうか？

「名推理ですが、残念ながらハズレです。ここはあなたの言う夢の

中の世界ではなく、現実の世界においての過去です。信じられないことだとは思いますが、そちらのT字路を見ていて下さい。もう少しで信じざるを得なくなるはずですよ」

この状況をか？やめてくれ。こんなことの動かぬ証拠なんか見つけた日には俺の夢オチ説の力が弱くなっちまうじゃねえか。

などと頭の中で豪語してるせいだろうか、目の前のT字路から目が離せない。右も左も一軒家の塀で見通しが悪く、電灯の光になんだか元気がないせいで、よく目を凝らしていないと見えなさそうだ。

そんなところにそいつは現れた。

俺が目の前を通過する豪速球に書いてある文字を読み取ろうとするくらい、見通しが悪い住宅街T字路を凝視していると、豪速球なんてとんでもない、むしろバッターの手前で落ちやしないだろうかといわんばかりのスローボール並みの速度で現れたそいつ。

おれはそいつの名前を知っている。そいつの顔にも見覚えがある。コンビニ袋をぶら下げたそいつは、短めの黒髪、いまいち覇気の感じられないつり上がったも垂れ下がってもいない目、ちよつと細くしてみた眉、お世辞にも高いとはいえない鼻、薄い唇、T字路の左から現れた脳天気な表情を、俺は毎日のように見てる。朝起きた後、目を覚ますために顔を洗いに行くときそいつは寝癖のついた髪をボリボリ掻きながら俺の真正面に立っていて、当然のように俺も同じ行動をしており、つまりそれは鏡であって、そいつは他の誰でもない俺なのである。んでもって今俺の目の前に現れたコンビニ帰り君も俺。

「何が：どうなってやがる」

理解できるはずがない。今の俺は俺でしかあるはずがなく、唯一無二の存在のはずである。

だがこの現状を見てるかぎりではそんな常識は、ダイナマイトで吹っ飛ばされた土くれのごとく粉々に碎かれ、無きものにされたと

思ってしまったって何が不自然であろうか。

そういえば目の前にいる俺のドッペルゲンガーがコンビニ袋をぶら下げていると言うこと以外のもう一つの特徴を言い忘れていた。実はこっちが現状を認識するための何よりも重要な視覚的情報なのであり、それを見てしまったがために、今の俺は現状理解能力消失的パニック状態なのだ。

その特徴とは衣食住の衣にあたる服装のことであり、薄い光に照らされた服装は、上も下も黒主体で、上に着ている固めのポリエステル生地には5つボタンがついていて、上から2番目までは外してあり、その隙間から白の、俗に言うワイシャツがコンニチワしている。

ここまで言えば分かんと思うが、まったくこっちに振り向く気配すらないマヌケ面が着ているのは、公立の中学や高校で広く採用されている通学学校生活両用制服、簡潔に言えば学ランだった。

ここで確認しておく、今現在俺が着ているのは左胸に校章のワッペンがついているブレザーであり、それは俺が今日から通い始めた（果たして今がその今日であるかは怪しいのだが）高校の制服だからであり、ちょうど1ヶ月前までは別の制服に身を包んでいたというのは、まだ記憶に新しい、変えられない事実である。

そしてその制服というのは学ラン以外の何物でもなく、そろそろT字路の右に消えようとしている学ランとまったく同じであったりするわけで、その視覚的情報は、ついさっき自分の両目で確認した、というよりさせられたというべきかはわからないが、とにかく、先程俺の視界の中央に映ったデジタル算用数字日付と脳内ミキサーにかけられ混合し、俺の知らない間に数字の概念が変わったりなどの事件がなかったかぎり、今見た現実的映像の謎を解明し答えを導き出すモメントとなってしまった。

よって今俺の頭には、デジタル電波時計やらマヌケ面学ランなどにより明らかとなってしまった、ひとつの現在の状況が浮かんでいた。

「まじかよ……」

気がつけば視界に映るT字路には、すでに人影はなく、そこで初めて、俺は腰を抜かしてアスファルトに尻をつけていることを認識した。

ここまでくると夢の可能性もはやゼロに等しいと言っている。このしつこく残りやがった冬の寒さが何よりの証拠だ。

どうやら俺は、本当に過去に落ち込んだらしい。

冷や汗が一筋、額から頬を経由し、首へと流れた。

第一章：その四（後書き）

最近学校の宿題のせいで更新できなくて、そんな現状を右ストレー
トでぶちかましてやりたい気分なんです。できるわけがなく、し
ぶしぶと宿題を頑張っているとところです。夏休みあけたら今度はテス
トがあるんで、それが終わるまではまた更新できそうにないんです
が、だからといってこの小説をみすてないで下さいね；

間章…「忘れられし遠き日の記憶」

……たいへんだ。どうしよう。道に迷っちゃった。

ここはどこ？あっちにもこっちにも木しかないよ。

……あ、カラスさんの歌だ。ってゆーことはもう5時！？

あわわわわ、たたたいへんだ。早く帰らないとママに叱られちゃう。

でもどうしよう、どっちに行けば帰れるのか分かんない。

……うう。誰がだずげでええ。

「おいポーズ、あんまりびゃーびゃーなくな。なんか恥ずかしいだろ。……っておい、×××、なんだよその目は」

……誰かいる！誰だろう？

「失礼しました。とても可愛らしかったものでつい」

喋った男の人、笑ってる。でも隣の男の人はなんだか怒ってるみたい。もう一人いるけど、なんだかすごい怖い顔してる。

「そんな悠長に笑ってる場合じゃねえ。だから時間駐在員は嫌いなんだ」

じかんちゅーざいいん？なんだろうそれ？

「あー、ポーズ。あんま考えるな。これ考えると頭こんがらがってめんたまぐるんぐるんになって最後には頭爆発しちまうぞ。ってか自分に忠告すんのってどーなのよ？」

おにいちゃん、それ怖いよ。

「ああ、だから考えんのやめとけ。実際俺は今、考えちゃってるせいで爆発寸前でいろいろ困っ……あああ、分かった、分かったから泣くな。そうだな、爆発なんかしないよな、俺が馬鹿だった。はあ、俺ってこんな泣き虫だったっけ？」

「いいじゃないですか。とても子供っぽくて僕は好きですよ、こういうお子さん」

「お前に好かれても雀の涙が枯れちまってもう何も出てこないより

嬉しくない」

「お前ら、少し黙れ。奴がだんだん近付いて来てる」

おにいちゃん達が急に真剣な顔になった。何？どうしたの？

「ボーズ、今から起こることをちゃんと覚えておけ。じゃないと俺がめんどいことになる」

…？なんで僕が覚えてないとおにいちゃんがめんどいことになるの？

「めんどいだよ、めんどい。くそっ、俺はこんときからこんなだったか。成績が上がらないのはDNAレベルに問題があるのかもしれない。ああ、ボーズ、そんな難しい顔するな。これも考えるとさつき言ってみたくなるぞ」

わかった。考えるのやめる。

「よし、それでいい。じゃあ絶対にこのニコニコ野郎の隣を離れんな」

何かするの？

「…見てのお楽しみだ。××、今あれはどの辺にいる？」

おにいちゃんは怖い顔をしてたおにいちゃんの方を向いて、僕も気になってそっちを向いた。……え！？

「てめえがごちゃごちゃやってる間にもうすぐそこまで来ちゃってら。さっさと準備しろ」

着てる服は一緒だから、たぶんさっきの怖い顔したおにいちゃんだ…と思う。でもあの頭は何！？あれたしかこの間テレビでやってた…えっと、えっと、そうだ！おおかみだ！なんで？なんで？でもなんか……かっこいい！

「あー。ほんとにやんなきゃいけないのか。俺まだ慣れてないんだよな、あいつらにも、この武器にも」

言いながらおにいちゃんはズボンの後ろのポケットに右手と左手を入れて、何かを取り出した。あれはなん…：

「グギャガアアギイラアアア！！」

…！？なっ何！？僕は後ろからした変な鳴き声の方に振り返った。
「ひっ、か、怪獣……」

そこで、目の前がいきなりまっくらになった。音も聞こえなくなった。そして…

意識も、なくなった。

第二章：その一

「……ん？あれ？俺…寝てたのか？って、じゃあ、夢？何をしてたん…」

「！！！！？？」

俺はあまりに驚愕な出来事を現在進行形で体験してることに気がついた。

視界が90度回転してドアが下となり窓が上になっているのは俺が今、自分の部屋の寝慣れたベッドに寝ているからであり、驚くべき事項はそこではない。

問題は今にあるのではなく、今から少し遡ったところにある。いや、少し、という表現は間違ってるな。正確には二年前だ。その証拠たる物品は、現在壁に吊るされている高校入学直前に買った新品の鞆と、この部屋がちゃんと、俺が今日の朝出たときに見た部屋模様と一致しているという事実だ。

一対絶対何がどうなってやがる？俺の記憶は一番新しいところで冷たいアスファルトに情けなく座っていた、ということであり、それ以降の記憶はいくら頭を抱え込んでみても一ミクロンも思い出せやしない。本当に何が起きた？

実は何が起きたわけでもなく、ただの夢オチでした、なんてのは空気が冷めるだけの冗談のようなものであり、よって俺にはまったく笑えなく、手についている小石が、ついさっきまで起こっていたことは現実だという何よりの証拠である。

ふと今の時間を確かめなくなり、去年の秋くらいに買ったデジタルの電波時計を探そうと部屋を見回そうとしたところで階段の下から声が聞こえた。

「進、ご飯ー」

どうやら時計を確認する必要は無くなったな。カーテンを閉めているせいで全くと言っていいほど気付かなかったが、外から小鳥の

噂りが聞こえていることから、今が朝だということは一目瞭然だというものだ。いや、一聞瞭然か？

とりあえず今はこんがらがった頭の中の糸を解くより先に、空っぽになりかけている胃に食い物を詰め込むことにしよう。

俺は部屋を出て右に曲がり、手すり付きUターン式連続降下小段差、ようには階段のことだ、を下り、朝から考え事をして目が覚めたとはいえまだ眠い目を擦りながら洗面器までゆっくりと歩き、鏡を見ずに顔を洗い、タオルで拭いた後、鏡を見た。

…ん？何か変だな。毎日見てる顔だ、微細な変化を感じ取ってもなんら不思議ではない。だが何が変わった？髪…：うん、寝癖ばかり。目…：うん、やる気なし。鼻…：うん、あとで鼻をかまなければ。耳…：うん、ピアスっぽいのがついてるな。口…：うん、どう表現していいかわからな…ちよつと待った。ピアス？ピアスなんか付けた覚えがない。

俺は鏡にグイッと近寄り、耳についてるそれを目を凝らしてよく見た。なんで取って見ないのかといえば、もし本当にピアスだったら取ったら痛そうだからである。

だがどうやらピアスではなさそうだ。右耳についてるのは2ミリ程の銀色の半球状の物体であり、裏の平面の部分は弱い粘着性を帯びていて、それで付いていたようである。

「あら、それ何？」

突然耳元でしゃべられたら驚くなどという方が無理である。引きながら右に振り向くとそこには、起きたばかりのはずなのにまったくと言っていいほど寝癖がついていないストレートの長めの黒髪をボリボリ掻きながら、眠そうな切れ長の目は開いてるのか開いてないのかいまいち不明で、形のいい鼻の下では、同じく形のいい口でそりやもう台無しだろうと言いたくなるくらい欠伸をしている、スラッとしたモデル体系…やっぱごぼう体系にしよう、とにかく線の細い体つきの女が立っていた。

「もしかしてピアスなんかつけちゃってんの？おっしやれえ！」

違う。第一最初から間違えてるぞ。これはピアスですらなくて、もしかしたらもっとずっとやばいものかもしれない、なんてこと言えるわけがないのは暗黙の了解ってやつで、じゃあ誰に了解取ったんだなんてことはきかないでくれよな。

俺は、目の前の目を弓にして俺の顔と人差し指に乗つけたハーフ銀玉を交互に見つめてきやがる脳天気スマイルから、逃げるように一歩下がりながら、

「ちげーよ、姉え〔ねえ〕。なんか朝起きたらついてた」

そう、何を隠そうこの脳天気ゴボウ人間は俺の姉だ。ほんととは隠したいことばかりなのだが、どうせ後々バレるくらいなら勘違いされる前に自分からバラしちまえ、とこういうわけなのであって、自慢の姉だから紹介したいなんて考えはもとよりあるはずがなく、誰に紹介してんのかなんてことは竜宮城で踊る鯛やヒラメ並にどうでもいいことであるわけだからこれまた聞かないでくれよな。

このままこの謎のドーム型を姉に見せておくとなんだが盗られる気がしてきたので、とりあえずもう一度耳につけた。キャッチアンドリリース、釣った魚は元の場所と同じ考えだ。少し違うか？

このとき俺はまだ随分と眠く、小型銀色おわん形をつけた耳から全身に体の表皮を何かが伝っていくのをうまく感じ取れなかった。

さて、グダグダしてる暇もない。スムーズに事をこなさなければ入学2日目にていきなり遅刻などという不良の代名詞的な行為をする破目になる。まずは朝飯を胃に押し込んで家を出てから快調に自転車飛ばしつつこの直径2ミリ程の物体について考えることにしよう。

まさかこの謎の物体のおかげで命が助かるなんて、このころの俺が考え付くはずもなかった。

第二章：その二

居間に入った俺を待ち受けていたのは高さ40センチほどの長方形テーブルの上に置かれた簡素な朝食だった。

昨日の残り飯を電子レンジで温めたものと、尻尾の方から全体の約三割ちよっと焼きすぎて焦げてうわっ苦々なアジの干物、飲み物はセルフサービスで冷蔵庫からお茶or牛乳をお好きなコップにどうぞってそのどこがセルフサービスだ、せめてあとオレンジジュースくらい追加しろ、と言いたいところなのだが、全部ひっくり返していつも通りの相も変わらずな慣れしたんでしまったブレックファストメニューなのであって、今更オレンジジュースなんか出されても逆に疑心暗鬼に陥るだけだから、この欲望はひっそり胸の奥底にしまっておくことにしよう。

俺がひたすら箸に白米やらほぐし白身（三割黒身）を乗せて口に運んでいる間も、横で何やら姉が騒いでいた気もするが、この際オールシカトだ。

耳に入ってくる音声を脳細胞が自動解析しちまったところによると、今も俺の耳に張り付いていやがる半球について騒いでやがるのだからなおのことシカトだ。

残念だったな、どんなに騒いだって知らないもんを教えろなんて要求は俺に限らず通るはずがない。無理なもんは無理だ。だからシカトだ。ざまーみろ。

さて、飯も食い終わったし、残りの準備もしてさっさと行くとするか。

姉は結局俺が家を出るまで騒いでいた。最初は母さんも興味を持って姉の話を聞いていたようだったが、飯を食い終わる頃には俺同様、完全無視の回避体勢に入ったようで、テレビの中でニュースキヤスターが黙々と伝聞している＞民家に大穴！？謎の巨大生物くなんて今が朝なのか昼なのか分かんなくなるようなニュースに耳も目

も傾けていた。

そんなもんいるわけないだろう、と思ってたのも少し前の出来事で、今何をしているのかと言うと、古めかしいのか掃除がされてないのか際どい感じの校門をちょうど通り過ぎたところだ。

正直なところ、突然過去に行ったり、謎の半球があったりしたせいで、もしや登校途中にも何か起こるんじゃないだろうかと内心ヒヤヒヤしてたのだが、これが期待外れというかなんとか、まったく何も起こらなくてほっとしたというか残念だったというか、とにかくなんとなく釈然としない感覚が突然俺の中に住みつきだしやがったんだから困りもんだ。

ムシャクシャしたまま駐輪場にチャリを施錠そして放置、校舎の壁沿いに歩き昇降口へと入り外履きから上履きへとフォームチェンジ、苛立ちとだるさを同時に感じながら階段を登り、できるだけ音をたてないようにして教室の引き戸を開け、内部へと足を踏み入れた直後、思い思いにグループを作って話をしているA組の連中が視界に入ったのだが、そのまた直後、俺の視界にでかでかと映し出された上がり目尻の大きなぱっちり二重を見た途端イライラが倍増したのだからだろう。

「遅いわよ、進！まったく、高校登校二日目でこんな遅刻ギリギリに来る人なんて初めて見たわ」

その原因は、眼前に現れた顔が昨日の夢矢瑠璃そのまんまの顔だったからだ。

というよりおまえは一体何年高校生やってんだ。

「あんたバカじゃないの？あたしはまだ15歳、この国には飛び級制度はありません、ということはあたしが高校生になって一年目、しかもまだ二日目の新米高校生ってのは誰もが知ってるこの世の常識よ」

その蔑むような表情はやめろ。本当に俺はバカなんじゃないかと不安に陥る。

「ま、そんなことはどうでもいいわ」

どうでもいいのかよ。

「いいのよ。それよりも……」

瑠璃はキョロキョロとあたりを確認したあと、距離が近かった顔を、それこそ目と鼻の先と言わんばかりの距離までいきなりグイッと近づけてきて、そして右手を口の前で半筒型にし、小声で、

「……未来人を信じれるようになった？」

どうやら俺のさっきから苛立ちが増したという感情の異変はこのことを予知していたようである。

だが、その予知に気付けなかったためか、更に苛立ちが増してしまい、現在このムシャクシャをどこにぶつけようか検討中だ。

よってただでさえ意味がなかったこの会話は、これ以上続けるのはゲーム機本体を持ってないのに買ってしまった専用ゲームソフトくらいに更に意味が無く、教室を見回した結果ちょうどこの苛立ちを発散させてくれるだろう相手を見つけた俺は、朝の姉同様、しつこく話しかけてくる瑠璃を完全無視し、席に座りつつも仏スマイルを振りまいてる野郎のもとへ、一步一步を敢えて強調しながら歩を進めた。

第二章：その二（後書き）

更新が遅くなりました；もし定期的に読んでいてくれる方がいたら心から感謝しつつ、本当に申し訳ありません。もっと早く投稿できるようにがんばりますんで読んでいてくれる方もそうでない方も宜しくお願いします。

第二章：その三

「おい」

俺がそう呼ぶと、席に座って真逆を向いている仏スマイルがこっちを向いた。そいつはハッとした表情で、

「あ、お早うございます。どうしたんですか？ そんなに険しい表情をして」

三分の一はおまえのせいだ。さあ、昨日のことについて洗いざらいゲロしてもらおうか。

「はて？ 昨日のことと言いますと？」

とぼけんな。

某は肩を竦めながら、

「冗談です。ここでは話し辛いですね。ちょうど先生が来たことですし、ホームルームが終わり次第場所を移動しましょう」

同時に白川が教卓の前に立ったため、俺はひとまず自分の席に戻った。

都合良くホームルームは早めに終わり、それと同時に俺は某とアイコンタクトをとった後、顎で方向を示し、教室を出た。

屋上前の踊場が良いでしょう、と言った某の意見に賛同し、階段を登りきった俺達の現在地は、予定通りの場所だ。

「昨日のことと言いますと、過去について、で宜しいのでしょうか？」

当然だ。

「ですが、教えるも何も、過去に行けると言うのは昨日実体験してもらいましたし、何を話せばいいものやら」

じゃあこっちから聞いてやる。なんで俺を過去に連れて行ったんだ？ あの行動の目的が俺にはドラ○ものの四次元ポケットの中にくつの秘密道具が入ってるのか以上にさっぱり分からん。

「既に答えは言ったはずなんですが、仕方ありませんね。あなたはあの行動によって何がわかりましたか？」

質問に質問で返すな。

しかし、分かったことだと？突然Ｔ字路につれていかれて、学ランがまだ記憶に新しい昔の俺を拝んで、気付けば自分の部屋に居た、って分からない事だらけじゃねえか。

「それを更に短くまとめてみて下さい」

過去に行って、何も分からず帰ってきた。

「ではあなたが分かった事は？」

だから何もわからな……あ。 某は答えは既に言ったと言った。俺らはまだ少ししか会話をしていない。となると答えになりそうな言葉は片手の指で足りるくらいしかなく、むしろ人差し指だけで足りる。

過去に行って戻ってきた。そこから仕入れた新しい知識とえばなんだ？俺の脳細胞に蓄積されたことの無かった知識。それは、

「過去に…行けること」

俺がそう言うとき某は笑みを一層深くして、

「そうです。そしてあなたにそのことを知って貰うこと、それこそがあの行動の目的です」

そう言うとき某は、あたかも自分は言うべきことは言ったという感じの満足げな表情に変わり、その表情のままファッションショーのモデルよろしく、踵を返そうとしたがそうはいかないのが現実つてもんだ。

俺が引き返そうとする某の肩を掴むと、何とも怪訝そうな表情が振り返り、

「まだ何か？僕が知っていることは話したつもりですが」

何かありまくりだこの野郎。あの行動の目的が俺に過去に行けることを分からせるためだと？おかげでますます謎が深まったじゃねえか。

じゃあその深まった謎が何なのかと言えば、俺にそんなことを分

からせる、今度はその目的が分からなくなっちゃったことであって、それが何なのかなんて毛一本程も検討がつきやしない。

某は片手を顎に置き、悩むような素振りを数秒見せ、

「それは…言うわけにはいきませんね」

俺は更に眉間に皺をよせる。

「いえ、僕の独断ではありません。上からそう言われてしまいました。僕は一見普通に高校生のようですが、とある組織の一員ですね。それも下っ端、端末と言った感じです。僕が独断で判断できるようになるのは…：…そうですね、少なくとも今ではありません」

某は口を閉じると右腕を肘から折り、手首の甲側についてる昨日俺に見せてきた憎きデジタル電波時計を見ると、片方の眉を上げてこちらを見て、

「そろそろ一時間目が始まるようです。早く戻らないと遅れてしまいますよ」

そう言うと某は一度口の両端を持ち上げ、さらに俺の耳を一瞥したあと、踵を返し階段を下りようとしたが、俺の目は今の某の瞳孔の動きを見逃しておらず、よって今頭の中にある三大難解事項の一つを思い出した。

「待て」

某の足がピタッと止まる。さっきの笑顔のまま、

「まだ、何かあるんですか？通学二日目最初の授業に遅刻するというのはできるだけ避けたい事柄なのですが」

某は笑顔なものの、少し眉尻が下がっていてどうやら困っているのは本当らしい。

俺は自分の耳、もとい耳についているなんちゃってピアスを指差し、

「これもおまえの仕業か？」

某は表情を変えず、

「何とも言えませんね。ただそれを外さない方がきっと身のためだ、とは忠告しておきます」

それもお前の上とやらの命令か？

「はい。でも後者には僕の意志も混じっています」

「どうい」

うことだ、と言おうとしたところで一時間目開始の鐘がなり始めた。

「おっと、鳴ってしまいましたね。急がないと」

本日三度目の踵返しを誰の邪魔、主に俺の邪魔なく成功させた某は、羅生門にて老婆に引剥を行って逃げ出した下人に負けないくらいのスピードで階段を駆け下りて行った。

老婆同様、まんまと某に逃げられちゃったわけだ。まだ満足した答えは聞けてないのに、某が速すぎたせいで……。

いや、これは言い訳だな。俺が某を捕まえられなかったのは、決して奴の足が速すぎたからではなく、これ以上聞いても現段階では今以上の答えは得れないだろうと、話している最中の某の笑顔から少しづつ感じ取っていたからだ。

一端思考を止めるとちょうど鐘が鳴り終わったところだった。しまった。俺だって遅れるわけにはいかない。急がねば。

走り去った下人を追いかけるわけではないが、おそらく同じであろう目的地向けて俺は地面を蹴った。

第二章：その三（後書き）

読んで下さった方、本当にありがとうございます。まだまだ小説の世界に足を踏み入れてから幼いもので、自分の文章力の無さにほとほと呆れかえる毎日です。月並み以下の小説かもしれませんが、次からも読んでくれるとありがたいです。評価していただけると、好評、悪評かまわずとびあがるほどうれしいです。よかったらお願いします。

第二章：その四

春の日差しと言うのはなんとも快い睡魔を脳内に降臨させ、授業に集中しようとしている純粋な生徒達ですらその魔の手を防ぐことができないときがあるのだから末恐ろしい。そんな姿の見えない魔との永遠かとも思われる戦いを戦い抜いて、ノートを閉じて一息ついた今の時間は12時50分、そう、学校生活の中で唯一、羽を広げて堂々と長時間休息を取ることのできる、俗に言う”昼休み”の到来である。

よくがんばった、俺。何回も負けそうになった中、よくぞ耐え続けた。ノートの真ん中くらいからの字が、まるでミミズがのた打ち回ったようになってるが、それは戦いの痕跡であり、断じて言うが、決してパタリと夢の中にGOしたわけではないのであしからず。背伸びをしてもう一息ついた俺は天井を見た。所々傷が付いたり黒ずんでいたりするのを見ると、この学校が無駄に長い歴史を踏んできたのだなあと思わされる。

それと同時に朝の出来事を思い出した。

あのあと韋駄天に負けず劣らずの速さで階段を駆け下り左に曲がって突き当たりの教室の前まで来た俺は、一度深呼吸した後ドアを開こうとしたのだが、何やら中が騒がしい。

瞬時にその原因を二つ程考え、意を決したにも関わらず静かにドアを開けた俺の目に飛び込んで来た、数人のビクツとした表情と、お構いなしに笑い声をあげたりしながら喋っている数組のグループがいると言う光景を認識・分析した結果、ああ、まだ先生は来てなかったか、と安堵の息をつき、俺は自分の席についた。

そんな出来事も、もう4時間半前の事なのであって、徐々に時間の流れを早く感じつつあるのは、15年生きた証と言ったところであらうか。

視線を床と水平になるまでもどしたところで、体内から空腹を知

らせる鳴き声が聞こえた。さて、飯を食うとするか。

インスタント食品の宝石箱や、とどこかのグルメリポーターが言いそうな弁当を半分ほど空にしたとき、目の前を肩に鞆を背負った奴が通り過ぎようとしたのだが、ちよつと待て、鞆？まだ下校には二時限ほど早いはずだ、となると、と考えたところで早退と言う二文字の漢字が俺の頭の中を横スクロールしていった。

入学二日目から早退するなんてどこのどいつだ？と自分も似たような事をしたのにも関わらず、目線を上げてみると、意外や意外、昨日知り合った万年健康児そうな男、谷川だった。

熱でも出したのか？

「ちげーよ、俺んちのじじいが倒れたんだと」
なるほど、それで早退か。大変だな。

「まったくだ。通学中に出動命令はできるだけ止めろつつったのにあの野郎」

出動命令？

「いや、こっちの話だ、気にすんな。じゃあ急ぐからじゃあな」
そう言って谷川は廊下を走って行った。

呼び出しの事を面白い言い方で表現するやつだなあと思いつつ、時計を見たらなんと残り時間が少ないではないか！急いで食わねば！俺は箸に力を込め、残り半分ほどのインスタント軍団を口にかき込んだ。

このときの俺はそういえば瑠璃がいないと言う事を大して気にしなかった。

程なくして瑠璃は帰ってきたのだが、なんだか疲れたような表情をしていた。まあ気にする必要はあるまい。むしろ嬉しいくらいだ。あの状態なら爆裂未来人話をする気にもなれないだろう。うむ、平和が一番だ。

睡魔との戦い午後の部で見事完敗を期したせいもあってか、あつという間に帰りのショートホームルーム終了の時間になったため、のんびりと帰りの支度をしていたのだが、ふと昨日この時間帯何があったかを思い出し、まさかと思いつつ教室内をキョロキョロと見回した俺の目に予想した人物の姿が写らなかったため、本日二度目の安堵の息を今日の疲れと苛立ちと睡魔に負けた敗北感と一緒に全部アメリカ西海岸くらいまでぶっ飛ばすようなつもりで吐いた。

もちろん校門の影にそいつが隠れて待っているなんて、どんなベタなラブコメだってもうちょいマシな展開を作るだろう、みたいなことは起こりうるわけがなく、また俺にとってやつはラブコメとは地球の裏側に行けてしまうくらい遠い存在なため、絶対に起こって欲しくない。

そんな思いを今回は神様も聞き入れてくれたようで、スムーズに帰宅の家路につくことができた。

俺の家は高校からさほど遠くはなく、自転車を買いに行くのは面倒だ、と母さんに言われたのもあってか、登下校をそれぞれ20分程かけて遊歩している。

そして今はだいたい中間地点、住宅街の中を絶賛行進中だ。

珍しく何も起きないで（とは言っても何か起きたのは昨日だけなのだが）オリジナル通学路を徒歩逆走しているうちに、耳につけている謎ピアスの存在をすっかり忘れてしまっていた俺は、突然目の前に現れた怪奇現象に出会った途端、全身の身の毛がよだつを感じた。

すぐ目の前で蜃気楼ともスライムとも呼べるような物体とは呼べない物体が蠢いていた。

それは地面に垂直で浮かんでいる平面体のようで、直径2メートル程の円状物体。かといって物体とは言えない気がするのは、その

色彩がこの先に続く住宅街と酷似しているからである。

つまりそれは透明なのだ。そしてよくファンタジーの世界で使われる言葉を引用して表現すれば、空間が歪んでいるのだ。

おいおいおいおい、なんだこれは。こんな現象今まで見たことも聞いたこともない。ハッキリ言って俺、今大パニック。

どうする？逃げ出すべきか？でもここ通らないとかなり遠回りになるんだよなあ……って違う違う違う！何を考えているんだ俺！きつとこれは触れたり近づいたりこのまま止まったりしてたらぐわっ！って包み込まれて気がついたらファンタジーな物語スタートかぼっくり逝ってらサヨウナラ々な展開が待ち受けているんだ違いない！きつとそうに違いない！なら残る選択肢は一つ！

「逃げるが勝ち！！」

俺は踵を返し走り出そうと後ろ足をアスファルトに踏み込んだ、が、その瞬間。

「グギギヤガラガアアア！！？」

耳をつんざくような悲鳴ともとれるような雄叫びが聞こえ、身を竦ませた俺は即座に後ろに振り返った。

長い牙を上下に二本ずつ生やし、人一人丸ごと飲み込めそうなくらい縦に大きく開いた猛獣類と思われる口が眼前に迫っていた。

第二章：その四（後書き）

スローテンポな小説ですが、これからもよろしく願います。評
価お待ちしております。

第三章：その一

「うおっ!？」

眼前の牙が残すところあと5センチ弱!やばいこのままじゃほんとにぼっくり逝ってらサヨウナラそしてコンニチワ黄泉の国な状態になっちまう!と軽く、且つ重くパニックに落ちた俺が目を閉じようとしたその直前、俺の足が誰かに引っ張られたわけでもないのに独りでに後ろへとバックステップを踏み、少し視線が下に下がったかと思いきや、今度は急激な速度で浮上、そして現在に至るわけだ。だが5メートル程浮いたところでだんだんと速度が落ちていき、そして止まった俺の体が起こした次の動作は落下行動だった。

下を見るとさっきまで眼前に迫っていた牙の持ち主だと思われるやつがこちらを見上げているのだが、なんといってもそのなかさ!大きめのワゴン車よりも二回り程でかいってそれは、もう何に対しておかあは考える暇がないので思いつかないがとりあえず卑怯だ。

そいつは俺に向かってまた口を縦に開き、喉を震わせた、はずなのだが、何故か音が聞こえない。

それすら考える暇もなくまた勝手に俺の体がいきなり肘を下に突き出し、体を横にした体勢が変わって、もう何が何だかさっぱりわからない。

俺の体はそのままぐんぐんと速度をあげて落下していき、どんどん近づく怪物が口を開ききる前に、突き出した肘をそいつの眉間に叩き込んだ。

ガコツという鈍い音と怪物の悲鳴が同時に響いたと思ったら、すぐ静かになった怪物はそのままその巨大な体を横に倒した。

俺が地面に降り立ったのと同タイミングで怪物が倒れやがるもんだから、でっかい地震の主要動みたいな揺れが俺を襲い、俺、転倒。俺は地面に尻をついたまま目の前で白目を剥いている毛だらけの巨軀の持つよく見るとマントヒヒみたいな顔をした怪物をぼーっと

眺めていたのだが、この放心状態はあまりにも突然理解不能ことが起きたあとの思考回路停止状態のことを指し、だんだんと思惟能力が復活してきた俺は自分が今とんでもないことに巻き込まれていたことをようやく実感した。

昨日といい今日といい、高校生という一般的な肩書きを持つこの職業はこんなにエキサイティングなものだったのか？それとも俺だけの特別出血大サービスなのか？前者だとしたら俺は一刻も早くこの肩書きを捨てたいが、後者だとしたらこの奇奇怪怪なサービスをくれやがった野郎を相手に裁判を起こしてやる。

他にも考えることは山ほどあったのだが、ビッグマントヒヒの背中の上を見た途端、俺の思考回路は再び停止状態に入った。

毛だらけの背中の上に、体は人間、手・足・首・顔が狼に似た奴、ようは服から出てる部分が全て狼のような奴が、肩膝をついた状態で俺のことを見ていた。

そいつはその金色に光る目を訝しげに細めたあと、俺に向かって跳ねた：ってまあ！？なぜ！？まさかこいつも俺を食おうと！？などと脳内で文字の羅列を展開しているうちに、狼男は俺の前にかにも身軽そうに着地し俺にグッと顔を近づけ、その前に飛び出した口をゆっくり開いた。

やばい！食われる！そう思った俺は両手を交差させるようにして自分の身を守ろうとしたのだが、またもや目を瞑る直前、狼男は予想した行動とは違う行動をとった。

「一般市民に見られちゃいけないんだ。てめえも来い」

言い終わると狼男は不意に俺の手を掴み：って痛い！痛いから！力入れすぎ！そんな俺の悲痛の叫びは完全無視のまま逆の手でビッグマントヒヒの鼻を鷲掴みにし、再び口を開いた。

狼男が発したのは聞き取れないほど早口の言葉の数々。そして最後に、

「クロス」

全体にかかった時間は4秒ほどであろうか。突如視界に写る全ての像が歪み、だんだんとそれは強くなっていった。その歪みは先程俺に向かって突っ込んできたビッグマントヒヒが飛び出してきたあの歪みに似ていたのだが、今回はその規模が違い、なんと視界に写るもの全てだ。これはもう驚く気すら失くさせる。

歪みが強くなっていくにつれ、今まであった住宅街の風景は形を崩し、色を混濁させ、そして最後には真っ暗闇の中に俺はいた。もちろん手は強く握られたままである。

再び狼男の超絶超人早口言葉が聞こえ、そして最後に、

「カタストロフ」

言葉と同時に亀裂が入る音が耳に届く。あたりを見渡せば黒一色の視界に白いひびが入っており、そして広がっていく。たまごの殻が割れるのを内側から見てる感じだ。

ピキッパキッと音をたてながら亀裂が俺らを遠くから包み込むように前にも後ろにも左右にも上下にも、見渡す限りに広がり、そして次の瞬間。

——パリンッ

と鳴ったかどうかは定かではないのだが、まさにそんな音を立ててそんな感じでスローモーションに闇が剥がれ落ちていく。

鳴ったかどうか分からないと言うのも、さっきビッグマントヒヒが吠えた時と同様に、そのときだけ音が何も聞こえなくなったからだ。

音と言うキーワードから連想してふとあるものを思い出した俺は、空いている方の手で自分の耳を触ろうとしたのだが、そのとき目の前を通過しようとした自分の手を見て愕然とした。

俺の手は緑色の輝きを纏っていた。

まさか、と自分の体を一通り見てみると、予想通りと言うか何というか、やはり全身が緑光を纏っていた。

思い返してみれば、さっきビッグマントヒヒの攻撃を避けたときも、俺の動いた後に緑色の光が軌跡を辿っていたような気がする。

当然、トランス状態で身体能力二倍だぜ！なんてRPGめいた冗談を考えられるほど今の俺の脳の許容ゲージはその他もろもろの懸案事項のおかげで余っておらず、残り少ない脳の思考可能部分をフル稼働して真面目に考えたところ、某の言っていた【外さない方が身のため】というのは、まさにこれのことを指していたんじゃないかという結論に至った。

もしあの時、もしくはあの後この粘着ピアスを外していたら、今の俺は美味しく頂けない肉の塊と化していただろう（もちろん食用肉と比較して、という意味だ）。いやはや、運命と言うのは時に残酷だが、時に至福であるようだ。

しかし、そうなるとあのマントヒヒと対峙したときに俺の体を動かしたのはこのピアスと言うことか。瑠璃の言うことを肯定するわけじゃないが、今までの行動言動から推測し、某を未来人と仮定すると、このピアスはおそらく某猫型ロボットがよく使う秘密道具のようなものであるわけだから、日本の未来にそうとうな期待をかけても落ち込むことは無さそうだ。

俺が全身緑色発光体となっている自分の体から目を離すと、

——カチャ

と今度はしっかり音が聞こえ、最後の一片が剥がれ消えたところだった。

最後の一片が剥がれると、真っ白だった視界にだんだんと色が浮かんできた。そしてそれらが段々と鮮明になっていくにつれ、俺は

自分の目を疑った。

視界に写る色と形が完全なものとなったとき、俺が立っていたのは、それこそRPGの世界のような町の大通りの中央だった。

第三章：その一（後書き）

評価・感想・メッセージお待ちしております。

第三章：その二

右を見れば分かりやすくも丸底フラスコに液体が入ったような絵が張り付いてる看板が掲げられている薬屋、左を見ればこれまた分かりやすくも剣と盾が描かれている看板が掲げられている武器屋、前を見ればオール屋台の商店街とでも言いたくなるくらい、食べ物やら装飾品やら得体の知れないものやらを各屋台で売りさばいてる光景が広がり、後ろを見れば近くはないと言った感じの距離にある高台の上に白のレンガ造りの洋風建築Ⅱ城がそびえ立ち、ああ今度是一体なんなんだ、そしてどこなんだ、という俺の思考も虚しく、考えたところでその場では分からないのが昨日からの俺の常識となっちまったため、肩を落とすほどの溜め息と同時に、考えると言う作業自体を止めた。

「ったく、なんでよりによっておまえなんだよ」

ああそういうえば隣には狼野郎が居たんだった。いつの間にか手を離されていたせいで気付かなかった。

俺は特に理由もなく首を回し瞳を動かし狼野郎を視界に入れたのだが、昨日今日で何度目だろうか、そろそろ俺は自分の目に対し不信状態に陥るんじゃないかと即座に考えてしまったくらい、また自分の目を疑った。

本来ならそこに居るべき視界に入るべき瞳に写るべき狼野郎はこの三大‘べき’を一つもクリアせず、代わりにそこにいたのは、昨日あのムカつく仏スマイルが俺に紹介してきた内の一人で今日の昼休み突然早退しやがった自称体力バカ。

谷川昇が、そこにいた。

「よう」

よう、じゃねえ。なんでおまえがここにいやがる。

「あ？さっきからずっと一緒に居ただろが」

何を言ってるんだおまえは？俺がさっきから腕を掴まれてたのは

灰色毛並みの狼野郎であって体力バカの早退野郎じゃない。

「てめえ誰が体力バカだって？まあいい、めんどくせえから結果から言っと、その狼野郎は俺だ」

ははは、面白い冗談だ。面白すぎてちっとも笑えない。

「ムカつくやつだなてめえ。これで信じれるか？」

そう言って谷川は目を閉じた。かと思ったら谷川の周りに風が旋回し始め、その風の強さに一瞬目を閉じた俺が空気の流れの制止と同時に瞼を上げたとき、目の前に立っていたのは突然現れた体力バカではなく、しかし‘服装はまったく同じ’の狼野郎であった。

「もう一回言うぞ？この姿も俺だ」

言い終わると狼野郎の体の毛がどんどん吸い込まれるように縮んでいき、前に伸びた口鼻も縮み、また谷川の姿となった。もちろん服は変わっていない。

「これで信じれたか？」

これはもはや信じる信じないの問題ではない。目の前で変身するのを見せられ、周りはファンタジー街道、そういうことができる空間にいるんだということを認識するか否かという問題だ。一緒じゃねえか、と思うかも知れないが、そこは微妙なニュアンスの違いがあるんだということを手を打って頂きたい。

しかしどうだ？どうやって認識しろと？突然変な場所に連れてこられて、はいここはこういう世界です認めましょう、なんてそんなバカげた話は昨日でこりごりだ。

だが認めないわけにもいかない。だとすると証拠が必要だ。昨日過去の俺が証拠となったのは、それ以外がいまいち信用出来なかったからで、なおかつそれらを肯定する材料が無かったからだ。そして今現在、谷川の変身もファンタジー街道も俺は信用しきれていない。ならばそれらを肯定する材料を見つければいいという結果に行き着くわけだが、現状で最も簡単に手に入る材料、情報、証拠、条件を満たすものなら何でもいい、とにかくそういうものとは何であろうか？俺の常識を打破するための事実とは？

……そうだ。この方法があった。

俺が今まで生きてきた世界において、変身やファンタジー街道なんてのが存在していたなんてことは見たことも聞いたこともない。となると、俺がこれから谷川にする質問に対する答えが俺の予想と同様もしくは上回っていれば、俺は気休め程度には現状が認められるってわけだ。それはつまり、

「谷川、この世界の名前は何て言うんだ？」

この質問に対する答えの予想は未知の名称であり、それは簡潔に言えば異世界だと言うことで、同時に俺が自ら築き上げてきた主観的解釈による常識は脆くも崩れ去る。そうなるとこの異世界の常識を一から作り上げるしかなくなり、そんな俺が最初に知った情報は変身とファンタジー街道、よってそれが常識なんだと解釈せざるを得なく、それらを肯定的に認めざるを得ないと言う寸法だ。

さあ谷川、この質問にどう答える？

「名前？じゃあ逆にこっちから聞くけどよ、てめえが今まで生まれ育ったそっちの世界の名前ってなんだよ？」

これは意外だった。と言うか不意打ちだ。

元はと言えば最初に聞いたのはこっちなのだが、世界の名、と聞かれて即座に思いつくほど俺の脳細胞は発達していない。これでは友達に対して得意気に出した複雑すぎるかけ算の答えが実は分からず、なんだか気まずい雰囲気になってしまったどうしようというあの雰囲気と同じになってしまおう、とそこまで考えたところである固有名詞をふと思いついた。

「地球……じゃないのか？」

谷川は一度小さく溜め息をついた後、

「それは星の名前だ馬鹿野郎」

いいか、と谷川は前置きし、

「てめえが慣れたんだと思ってる世界に名前がねえのと同じように俺らが今立ってるこの世界にだって名前はねえ。だけど今ので氣付いたと思うがここはさっきまで居た世界とは違う世界だ。そんで

それがてめえの質問に対する答えだこの野郎」

言い切ると、谷川は険しい表情のまま踵を返し、背後にそびえ立つ通称‘城’に向かって歩き出した。

「ついて来い。詳しい説明は今から会う奴にしてもらえ。ったくめんどくせえ」

詳しい説明……か。どこまで聞けるか分からないが、とにかくできるだけ多く知らなければいけない気がするな。なんとなくだが。

しばらく歩くと、と言うか本当にしばらくだ。

見た目よりも随分長いこの一本道は、城に到着するまで俺の体に乳酸と疲労感を溜めさせ続け、さらに、イカレた太陽が春にも関わらずやんなくてもいいのに惜しみなく降り注がせる全方位型熱式光線との相乗効果で汗が止まらねえじゃねえかこの野郎。もういつそのこと冬まで休んで冬になったときに初めて丁度良い感じに地球を暖めてくれれば俺的には万々歳だ。

「何ぶつぶつ言ってるんだ？ ついたぞ」

気付けばすでに城の門の前まで来ていた。というか、

「でかすぎねえか？」

その門の高さと言えば、首を真上に上げてようやく上限が見えるくらいで、横幅は電車十数両分、これでまさかパーパークラフトなわけが無いだろうから厚さも相当なものだろう。

谷川は振り向き、

「その分侵入は絶対不可能だ。中にいる奴らは安全にのんびり暮らしやがってるんだからムカつく。あいつらも力あんだからたまには外出て走り回れそして死ね」

……まあなんというか、個人的な愚痴のようなので取り敢えず流しておくのが得策と言うものだろう。

「てめえもそう思うだろ？」

ふるのかよ！ ていうか知るかよ！

などとそんなことを言ってはダメだ。言おうものならおそろくこ

いつは逆ギレするに違いない。平和が一番、ピースイズベストだ。ここは取り敢えず賛同しておこう。

「あ、ああ、そうだな。さっさと死ねばいいのにな」

しまった、不自然だったか？

いや、大丈夫そうだ。谷川の顔からなんとなくだが陰が抜けてるように見える。見ろ、口元に笑みまで浮かべているじゃないか。よし、大成功だ。

「今のはばっちり録音させてもらったぜ。お気の毒にな」

「なんで!？」

という俺の悲痛の叫びもあっさりシカトされ、谷川は扉に手を翳した。中指に何やら光るものが付いているが、指輪か何かだろうか。

「ナンバー……コードネーム、銀狼、帰還した」

反応するように電子音が響く。

『ナンバー確認：照合。声調：照合。網膜：照合。ゲートを開きます』

電子音が切れるのと同時に、ゴゴゴゴという地響きを立てながら巨大な二枚扉がゆっくりと両側スライド式で開いていく。

「見とれてねえでいくぞ。俺の服掴んでろよ。じゃねえと潰されっぞ」

潰されたらたまらないな。圧迫死なんて死に方は前世だろうと来世だろうとごめんだ。……ちよつと昔の嫌な思い出によるものだ。

もうすでに扉に入ろうとしている谷川を見て焦燥感を覚えた俺は、慌てて谷川の服を掴んで、徐々に面積を広げていく闇に足を踏み入れて行った。

第三章：その二（後書き）

感想・評価・メッセージお待ちしております。

第三章：その三

闇は本当のものではなかった。

中を見せないためなのだろうか、どうやら門と同じ厚さだけ光が一切無い空間だったようで、そんな暗闇空間を過ぎると、さきほどのファンタジー街道から見えた城がでかどかと聳え立っていた。

門をくぐるとすぐに、また地響きをたてながら背後の闇が閉ざされ、きつともうしばらくの間、元の世界には戻れないんだろうな、と感じた今日この頃である。

「いつまで肩搦んでんだこのタコ。うっとうしいったらありやしない」

ああ、すまない。今退け……って掃うな！

「てめえがさっさと退けねえからだ。とりあえずついて来い」

そう言って谷川は歩き出した。聳え立つ城に入るための正面の扉へと。

なんか気に入らないが、ここで逆らうと元の世界に戻る可能性が無くなりそうだと脳内で黄色信号が高速点滅を始めたので、致し方なくついて行くことにした。

一般家庭の玄関扉と比べれば、うおっ！でかい！と思えるような扉の前で谷川が電子音といくつかの質疑応答を繰り返すと、意外と早く扉は開いた。

入ってすぐの部屋は、豊何十豊分か検討も付かないような、豪華な彩色が施された絨毯が敷いてある広間になっており、中央には幅10メートルはある大理石風な階段、壁には数メートル置きに扉が付いていることから、この広間はおそらくエントランスのようなもののだろうと推測できる。

だがそれ以上じっくり見る暇は、前を俺お構いなしに競歩のようなスピードで階段を登って行く体力バカのせいで俺には与えられず、

説明の一つでもないのかと思いつつ、やはりここで逆らうと（中略、P C十行目参照）、致し方なく階段を登り始めた。

階段を登りきると、他の扉よりも大きい扉が目の前に現れた。

それを谷川は何のためらいも無く開くと、再び歩を進める。進めながら、

「おら！掟どおり連れてきたぞ！さっさとこいつに説明しやがれ！俺は休むからな！」

すると、十数メートル先の……玉座？だろうか、いかにも！と言えるような派手に金色に輝く椅子に、王冠こそはつけていないものの、これまたいかにも！と言ってもおかしくないような王様らしき初老の人物が立ち上がり、柔和な笑顔を作り、

「その減らず口は相変わらずだな銀狼。兵達、どうやら銀狼は疲れているようだから、いつものお仕置き部屋に連れて行きなさい」

「はっ！！！」

声が響くと、どこに隠れていたのか、鎧こそ付けていないものの、軽い防具らしきものを身に付け、短い両刃の剣と盾を持った連中がわんさか出て来た。

「へっ！そう何回も捕まってたまるかってんだ！」

声と同時に谷川の周りを風が旋回し始め、止んだときには灰色の毛並みを持った二足歩行狼の姿になっていた。

だが、その姿が見えたのも一瞬で、一回瞬きをする間に、谷川（狼）はもうすでに背後の扉を飛び出していた。

「待てー！」

「そっちへ行ったぞー！」

「観念しろー！」

などと言った言葉が聞こえてくるのだが、なんにせよ賑やかなのはいいことだということにしておこう。

「さて、進君と言ったかな？」

低く重みがあり、しかし優しさを含んだような声がした方を振り

向くと、予想通り王様（仮）がいた。

「君はあの犬からどれほど聞いているかね？」

どれほどと言われても、一体何を言われただろうか？

思い出せ、俺。谷川は確か、自分が狼に変身できる能力があるということと、この世界が俺がさっきまでいた世界とは違うということと言った筈だ。

だが、これだけで何が分かったって言うんだ王様？

「あの馬鹿め、話せることは話しておけと言ったのに」

王様（仮）は、おほん、と咳払いをして、

「それではここがどこなのか、我々はそして君が何をすべきかを教えよう」

「君は自分が寝たあと何をしてるか知っているかね？」

人が睡眠状態や気絶状態の時など、意識が無い状態の時、一般的には生命維持のための最低限活動への指示を除いて脳活動が休止状態になっており、つまり意識は存在せずに肉体はその場にあると思われる。

「だが、実際はそうではない」

睡眠的無意識状態のとき、実際は肉体こそその場に残るものの、本来形を持たないはずの精神は己の肉体を細部まで模写し、物理的な移動法とは違う概念で、別世界へと空間転移する。

「そして、ここがその別世界だ。精神世界とでも言おうか」

面白いことを教えよう。精神世界では元の世界の記憶はあるが、元の世界に戻ったとき、ここにいた記憶は無くなる。だが元の世界に記憶を持っていける唯一の手段がある。

「それが、夢だ」

この世界は俗に言うRPGとよく似ていて、武器や防具、アイテムなどを駆使して、郊外に現れるモンスターを倒すことが、精神世界にいる間の最大の娯楽のひとつで最高の収入源である。

精神世界のもうひとつの最大の娯楽は『アトラクション』と呼ば

れ、資金を消費して自分の深層心理を覗くことができ、これが世間一般で言う夢の真相だ。

「だが『アトラクション』は完全に安全なものとは言えないのだ」悪夢、と呼ばれる夢がある。これは深層心理にマイナスの感情があることを『イーター』と言う姿見えぬ異形の怪物に知られ侵食されたときに起こるもので、『イーター』は夢主のマイナスの感情を食うことで力を増幅させ、ある程度力を蓄えたところで“外”へ出る。

「マイナスの感情を食うとは言っても、奴らの“食う”とはマイナスの感情を増幅させることを意味するのだがな」

そのまま放っておけば、奴らはこの精神世界で暴れ、破壊し、殺戮を行う。

精神世界でたとえ死んでも、元の世界では死ぬことはないが、何かしらの後遺症がでることになる。

「それを防ぐのが我々の役目」

その組織名は『デストロイ』。この城にいる者は全員がその一員であり、中でも優秀な者が実際の『イーター』討伐に出かけるわけだ。谷川も討伐員の一人である。

「ここまでは理解いただけたかな？」

率直に言うと、ずばり“無理”だ。いくら説明を受けると聞いていたとしても、それが始めから終わりまでみごとSFチックな内容だと、脳細胞一個一個が何回も何回も首を横に振る光景を幻視してのような気がしてならない。

これからもこんなことが続いていくのだろうか。過去に飛ばされ異世界に飛ばされ、今度は何処に飛ばされるのだろうか。宇宙か？それとも……。

いや、考えるだけ無駄と言うやつだろう。そんなこと考えて現実逃避するより先に現状をどうにかしなければ。

王様（仮）の言ったことをまとめれば、ここは異世界で、王様（

仮）達は正義の組織で、悪者を追っ払う役目にあると言うことらしいのだが、どうもそれを認識するのに頭が追いつかない。

一番の謎は何故そのことを俺に教えるかだ。成り行き上説明してもらってしまったが、どうしてもそこに、ギャルがケータイにつけまくった結果ケータイよりも大きく重くなってしまったストラップ軍団くらい必要性を感じられないのは俺だけであろうか？

「では、ここからが本題だ」

前置き長っ！などと突っ込んでいる場合ではない。本題の方が長いというのが一般的な文章構成であり、ということはこれからさらに長い時間超絶SFトークをグダグダと脳内に叩き込まなきゃいけないのかと考えると、全身から名前に“気”がつくもの全てが、成仏していく憑依霊のように抜けていくような予感がして、俺、ため息。

「そんな疲弊しきったようなため息をつかなくてもいい。今度はすぐに終わる」

いいか、と王様（仮）は前置きし、

「簡潔に言うと、これから君に『デストロイ』の一員になってもらう」

……は？

「安心したまえ。特別な訓練などはほとんどいらない。だが、まず最初に君が使うことになる武器を決めてもらう」

……はあ？

「おい！彼を武器庫に連れて行け！」

「「はっ！！」」

……はああ！！！！？？

ちちちよつと待て！突然のことすぎて的確な突っ込みができないまま王様（仮）がひとりでに話を進めてしまったが、とりあえず言わせてもらおう、

「何故！？」

と言ったって現状がどうにかならないということは、夜中会社帰

りのOLが後ろで足音をそろえて付いてくる人のことをストーカーだと即座に認識するくらいには分かっている。俺は第六感、OLは聴覚、と使っている感覚器官はやや違うが。

とにかくまず考えろ。何がどうして俺が正義の組織なんかに入らなきゃいけないんだ？俺はそんな、普段は普通の高校生、しかしその実態は……！みたいな肩書きはたとえ大金を払われようが一切欲しいとは思わな……ってやめろ！腕を掴むな！ってああああ！体が持ち上げられ……！！何処に！？何処に行くんですますかいなっぺ！？

渾身の抵抗も虚しく、現在いる場所は、

「武器庫になります」

らしい。確かに壁と平行に並ぶ4つの長い棚には様々な種類の武器であり、誰が見てもこれは武器保管庫か拷問部屋のどちらかにしか見えないであろう。絶対に後者であってほしくはないところだ。

……で、どうしろと？

「まずはご覧下さい」

そう言う俺を担いできた兵の一人が一步を踏み出した。その先にあるのは、……的？

「ではいきます」

彼は背中に背負っていた小型の槍を構えると目を瞑り、

「はっ！」

目を一気にこれでもかと言わんばかりに開くと、同時に槍を突き出した。

槍が伸び、刺突音が響いた。

いや、槍が、というのは間違っているのかもしれない。槍自体はそのままなのだが、その穂先から青白い槍と同じ太さの何かが突き出て伸び、遠くにある的の中心に突き刺さっていた。

兵が持っていた槍を手前に引くと、青白い何かは溶けるように消えていき、兵が槍を立てたときにはもうすでに的には何も突き刺さ

っておらず、ただ穴が開いているだけだった。

「ここは精神の世界です。そのせいでかは知りませんが、自分のイメージで武器を強化したり、オプションを付けたりすることが出来ます。ですが、それは自分に合った武器のみの話で、合わない武器だどのようなイメージも効果を示しません。熟練者になれば向この世界でも使うことができますが、大抵の人はこの世界でしか使うことができません。では今からあなた様に合う武器を探していきます」

そう言うと、話していた兵とは別の兵が一番左の棚の一番近いところから、黒く光るL字型の何かを二つ持ってきた。近づくにつれ段々とはっきり見えるようになってきたそれは、

「ではまずこの二丁拳銃から試してみましょう」

そう言って手渡されたそれらは案外重く、ちようど両手にダンベルを持つているような感じだ。

しかし、一体どうすればいいのだろうか？さっきの青白い光のようなものを想像すればいいのだろうか？

「その拳銃には弾が装填されていません。なので弾を想像してください。あなたが考えることのできる最大限の威力を誇る弾丸を」
まあ何はともあれものは試した。当たった瞬間爆発するような小型ロケットランチャー弾みたいのならおそらく強大威力だろう。

俺は二丁拳銃を地面に水平に横にして持ち、銃口が上下の二段になるようにし、谷川や兵の真似で目を瞑り、そして、

「うりゃあ！」

目を開けると同時に、右手と左手の引き金を一気に引き絞った。

直後、強烈な爆風が俺らを襲った。

順序を追って話すところだ。引き金を引き絞ったあとに弾丸は見えず、その代わり俺が狙った的からはずれたやや上の方の壁で打撃音が響いたかと思うと、その音が響き終わる前に壁に穴とひびと橙

赤色の光が現れ、光は規模を増し爆発となり、爆発が勢力を伸ばし大爆発となるころには、爆風が俺らを後方にすっ飛ばしていた、と言った感じた。

ちよつと待て、なんだこれは？こんな聞いてないぞ？さっきの槍と全然違うじゃないか。

「い、一回目から、しかもこんな…ありえ…いや、でもたまたまと言うことだつて」

聞こえた声は槍を使った兵のものだろう。

打って少々痛い腰を上げあたりを見渡すと、腰を抜かしたように地面に尻を付けている槍兵と目があつた。

確か自分に合った武器じゃないとだめとか言ってたが、果たしてこんな簡単に見つかつてしまつて、誰に対してかは分からないがいいのだろうか？

「合つた武器、と申しまして何も一つだけとは限らないのです。ですが、それにしつたつて最初から適合武器が見つかるというのは前例が有りません」

槍兵は目を丸くしていて、その場から動く気配がない。

「爆発音が聞こえたから何事かと思えば、もう見つかつたのか。何はともあれ、早く見つかつたのはいいことだ。谷川のときなんか2日くらい籠（こも）りっぱなしだったからな」

突然背後から声が聞こえたので振り向くと、そこには赤いマントを羽織つたシルエツト、王様（仮）がいた。

「では、次の作業に入るとしよう」

そういうと王様（仮）はマントの内側から、掌に収まるくらいの黒く平たい直方体を取り出し、その側面を親指で押した。

『……ジ……ジジ……あ、ああ、そうだな。さっさと死ねばいいのにな……ジ……』

……！！？そ、そそそれは！！？

「進君。出会つた初日から申し訳なく思う。そして残念にも思うよ」
王様（仮）は笑顔のままだ。

「兵達、彼もお仕置き部屋へ」

「「はっ!!」」

「うわあああああ!!?!?!?」

俺は叫んだが、逃げ場はどこにも無かった。

第三章：その三（後書き）

評価・感想・メッセージお待ちしております。

第三章：その四

「なんかてめえと俺でタッグ組むことになっちまったが、あの糞白髭ジジイの言うことだから気にすんな。意識することねえ、必要なときは呼ぶから普通に高校生やってろ」

そう言い終わるや否や、谷川は右足を軸に後方180度回転。そそくさとアスファルトを夕日に向かって歩いて行ってしまった。

さて俺はどうするかなどと考えたところで、選択可能な解答は“帰宅”の二字熟語に限定されているため、言葉通りの行動を実行するより他ない。

俺は無駄にしつこく残り続けようとする陽光を背に、再び帰宅の家路を歩き始めた。

あの後（思い出したくもないお仕置きのことである）いつの間にか意識を失っていた俺が目覚ますと背中に柔らかな感触があり、何事かと振り返るとそれはベッドで、そこでようやくお仕置きが終わったのだと理解した俺は、追憶による身震いと既過による安堵のため息とを同時に行うという高等技術を行った。

横を見ればまだ谷川がうなされており、これからは発言に注意しなければ、と新たな心の教訓ができたのは収穫というべきなのだろうか。本来ならあってはならないものな気がしてならない。

しばらくすると谷川はベッドから跳ね上がるように起き、

「……はっ！ぱ、ぱぱぱ、パイナップル！？」

などと訳の分からないことを叫びながら両手の肘を90度にして80年代のおもちゃロボットののようにカクカク上下させている。余程辛いお仕置きだったのだろう。お気の毒である。

谷川はその状態で部屋を2〜3周ほどすると元に戻り、しかし俺のことを見るや否や頭を抱えて俺に背を向け何やらぶつぶつ言い出した。忙しいやつだ、本当に。

その後すぐに兵が一人部屋に入ってきて谷川を見て可哀想なものを見る目になったあと、俺に、少し訓練をしましょう、と言ってそのまま郊外まで連れていかれた。

出てくる小動物、もといモンスター達を倒しているうちに力の制御ができるようになってはきたが、狙いの正確さにまだ自信がない。そのうち慣れますよ、と言われて城まで帰ってくると、さすがにもう谷川の状態は普通に返っていた。

だが、俺を見つけると狼時に負けず劣らずのスピードで俺に詰め寄ってきて、

「てめえ向こうの世界でさっきのことぜってえ言うんじゃねえぞ」
と鬼のような形相で言ってきたのだが一体何のことやら。

その後兵のひとりから俺の二丁拳銃専用のホルスターを渡され、それを腰に巻き拳銃を指した状態で元の世界に戻れば、次この世界に來たときホルスターと拳銃が装着された状態で存在することができる、と言われたので素直にそうした。

あとは來たときと（たぶん）同じ方法でこの世界へと戻り、冒頭の部分へと続くというわけだ。

それにしても、今はずいぶんと落ち着いている。人間の環境適応能力というものは計り知れないな。まだ非日常に足を踏み入れてから二日だというのに、昨日と今日では精神的な部分がかなり違う。

こうなったらもう並大抵のことじゃ驚かない自信がある。普通のサプライズよ、どーんと來たまえ。

さて、そうこうしているうちに家についたな。さすがに家の中まで非日常は侵食していないだろう。

俺は一度ため息をつき、ふと学校の方に視線をやると、何やら青い光が一瞬屋上付近に瞬いた気がしたのだが、どうせ谷川か某か気のせいなのいずれだろう。明日にでも何があったか聞けばいい。

俺は誰もいないアスファルトに向かい一度肩を竦めると、開きなれたドアを開け、中へと入っていった。

現在時刻は8時10分。場所は開かれた門の前であり、門の横の表札には“朗安高校”と書いてある。言わずもがな通学途中である。ほぼ完了してはいるが。

来る途中であるひとつの事柄が脳裏に浮かんだ。時間旅行者某も正義組織一員狼野郎谷川も、どちらも一昨日俺に自己紹介してきたやつなのである。これが偶然でないとすれば（というかもはや必然としか思えないのだが）、俺に自己紹介してきたもう一人の黒縁幅広メガネ、張とかいうあの男も非日常人種の可能性が高い。というかきつとそうに違いない。

根拠無しの完璧な推測を脳内で何度も繰り返しながら教室のドアを開ければ目的の人物はすぐに見つかった。

距離的には今いるこの入り口から10歩も掛からないはずだ。さあその正体を暴いてやるぞ、このナルシストメガネめ。

だがそんなたった数歩の間、忘れた頃に出現する奴がいた。

「何ニヤニヤしてんのよ気持ち悪い。それとも何？　ようやく認める気になった？」

夢矢瑠璃である。

そういえばこいつも一昨日俺に自己紹介してやつの一人だが、こいつはたぶん非日常人種ではない。こいつで非日常なのはその爽やかな頭の中だけだろうし、そうでなくともこいつが当事者ではないのは一昨日の会話からも明確になっている。こいつは未来人に、会っただけ、なのだから。

とにかく邪魔だ。おまえに用はない。

「ふん、何よ偉そうに。あーそうですか。わかりましたー」

瑠璃はもう一度、ふん、と分かりやすく拗ねて自分の席へと戻っていった。

余計な邪魔が入った。残り時間は5分ほどしかない。急がねば。俺はそのまま行けばおそらく競歩世界記録を塗り替えられるだろうばかりの速さで張の机の前まで行き、回りの奴らが聞いてないのを確認してから、無表情にこちらを見上げるメガネ面に顔を近づけ

なるべく小さな声で言った。

「で、おまえはどんな属性を持ってるんだ？」

張は肩眉をピクリと上げ、

「何を言っているのか分からないな。文脈を通して喋りたまえ」

くそ、昨日も少し思っただが、こいつやはりムカつく。

いや、だが今のは確かに俺が悪い。あれで理解し、答えろという方が無理だ。

俺はもつとわかりやすく、かつ周囲のやつらにはばれないようにするにはどうしたらいいかを考え、再び小声で言った。

「お前も某や谷川みたいな人種なのか？」

「張君は一般人ですよ」

答えは意外なところから来た。

「彼は僕らの一般人としての協力者です。主に資金方面での。いろいろな裏での手回しも彼にやってもらっています」

声のした方を向けばそこには相変わらずの目を弓にした笑顔の持ち主がいた。

「ふん、私をこいつらのような変質者と同じにされては困る。私は見た目どおりに将来有望、行く行くはわが父の会社を継ぎ、一大企業とグループを統制、繁栄させる義務と能力があつてだな……」

なんだか長そうな話が始まったのでこちらの方に対する意識はシヤットダウンすることにしよう。質問に答えてくれそうな奴ならすぐ隣に微笑みながら突っ立ってやがるからな。

さて、何から聞こうか。そうだなまずは、

「協力者ってどういうことだ」

「はい。僕達時間駐在員はそれぞれの時間に入ったあとは上からの援助を得ることができません。よってその時間ごとに協力してくれる人、または家を見つけないといけないのですが、そう簡単に見つかるものではありません。そこで僕の先代の方達は大昔の有力貴族達数家系を味方につけることに成功し、その本家の血筋に協力してもらえよう契約を交わしています」

時間駐在員？

「ああ、そういえば教えていませんでしたね。薄々感づいているとは思いますが、僕はこの時間層よりも未来から派遣された、言うなればエージェントといったところでしょうか、まあそういう感じの存在なのですよ」

某はまだぶつぶつ言っている張の方を一瞥し、

「彼の言っていることはほぼ事実です。少々自己陶醉してる面もありますが、それでもちゃんと現在に生き残るその家系の長男です」
だからこいつはおまえや谷川が特殊人種だってことを知ってるのか？

「そういうことになりますね」

「ふん、分かればいい。それより早く席に着きたまえ不良ども。無能な教師がもうすぐそこまで来ている。貴様らと同類にされるなど全くもって願ひ下げだ」

くそ、やはりこいつムカつく。

俺は何か言い返そうとして口を開こうとしたのだが、そんなときにかぎってタイミング良く現れた白川によって何も言い返せず、結局そのまま席につく破目になった。

悪運強い奴め、お前だって十分変質者だこの野郎。

俺は席につくと、ハッ、と勢い良くため息をついた。

第三章：その四（後書き）

評価・感想・メッセージお待ちしております。

第四章：その一

最悪だ。全くもって最悪だ。

この学校の教育方針は一体どうなってやがる。もし学内アンケートたるものがあるならば、俺はこのことを書いたあげく、さらには大量印刷して計画性のない教師どもに憤怒の申し立てをしてやりたい。

俺がここまで怒ってるというのも、この学校が入学して三日しか経ってない俺らに対して急な授業変更なんかしやがるからである。いきなり朝のショートホームルームで白川が「今日の国語の授業は、担当の先生の都合により急遽家庭科に変わった。教科書を持ってない奴は他のクラスに借りに行くなりして準備すること」なんてことを言ってきたのだが、そのときの俺のテンションはだいたい低めであり、「ああ？」などと言ってしまい、それが内診に響かないかどうか今頃心配し始めた俺である。すぐに、まだ三日目じゃないか、という思考と、高校はほとんどがテストの結果だ、という現実情報が脳裏を同時によぎり、安心したのだが。

しかし、朝の出来事のせいもあってか、俺の苛立ちはそう簡単には消えず、結局そのまま授業には集中できずに4時間を過ごし、現在調理済意図的箱詰食料集合体（弁当）と格闘中である。それにしても、くそ、塩焼き鮭め、どうせ俺に食われるんだから初めから骨無しでいろ。痛っ。

ところで今俺はちよつとした異常事態に巻き込まれている。しかもその対象は俺一人なのであって、これが迷惑でなくて一体なんなのであろうか。

つまり、今俺は他人から見ればお熱い状態春真っ最中、机なんぞくっ付けて二人で昼食を取っているのだが、その相手といえはなんだろうなったか、夢矢瑠璃である。

「何よ、美少女と昼食取れるのがそんなに嬉しいわけ？」

本当の美少女は少なくとも自分をそう呼んだりはいしない。確かに顔はいいのだが。

「まあいいわ。とにかくさっき話したことを整理するわよ。今週の日曜日に未来人探索をするわ。以上」

整理するも何もそれ以外何も言っていなかったじゃねえか。つーか未来人言うな。大声で。

「はン。何を隠す必要があるのよ」

ありすぎて反論する気も失せるくらいだ馬鹿野郎。ああ、クラス中の視線が痛い。違う、違うんだクラスメイト達よ。これは何かの間違いだ。

「何ごちゃごちゃ言ってるのよ。それより集合場所と時間だけど、駅東口前午前10時集合。分かったわね？」

分かるかそんなの。第一、俺に予定があったらどうする気だ。

「無いんでしょ？その口調じゃ。じゃ決定ね。覚えられないならメモっときなさい」

「了解」

突然真後ろから声がしたので振り返ってみれば、そこにいたのは真剣な顔で安物のメモ帳にカリカリとシャーペンを走らせている小学校以来の腐れ縁、竜だった。

「よし、完了っと」

完了じゃねえ！てめえメモって何する気だ！

「決まってんじゃねえか。今をときめく青春ラブストーリー四車線ど真ん中素足激走中の大親友の高校生活少々早すぎるんじゃないか初デートを尾行・調査するつもりだ」

馬鹿のアホ発言に対して突っ込むべきところが何箇所も見つかったのだが、ここは敢えてどれも追求せず、そのかわり馬鹿が誇らしげに持っている大量小型用紙を奪い取り、

「……………！」

無言で何のためらいも無く一気に破り捨てた。

「ぐあ！？俺の“妬み満天奴逆襲用弱みを握ってやるぜ！”ノート

があ!？」

馬鹿が訳の分からないことを言っているので、俺はその略してネタ張を完膚なきまでに粉々に破り捨てた。できるかぎりの無表情で、両手両膝を地面につけてわなわな震えだした馬鹿は放っておいて、本題に移ることにする。

しかし、行きたくないと言ってのけるのはもう骨折り損のくたびれもうけだということが分かった俺に何ができるのだろうか。

妥協である。とりあえずここは一度やらせてくれ、

「はああ……」

うむ、ため息をつくると擬似的にだがすっかりした気分になれる。

そんな俺の色で示せば紫と黒を混ぜて酷くしたような吐息と同時に昼休み終了5分前の鐘が鳴り、これまた同時に瑠璃は勢いよく机を離し、元の位置に戻した。

瑠璃はそのまま席にどかと座ったのだが、なんでずっとニコニコしてんだこいつは。何がどうおかしくなって発言した張本人よりも話を聞いた被害者の方が気を落として周りに気を配らなきゃいかんだ。そのポジティブシンキングを俺にも分けて欲しいものだ。余計な脳内情報はいらないが。

まあ何はともあれ、次の授業は問題になった家庭科である。苛立ちに妥協して他クラスから借りて来た教科書を使うときがようやく来たようだ。早く準備しておこう。

先生がドアを開けた直後、なんとなく気になって後ろを見てみれば瑠璃はまだニコニコ顔だった。

何事もなかったかのように授業を始めた家庭科教師に対し、妥協を重ねに重ねた俺にはもう苛立つとかそんな感情は起こらず、ただただ無感動に板書を写す作業を二時限に亘り続けていたら、時経つのいと速し、もうすでに帰りのショートホームルームである。

曜日にして木曜日。重要な連絡等は金曜日に大量にやってくるのが一般的な学校の慣わしであり、^{なら}どうやらこの学校もその方針を取

り入れているようで、結果ホームルームはカップラーメンにお湯を注いだ後いい感じにふやけてくるまでの時間ほどで号令が掛かり、即帰りとなった。

終わってみて気づいたのだが、俺は今日一日で感情をいくつか無くした気がする。だがそれを取り戻そうなんてことは面倒だから妥協しよう。ああ、妥協が癖になってしまった。

俺が机の中にしまっていた教科書類を鞆に捻じ込んでいると、突如肩を叩かれた。

過去一回の経験から予測するに、これは何か良くないことの前兆である。どうする、振り向くべきか。

俺は恐る恐る背後に振り向き、そこに立っている爽やかスマイルを見て、正逆のどんよりとした気分になった。

「おや、何か悪いことでもしたでしょうか」

そうやって俺の後ろに立つことそのものが悪いことだ。

「なるほど。13が付く某ハードボイルドマンガのマネですね。彼のセリフ有名ですよ。『俺とうじ虫誰だあ!?!』でしたっけ? セリフだけ聞くとまるで精神異常者ではないかと思いますが、その本性は第一話からブリーフ一枚で夜景を眺める変態スナイパーですよ。腕は確かだと聞きましたが、一体何の腕なのでしょう?」

突込みどころ満載だな、おい。とりあえず言っておくと『俺の後ろに立つなあ!?!』だ。後半合ってるような合っていないようなだが、未来人の付け焼刃の知識だろうから大目に見てやろう。

で、何の用だ。

「おっと、危うく本題を忘れてしまうところでした」

忘れてしまえ。どうせろくなことじゃない。

「まあまあそんなこと言わずに。単刀直入に聞きますが、今週の土曜日、空いてますか?」

土曜日、土曜日土曜日……。瑠璃にこじつけられた一方的な約束は日曜日。しまった、何も予定がない。くそ、そんな馬鹿な。

「なんで予定がないことをそんなに悔しがるんですか……。まあい

いです。そんなことより、今週の土曜日の午後2時36分までに、駅前的大型デパートがありますね？その西側出入り口前からデパートから見て左に向かって直進し、二つ目の交差点にあるファミリールレストラン前に来てください」

ま、まて。そんな一氣に言われてもちゃんと行ける自信ないぞ？
というか行くかも分からないぞ？

「大丈夫です。あなたは結果的に行くことになります。僕は30分ごろまでには行くつもりなのであなたがそこでしている用事を終えたら落ち合いましょう。というか必然的に落ち合うんですけどね」
結果的？用事？必然的？全部知ってるような言い方だな。どういうことだ。

「詳しくは機密事項ですので言えません。ただまあ、そうですね、僕があなたが言うところの未来人だからということ手で手を打って頂けないでしょうか？」

手は打てないし、何より釈然としない。しかし、こいつは秘密にしていることは何があっても話さない奴だというのは先日の階段尋問で直感的に明らかになっている。だからここは仕方なく妥協だ。…ああ、まただ。

俺は言葉の代わりに片手を挙げることで、再び持ちかけられた一方的な約束に返事をした。すると某は一度笑みを深くし、そのまま踵を返すと、スタスタという擬音語がまさにぴったり当てはまる歩き方で教室をあとにしていた。

気付けば教室にいる人物は俺一人だけとなっており、そのことに対しても再びため息をついた俺は、氣力を失った猫背のまま今度はとぼとぼという擬音語がぴったり当てはまる歩き方で教室をあとにした。

第四章：その一（後書き）

いつのまにか読者数が2000をゆうに超えていました。読んでく
ださっている皆様、真まことにありがとうございます。これからも粉骨碎
身の努力……とまでは行きませんが、がんばって更新していくので
よろしくお願いします。評価・感想・メッセージお待ちしております。
す。

第四章：その二

「こういうことか……」

目の前のテーブルの上で白い煙を上げ、ジュウウ、となんとも熱そうな音を立てているのはハンバーグ with ミックスベジタブル and 太めのポテト on 鉄板。さらには、薄く盛られたライスと、コップに気泡が付きまくってるコーラがあり、ではここはどこなのかと聞かれれば、二日前の木曜日に某が言っていた“例”のファミレスである。

現在の時刻は2時ちょうど。某の言っていた時刻まではまだ30分以上ある。普通に食べれば十分間に合うだろう。

「家族三人でファミレスなんて久々ねえ」

そう言う母さんはなんとも幸せそうな顔をしてる。

「むきやー！このステーキおいしー！あ、そのサラダちょうだい！むむ、これいけそう、店員さーん！すいませーん！」

五月蠅い。そして恥ずかしい。なぜ休みの日まで周囲の痛い目を浴びなければいけないのか。学校だけでもどっかの顔だけは良い妄言女のせいで十分キツイのに、このばか姉め。

「すいませーん！」

叫ぶな！手を下ろせ！そして呼び鈴を押せ！

「あ、ほんとだ。えへへ、失敗失敗」

俺は姉のおめでたい顔を見ると、思わず、

「はああ……」

溜息が出た。このような姉を持って、疲れることこの上無しである。

しかし、なぜこうなったのだろうか。なぜ、妙にいつもより上機嫌な母さんと、さらにハイテンションだがいつも通りに一本頭のねじが外れてる姉と、三人でファミレスなんぞに昼食を取りに来てるのだろうか。

ことの始まりはだいたい2時間と30分ほど前に遡る――。

「進一。昼食、お母さんとお姉ちゃんの外に食べに行くけどどうするー？あ、ちなみに今カップ麺は切れてて、冷蔵庫はスツカラカンで、他の昼食代をあげる気はサラサラないけどー」

選択肢無えじゃねえか。ようには俺にも付いて来いってことだろ。現在は時にして11時半。体内時計もそろそろお昼時だということとを胃を通じて伝えてきている。もしここで変な反抗心でも起こして外食を拒むようなことがあれば、俺は夜までに、飢えた貧しいストリートチルドレンの仲間入りを果たすだろう。

実際に体験することによって社会科のいい勉強になるだろうか、などということも一瞬考えたが、いかんいかん、これは差別だ。皮肉だ。侮辱だ。うう、なんだか申し訳なくなってきた。今度コンビなどでその手の募金があったらお釣り全額投与しておこう。

とまあ、ここまで考えるのに掛かった時間は5秒弱ほど。直後階下から聞こえてきた「行くのー？行かないのー？」と言う声により思考は中断し、代わりに階下に向かいこう叫んだ。

「行く！行くからちよつと待って！」

俺が着替えその他を姉の妨害を食い止めながらも迅速にすまし、なぜかがつくりと肩を落とし床に人差し指の指先だけで丸を何回も描き始めた姉を尻目に部屋を出て、階段を下り、玄関の扉を開けると、そこには車のキーも持って準備万端の母さんと、

「遅いぞ我が弟よ！もつとてきばき行動しなきゃだめだよーい」

ヘラヘラ笑いながら両腕を水平に伸ばしクネクネさせている姉がいた。

普通ならその怪奇現象に誰であろうと目を丸くし驚愕するものなのだろうが、俺にとってはもう慣れたものである。かと言ってそれはここ5日間くらいにあった超常現象どもによるものではなく、この能天気女が昔からこういうことを軽々とやってのけていたからだ。最初は俺も驚愕し疑問に思ったことなのだが、いくら聞いても姉は

「内緒♪」としか言わず、時間が経つにつれ常識化してしまったため、気が付けば気にならなくなっていた。

そんなことを思い出しているうちに、現在すでに車の中。中古で買った情けなさ漂う黒の軽自動車だ。運転席には母さん、助手席には姉、そして後部座席の中央に俺が乗っている。しかし、乗るたびに思うのだが、この車、少し屋根が低すぎやしないだろうか。普通に座ろうものなら頭が天井に常時ぶつかり、不快指数メーターはゲージのレッドゾーンを易々と超えるだろう。そんなわけで俺はいつも浅めに座り、後ろにふんぞり返りながら脱力している。

迫ってくる交通信号灯が赤に変わり、そのルールに則^{のっと}って我らが黒チビ（車の俺的俗称）は前にいる車に激突しないような距離でゆっくり停止した。

「ふふふ、今日は外食以外にもうひとつ一大イベントがあるのよ」
そういうと母さんは自分の上着のポケットから一つの茶封筒を取り出した。何やら分厚い。

「この日のために溜息つくくらい貯めに貯めたヘソクリを今日は惜しみなく使いまくってやるわ」

“ため”が多いな。というかヘソクリって……もはや死語に近いんじゃないのか？

「というわけで進、お姉ちゃんにはもう話してあるんだけど、外食の前にデパート寄るわよ」

その発言と同時に信号が赤から青へと変わる。母さんは一度口元に笑みを浮かべ、ハンドルを、野球選手が何やら一大決心をした直後のバッターボックスで普段よりも強くグリップを引き搾るときくらいに強く握り、

「レッツバーゲン！」

「イエーッ！」

姉が右手を上げて呼応したのと同時に、アクセルをスペースシャトルロケット発射の勢いで踏み込んだ。

時は金なり、とは本当はこのことを言うのではないだろうか。つまり金を消費する者にとっては時間が早く過ぎるのだが、消費しないでその場にいる者は時間はかえって長く感じ、代わりに両手の負荷が増えていくということだ。と、俺が諺の真の意味を発見したころにはすでに2時間が過ぎており、その金にあたる部分が成り代わった衣服やら何やらがこれでもかと詰め込まれた紙袋の重みを両手に感じつつ、現在地はたった今自動ドアを抜けてきたこのデパートの西側出入り口である。

両手がまるで空の母さんと姉の足取りは、俺の地にめり込みそうな足取りと相反して羽のように軽く、表情もまたしかり。俺は一体何をしているんだろうと虚空に問うてみたが、見えるのは機嫌の良さそうな快晴の空模様ばかりで、何だかひとりぼっちな気がして余計にダークサイドに落ちてしまった。

とりあえず視線をもとの高さに戻すと、1テンポ遅れて年を感じさせない動きで母が振り向き、

「やっぱり男の子がいると助かるわ。ありがとね、進」

無理やり持たせたくせに、なんだその笑顔は。少しは自分でも持とうとしやがれ。

それに対し母さんは人差し指を立て、

「まあまあ、そんな怒らないで。今月の小遣い1000円増やしてあげるから」

そんなので俺の怒りが収まるとでも……。

母さんは中指と薬指も立て、

「3000円、増やしてあげるから」

……まあたまにはこんな肉体労働もいいだろう。

「ふふふ、まだまだお子ちゃまだな、弟よ」

片手を口に当て含み笑いをしている姉はこの際無視するものとしてしよう。

「さて、じゃあ重大イベントは済んだことだし、お昼食へに行くわよ」

母さんは左側を指差し、

「確かこのまま進んで交差点二個分くらいのところにファミレスがあったはずだわ。そこで当初の予定の夕食ね。そんなに距離もないし、歩いていくわよ」

「さんせえい！」

はんたあい。と力なく言ってみたところで完全無視の二人組みは、さっと身を翻す^{ひるがえ}とさっさと歩き始めた。

それにしても、その道のりと目的到達地点は、もうぴったしばかりし、やつの言っていた場所に当てはまるじゃねえか。これを予言してたのか、某のやつめ。

未来人の予言の正確性を認めた俺は、

「はああ……」

と一度溜息をつき、足取りの軽い二人組みについていった。

と、ここまでで過去の回想は終わり、今の時間軸と重なるわけなのだが、このあとのことを考えるとどうしても気が重い。何かあるか知らないから尚のことテンションダウンだ。

だが、腹が減っては戦はできねえんだコンチクショウ、と言うように、戦になるかどうかは知らんが、何かしらが起こる、又は巻き込まれることは確実なため、とりあえず目の前にある挽き肉固め焼きとその他もろもろを頂くことにしよう。

30分ほど時間を掛けて目の前にある品々をたいらげ一息つくと、右側にある窓からガラスを軽く叩く音が2・3回聞こえた。

何事かと思いい外を見れば、そこには俺の視線の動きに合わせてこっちに向かって右手を軽く上げた朗らかスマイルがいた。

「あら、お友達？見たことない顔だわ。高校の？」

俺の視線を追って母さんも外を見ていた。某はその視線に気づくと、笑みを深くして一礼。

「ふーん。お友達ねえ」

姉も外を見ているが、その表情はなぜか訝^{いふか}しげだ。某はその視線

にも気付くと、今度は一瞬顔を強張^{こわば}らせ、しかし笑顔のまま再び一礼した。

某は顔を上げると、自分の左手首に付いている腕時計を一瞥し、そしてファミレス入り口の方を指差すとその方向に歩いていった。良く言えば「こちらに来てください」、悪くいえば「表に出ろ」ということであろうか。

とりあえず外に出なければ話は進まない状況らしい。壁に掛けている時計を見てみれば2時32分を指し示している。悩んでいる暇も無い。

「悪い、ちょっと用事を思い出した。それにさすがに帰り道まで荷物持つ気にはなれない。んじゃ」

そう言って俺は席を立つ。

「え、ちよつと、さっきの子との約束か何か？それならせめて車まで荷物持つて行ってから」

「母さん、いいよ私が持つから。それより進」

歩きかけていた俺は姉の方に振り向く。

「気を付けなよ。それだけ」

姉は滅多に見せない真剣な表情で言う。気を付けなければいけないのは確かなのだが、姉はあの仏スマイルから一体何の違和感を感じ取ったのだろうか。確かにやつ笑顔はよく見れば怪しいのだが、あの一瞬でそれが見抜けるのだろうか。いやはや、謎の多い姉だ。

俺は疑問に思いながらも片手を上げることで姉に返答し、二人に背を向け、入り口に向かって歩き出した。

さあ、このあと何が待ち受けているっていうのか、説明してもらおうじゃねえかニツコリ野郎め。

第四章：その二（後書き）

指摘による文章力アップや好評による自信アップに繋がりたいので、読んで下さった方々の声が聞いてみたい！などと恐縮ながら思ってしまった今日このごろです。評価・感想・メッセージ等どれでもよく、どなたでもいいので、どんな言葉でもお待ちしております！

第四章…その三

入り口の手动扉を開けると、そこには予想どおり、老若男……広い世代の女性達のハートを全部射抜きそうな笑顔を、相変わらず持続中の某が一人。やつは右手を上げ、

「やあどうも。食事は満足のいく物でしたか？」

そして左手は黒のレザーシートに乗せている。いやしかし、レザーシート？自転車か、などと0コンマ数秒ほど考えたが、馬鹿言え。あんなでかいサドルを持った自転車があるか。

ハンドルとシートの間に見えるメタリックガソリンタンク。切るとその爆音故に近所迷惑この上ないマフラー。全体的に流線型を思わせる白の車体。っておいおい、こいつはもう、まさしくあれじゃないか。高校生憧れの的、かどうかは知らんが、少なくとも学校から距離がある生徒にとっちゃ、通学にこの上無いほど利用価値がある、正式名称…大型自動二輪、通称…大型バイクである。

その金属光沢光り輝く姿を見て、かっこいい、と思う反面、非常に疑わしいことがある。それは、

「……おい某、入学6日目でいきなり道路交通法違反とはどういうことだ？それにこんなでかいやつ、一体どこからパクってきやがった？ここまでは堂々と無免許運転か？頼むから事故起こす前にそういうことは止めてくれ。俺はマスコミの容疑者友達インタビューには受け答えたくない」

優しくていつも柔和な笑顔を見せてるやつだったすよ、などとは言わされるのは御免被^{ごめんこうむ}りたい。そんな、こんなに評判が良かった生徒がなぜ？などのような、ニュースを盛り上げるためのマスコミの謀略に手など貸してやるものか。

だが何を思ったか、某のやつは眉根を寄せ、訝しげな表情になりやがった。こいつ、犯罪を犯罪と思っちゃいないのか。非確信犯、恐るべし。無邪気で済まされるレベルではない。

某は少しの間表情に疑念を浮かべていたが、2、3秒ほどで両眉をピクツと上げ、

「……ああなるほど。僕は今はそうでしたね。16歳ですか。高校生ですもんね」

当たり前のことを、今思い出したように言い出した。というか、ん？16？日本の年度制は4月から始まるため、入学早々歳を取るためには、誕生日はその間になければいけない。となると、そうか、こいつ、早生まれか。

まあ確かに、16歳なら大型二輪免許だって取れる年齢だ。大いに取って結構。だが、それにしたって、原付ならともかく、大型となればある程度の日数、教習所に通わなければ試験すら受けられないはずだ……と思う。なんにせよ、今日昨日で誕生日を迎えたようなやつが免許を持っているわけがない。

「ええつとですね。何から話しましょうか。そうですね、まず教習所で教習をうけることができるのは誕生日の2ヶ月前からなんです。あと、合宿というものはご存知でしょうか？」

合宿？

「ええ。合宿とは、数日間泊り込みで教習を受け、普通よりも早く免許を手に入れることができる、特別コースのことです。僕はその終了日が、ちょうど誕生日に重なるように日程を組み、そして免許を取った、とこういうわけです。分かっていただけたでしょうか？」

なんと、そんなものがあったのか。いいことを聞いた。夏休みあたりに受けてみ……だ、だめだ。俺の誕生日は11月だった。くそ、おのれ誕生日。今度会ったらただじゃおかないぞ。

……と、いやまて、某。よもやこんな話をするために、時間まで正確に指定して、俺をこんなところに呼び出したわけじゃないよな。「呼び出すも何も、あなたはどっちにしろ来てたじゃないですか」

いや、ううむ。確かにそれはそうなんだが。

「まあ、そろそろいい頃合いですね。これを」

そういつて某が俺に渡してきたのは、

「ヘルメット……？」

だった。っておいおい、まさか俺にも乗れってんじゃないだろうな。

「そのまさかです。これから行くのは微妙に遠いところなので、バイクで行かないと間に合いません。なのであなたには後ろに乗ってもらいます」

いやいやいや、俺は、急にそんなことを言われて、よっしゃ乗つたるぜい！などと、北朝鮮や、もしくは怪しい研究所の手術台の上などに行く可能性も捨てきれないような跨るまたが乗り物に、そう易々（やすやす）と乗り込むほど、浅はかな男ではない。

「そんなところ行くわけないでしょう」

いや、だがしかし、

「おや、もう残り時間がありませんね。早く乗ってください。10秒以内に」

お、おい。俺はまだ乗るだなんて一言も、

「10、9、8」

って、ええ！？ちょっと待て！俺にだって選択権がまだ、

「7、6、2」

2！？4つ分も飛躍！？うう、ああもう！どうにでもなれ！

俺はヘルメットを頭に被せ、黒光りするレザーシートの後ろの方に跨った。

「1、0。はい、OKです。ええっと、確かあれがもうすぐ来るはずなんです……」

某がシートに座りながらそう言った矢先、目の前の道路を黒の外車が横切った。車体の低さと全体の輝き具合から見て、おそらく高級車だろう。

その外車が目の前をとおりすぎる前に、某はエンジンを入れ、さらにアクセルを絞った。

「あの外車を追います」

突如前に動き出すことによって発生する慣性と、瞬間的にガチン

にも慣れてきて、そこで初めて、本来最初に思いつくべきはずの疑問が頭に浮かんだ。

「某！」

「なんでしょう？」

「あの外車は、いや、あの外車に乗ってる人は一体何者だ！なぜあの車を追いかけるんだ！」

そう。本来はそれが最初に思いつくはずの疑問だ。（俺にとっての）未来を（たぶん）何でも知ってる某が、自ら追おうと言って来ただけに相当な人物に違いない。

「あの外車に乗ってる人ですか？ううん、僕にとっても、あなたにとっても、未来に係のある人物。理由はもう少し行くと分かるかと思います。ということを手を打っていただけますか？」

某が、手を打っていただけますか、と聞いてきたときは、もうそれ以上いくら聞いても教えてくれないことの前触れのようなものだ。よって、これ以上聞くのは無駄だ、と感じた俺は、黙ってシートを掴み、前を見据えた。また少しだけ外車が離れてる。

「ちょっとおしゃべりがすぎましたね。飛ばしますよ」

そう言って某は、さらにアクセルを絞った。

第四章：その三（後書き）

読者数3000突破！呼んでくださってる方々、非常にありがとうございます。
ございます。これからもがんばってください、俺非女をよろしくおね
がいたします！評価・感想・メッセージお待ちしております。

第四章…その四

白塗りボディの車上にて、かれこれ何十分風を浴びていただろうか。すでに大通りは抜け、市街地を通り過ぎ、気付けば人っ子一人見当たらないような、左右に田園が広がり、先が見えないほど延々と続く一車線道路である。

田園では、植えたばかりの稲がときどきそよ風に揺れてたりなんかして、あたりはこんな長閑な風景なのに、その中央を突っ切るように走るのは、黒の外車一台、グレーのワゴン車一台、そして俺と某が絶賛乗車中の白塗りバイク。傍（はた）から見れば、なんとも似つかわしくない光景である。

そんなことくらい俺だって自覚しているのだが、某は追うことしか考えていないらしく、俺に至っては、なんとかバイクと某にしがみつくらいの行動で精一杯。なんとも情けないが、こう見えて俺は今、人生の中で、五本指のどれかには入るくらいの必死さだ。ああ、手が痛い。

それにしても、ヘルメットを被（かぶ）っているとはいえ、必死でバイクと某にしがみついている全身を襲う風と寒さと、そこから来る謎の睡魔に、マジで失神五秒前の俺。だが、なんだかほんわかしてきた頭の中に、雪山で遭難したときのベタな展開が突如浮かび、いかんいかん、ここで寝たら冗談でなく本気で死に至るやもしれん、となんとか身を持ち直した。

そして俺は再び前を見たのだが、何やら前を走るグレーのワゴンの様子がおかしい。何がおかしいのかと言えば、その形状がだ。では、どこがおかしいのだろうか。屋根もビハインドガラスもちゃんとしているし、傷なんかない。

だがしかし、左側のサイドガラスあたりから、何やら先端に光る何かを付けた太めの棒らしきものが突き出している。おかしいのはこれだ。

俺がそれは何か確かめるべく、目を凝らして、ワゴンから突き出ているそれを見たところ、どうやら棒らしきものの正体は腕であることが判明し、そしてその手が持つ光るものの正体は、

「ズガウン!!」

だが、俺の思考が答えに行き着く前に、手が動きを見せ、直後に巨大な破砕音のような音が響いた。どこかで見たことがあると思っただ、音でより正確に分かった。光るものの正体は、拳銃だ。ついこの間、二丁も実際に手に取って見た俺が言うんだから間違いない。いやしかし、おいおい、ちょっと待て。拳銃だと? 発砲だと? 一般人に銃器保有を認めない日本社会において、銃撃だと? まったくもってありえない、と思いたかったが、ワゴンから出る手が放った弾丸が、どうやらみごとに外車の左後ろのタイヤに命中したらしく、一気に空気が抜けるのと同時に、外車はバランスを崩し、そして、スリップし、回転し、横転しかけたところで、外車は道からタイヤを踏み外し、そのまま左の田圃^{たんぼ}に転落した。

幸い、田圃がぬかるみになっているため、車が破損することはなく、そのぬかるみが衝撃緩和剤の役目を果たしたらしい。外車がボンネットを田圃に突き刺した直後に、中から5歳くらいの男の子を抱えた中年の男の人と、おそらくその奥さんであろう女の人が出てきた。

三人はすぐに逃げようとしたのだろうが、田圃から出る前に、止まったワゴンから降りてきた、黒スーツにサングラスという、ずいぶんベタな感じに怪しげな数人の男達が、三人のいく手を塞いだ。そして手には拳銃を持っていて……って、ちよっ、まさか人を撃つ気じゃ……!

「さあ、子供を渡してもらおうか」

そう言いながらスーツの男の一人が拳銃を持ち上げ、子供を抱く父親に銃口を向ける。

「ふざけるな! 誰が貴様らなんかに……!」

父親は子供を庇うように強く抱きしめている。

というか、この状況、どう考えても助けを呼ぶか、助けに行くべきというやつだろう。前者は、周りの風景を見れば、無理なことは一目瞭然だ。となると半自動的に後者を選ぶわけになるのだが、そのくらいのことは某だって気付いてるはずなのに、こいつは何故か動こうとしない。某、おまえなら何かしらできるだろ、早く助けに行くんだ。

「いえ、その必要はありません。今はまだ時期尚早です」

何意味のわからねえこと言ってやがる。拳銃だぞ？人が殺されるかもしれないんだぞ？

「いえ、まだです」

某は俺に背中を向けたままそう言った。

「僕達がすべき仕事はこの後にあります」

死体処理か？冗談じゃない。もういい、何ができるか知らないが、見殺しにするよりはましだ。おまえがいかないなら俺が行かせてもらおう。

俺は事中現場に向かうべく、いそいでバイクを降りようとした。だが、突如肩を掴まれた俺は、立ち上がるタイミングを見失い、再びシートに腰を付けた。

肩に置かれた手を目で辿ると、その腕はやはり某のものであった。
「何しやがる！！離せ、行か……」

俺は肩を掴んでくる手を払いのけようと、その腕を掴み、さらには某を睨もうと顔を上げたのだが、目に映ったのは、いつもの怪しげな微笑ではない、真剣な表情をした某だった。

「今このバイクから降りてはいけません。言い忘れていましたが、このバイクに触れている限りは、同じバイクに触れている者以外は、僕らのことを見ることができません。今見つかつては、先に撃たれるのは僕らです」

なんてことを、いつもはニコニコ仏スマイルの某が、生真面目に真剣な顔になって言うてくるのだから、何故か説得力がある。

俺は某の言ったことに何か反論を言おうとしたのだが、

「止めろ！離せ！祐一！祐一！！」

どうやらまずい状況になってきたらしい。反論を言うのはひとまず置いておき、田圃に突き刺さった外車の方を見ると、父親はスーツの男二人に取り押さえられもがいていて、母親も同様、そして子供は一人の男に担ぎ上げられていた。動かないところを見ると、気絶しているようである。

「行くぞ」

子供を担いだ男がそういうと、他のスーツの男達は一斉に父親と母親を離し、無駄な動き無く、再びワゴンに乗車した。

「待て！行かせてな」

「だまれ」

「ズガウン！！」

再び破碎音が響き、その音は俺らに最悪の事態が起こったことを知らせた。最悪だと思ったからだろうか、俺にはその瞬間がスローモーションに見えた。

子供を担いだスーツの男は、何かを言おうとした父親に対し、言語道断で振り向きざまに、持っていた拳銃を発砲した。その弾丸は、当然のことながら父親の、ここからだとうまくは確認できないが、おそらくは肩か胸のあたりをものの見事に貫通し、それを喰らった父親は、血飛沫ちしぶきを、まるで風に舞い散る真紅の花びらのような鮮血を噴き上げながら、背中から田圃の中に落ちていくように倒れた。

「あなた！！」

ワゴンが走り去った後、母親が、田圃の中、恐怖で体が震えてしまったのだろうか、四つん這いになりながら、泥だらけになりながら、父親の方へと向かって行く。

おい、某。

「ワゴンを追います」

ちよっと待てよ。あの父親らしき人はどうするんだ。

「彼は大丈夫。このあと22分後に救急車が到着。途中で意識を失いますが、心肺機能ともに正常。近くの病院に運ばれて一命を取り

留めます。輸血等の処置の後、彼の意識が回復するのが、今から約17時間20分後。障害は残りません。そして」

某はエンジンをふかせ、

「それまでにあの男の子を助け出し、彼の意識が覚めるのと同時に面会させます」

アクセルを一気にしぼった。

本日二度目の、体が後ろに蹴り飛ばされるような感覚を覚えながら、必死でしがみつくバイクは、一気にスピードを上げる。

しかし、前に行くワゴンの姿はもうかなり遠く、途中どこかで曲がりでもしたら、追いつけるわけがない。見失ってしまったては、助け出すことなんぞ不可能というものだ。

「安心してください。場所は分かっています。ですが、時は一刻の猶予ゆうよをも許しません。少々飛ばしますよ」

言葉と同時にバイクはスピードを上げる。

間に合ってくれ……。

俺の言ったか言っていないかも分からない言葉に呼応するかのよう
に、バイクはさらにスピードを上げた。

第四章：その四（後書き）

最近一日の読者数が増えてきて、非常に嬉しくなる毎日です。これからもぜひひよろしくおねがいます！ 観想・評価・メッセー
ジ等お待ちしております！

第四章…その五

ところどころひび割れがあったり、段差があったりするような田圃を突っ切るアスファルトの上なのにも関わらず、バイクが高性能なのか、先ほどガラ空き一般道を高速で走っていたときよりもさらに高速で、なのに振動はあまりなく、すでに見えなくなってしまっているグレーのワゴンを追っていると、直線の田圃道、という風景は、あの男の子がもしグレーのワゴンの中で目を覚ましたらどうなるのだろうか、という仮定を立てているうちにどこかに行っちゃい、気付けばあたりは木がたくさん。しかも曲線ばかりの上りの坂道と来れば、これはもう山道ということ間違いなし。

木々のトンネルを潜り抜けながら、まるでトトロのネコバスに乗ったかのような気分を味わいつつ、前に座る某を見ると、前を向いているため表情は確認できないが、それでも十分分かるほど、前進することに必死なようだ。なんだかピリピリした感覚がやつの背中から伝わってくるのは、風で肌が痛いことによる気のせいではないだろう。

横を過ぎる木の形がよく分からないほどのスピードで、車体を右に傾け左に傾け、まるでレースゲームでやり慣れたコースを走るように走っていると、しばらくしたところで急に木々が無くなり、傾斜も無くなった平地に出た。

某はドリフトをかけながら前に進もうとするバイクを停止させたのだが、これまた慣性の力、止まった瞬間掴んでいたサドルから謎の力（慣性の力）で手が引き離され、俺の体は進行方向にすっ飛んだ。そして、

「ぐえっ!？」

なんて声を上げてしまったのは不覚だが、うつ伏せの状態で地面に衝突、さらには数十センチほど砂煙を上げながら滑走したのだから、マークシートできちんと塗ろうとしたら枠から少しはみ出てし

まったくくらいに仕方のないものだと思ってほしい。それにしてもヘルメットを被っていてよかった。

今の某に文句を言って、果たして返事は返ってくるのだろうか、などと考えつつ俺の発射点を振り返ると、ヘルメットを外した某が俺を……ではなく、俺を挟んださらに向こう側をじっと見つめていた。俺のことは無視かコンチクショウ。

少しは怪我の心配（俺の）とかしやがれ、などと軽く憤怒しながら某の目線の先を見ると、積まれた石灰の袋、一面トタン板の壁、数十メートルの横幅、見たことがあるような気がする建物だと思い、少し考えてみれば、

「工場か」

と結論に行き着くことができた。

とりあえず、寝ているのはどうかと思い、体を起こし、膝立ち状態になると、右横から手が伸びてきた。

答えはだいたい出つつも誰だろうかと思い、手の持ち主を見れば、それはやっぱり真剣顔の某だったため、俺は遠慮せずにその手を握り、自分の体を持ち上げ、しっかりと二足で地面に立った。

いつまでも手を繋いでいるのはいくらなんでも気持ち悪いと思い、手を離そうとしたのだが、何やら掌の中央に違和感がある。BB弾が押し付けられてるような、そんな感覚だ。

掌を上向きにした状態で手を離し、それは何かと確認してみれば、そこにあるのは銀色の直径2ミリほどの半球である。見覚えがある、どこかの騒ぎじゃない。実際に見につけ、巨大マントヒヒと闘ったことは、記憶喪失にでもならない限り、忘れられそうにないからな。このタイミングでこれを俺に渡す理由など、簡単に想像がつく。それくらい危険度が高い相手という事だ。おお、なんかこの思考、まるで正義の組織のエージェントみたいだ。

いよいよ決戦に近い、などとベタな正義のヒーローのようなことを考えながら、これからどうすべきかを某に聞こうと、俺は顔を右に向けた。某はやはり真剣な表情で、一言、

「ここから先はあなた一人で行ってもらいます」

……は？ってまあ！？おいおい、ちょっと待て、そうは問屋が卸さねえ！どう考えてもここからが一番重要なところだろ！ドラマや映画で言えばクライマックスだ！なのに主戦力がいかないとは、どんなB級ドラマやへっぽこ映画だろうがありえない話だぞ！

「話せば長くなります。訳あつて僕はこの先に行くことが許されません」

それにしたって、おまえが行かなくてどうやってあの男の子を奪還しろと？

「これを使ってください」

そういつて某はどこから出したのか、40〜50センチほどの楕円形の筒状の物を俺に手渡してきた。7・3くらいのところに切れ目があることに気付き、なんだろうかと思い、両側を掴んで左右に引っ張ってみると、3の割合の方にくっ付いてきたそれは、随分傾いてきた陽光が反射して眩しい、研ぎ澄まされた刀身である。

「脇差です。相手は殺しても構いません。銀色半球とそれで問題はないでしょう」

本当に問題はないのであろうか、いささか心配なところがある。まだこの銀色半球を使ったのはたった一回きりであり、その性能はよく分かっていない。体が勝手に動く、ということは分かっているのだが。

「今回はマニュアル設定にしています。勝手には動きません」

それじゃあどう闘えばいいって、

「ぐああああああああ！！！！！！！！！！」

まだしゃべり途中だったというのに、突如背後に立つ工場の内部から叫び声が聞こえた。声の高さからして、おそらく連れ去られた男の子のものであろう。一体何があったのであろうか。

視線を工場から某に戻すと、某は眉間に皺しわをよせ、口元を歪ませ、歯が碎けるんじゃないかというくらい、歯を強くかみ締めていた。

「急いで下さい。まだ手遅れというわけではありません」

そういつて某は顔を左に向ける。俺も同じ方を見ると、トタン板の途中、穴が開いているところがある。あそこが入り口であろうか。「さあ、早く」

こうなってしまうては細かいことは言ってられない。某が行けないというのも、納得できないが認めるしかない。

俺は右手の中にある銀色半球を、前回と同じように耳たぶに付け、体表を伝って全身に何かが広がった感覚を覚えると、一・二回跳ねてみたあとに、まずは入り口まで全力疾走。通常なら数秒掛かるような距離であるが、掛かった時間は一秒もない。

この状態で学校の体力テストを受けたらヒーローになれること間違いないだろう、と考えながら入り口に駆け込むと、右から、

「現在の転移率28%」

と声が聞こえてくる。右に振り向くと、そこには先ほどのスーツの男達と、白衣の男が数人。そして、彼らが見つめる先には、

「そこか！」

例の男の子が、寝台に寝かされ、手足を拘束されていた。何やらチューブのようなものが数本、胸や腹のあたりから伸びている。

だが、見つけたことで、思わず口に出してしまったのが災いした。俺が叫んだ瞬間、男達は全員こちらを振り向き、そしてそのうち一人が、

「侵入者か！くそ、見られたか。仕方ない、少年！悪いが貴様には死んでもらう！」

するとスーツの男達は全員、スーツの内側に手を入れ、黒いL字型の何かを取り出した。黒く光るそれを、男達は全員俺に向けた。そして、

「ズガウガガウガウンガン！！」

一斉に発砲。本来なら、指一本動かすことすら間に合わずに弾丸が届くのだろうが、それが何故か、一向に届く気配がない。それどころか、なんとその弾丸が見えるではないか。しかもスローモーションで。

これも銀色半球の効果なのだろうか。とりあえず、見えている攻撃を避けないやつなど、そういう趣味を持ったやつらだけだ。まずは避けさせてもらうことにしよう。

いくらスローモーションとはいえ、本来なら見えないほどの速さを誇る弾丸なためか、小学校低学年生が全力で走る程度のスピードのそれらを、俺は右に跳んで避けた。

するとどうだろうか。避けた直後に、弾丸が元の速さに戻ったのか、俺の足先を風が掠めて、その直後に背後の壁が衝突の音を立てた。

それが弾丸によるものだとは理解した俺は特に後ろに振り向くこともなく、再び男達を見た。

男達は、弾丸を避ける、という人外な行動に驚きを隠せないようすで、一番左のやつなんかアホっぽく口が半開き状態だ。だが、真ん中の男がすぐに表情に険を戻し、再び発砲してきた。

再びスローモーションの世界が視界に広がる中、50m走9〜10秒の弾丸はその数をゆつくりと、だがだんだんと増やしていく。例えて言うなら、真っ直ぐにしか走れない子供達が、針持って突っ込んでくるようなものだ。避けることは容易い。たやす

男達までの距離は約15メートルほど。覚悟を決めた俺は足に力を込める。

それと同時に頭の中に移動と戦闘のイメージが湧き上がってくる。これも銀色半球の効果だろうか。

イメージに素直に従い、右足で踏み込み、前に跳ぶ。

右に軽く身を捻り、まずは一発を避けた。

弾丸は極端なチェンジオブペースで後方へと去っていくが、気にせず再び身を前に。

三步跳ねたところで一度しゃがむ。

髪の毛を数本奪いながら、急に速度を上げた弾丸が後方へ。

しゃがんだ姿勢からやや左前に左足を出し、それを支点に体を前に押し出す。

弾丸が迫っていたが、さらに左前に身を跳ばすことで回避。

次の一步で刀を逆手に抜き、避ける必要すら無かった弾丸を尻目に、さらにもう一步踏み込むことで、一番左のスーツの男の左脇に着いた。

男がこちらを向く前に、右腕の下腕と、左腕の上腕に、自分の腕を突き出すようにして一閃。

腕に斬り込まれ、銃を落とした男の首に、突き出した方の腕でそのままリアットを食らわし、まずは一人。

左足を支点に、そのまま身を180度反転させ、そのまま右足でバックステップ。

振り返ると、先ほどよりも少し背の高い男がこちらに銃を向けようとしていた。

しかし、それよりも早く身を左回りに再び反転させ、勢いのついた右足で男の顔に蹴りを入れ、これで二人。

着地と同時に、髭ひげの濃い男がこちらに向けて引鉄ひきがねを引く。

迫る弾丸を避けるために身を上へと跳ねさせ、天井から突き出した鉄骨を踏み台に、前方へと跳んだ。

髭の濃い男は素早く反応し、再びこちらに向けて発砲。

上に向けて放たれた弾丸を、右肩を後方へ下げるようにして身を捻ることでかわし、そのまま仰向け状態に。

足を振り上げ、後方に回転し、着地の寸前に一番右にいた男の脳天に蹴りを入れ、三人目。

着地と同時に身を前方へと跳ばし、一際筋肉質な男の右脇から左肩へと、右フックを食らわすように一閃。

返り血を浴びる前に、さらに左フックを食らわし、男を左へと飛ばすことで、スーツの男の残るは一人。

左脇のあたりで、刀を左手で支え、右手でしっかりと掴み、剣先を相手に向けるようにして、再び右足で踏み込み、体を前方へと跳ばす。

髭の濃い男の右胸へと、真っ直ぐ突き刺さるはずの刀は、しかし

男が銃で防いだことによって、その進行を止められた。

一度後方へバックステップを踏むと、男が銃を振り上げ、再び発砲してくる。

近距離の弾丸を、避けれない代わりに刀で弾くが、完全に軌道を逸らすことはできず、左肩の辺りに掠らせてしまった。

火傷やけどのような痛みが左肩から伝わるが、痛がつてる暇などない。

男は再び引鉄を引こうとするが、その銃口から軌道を推測し、弾丸が放たれる直前に身を左へと傾ける。

右肩を掠るか掠らないかのところを弾丸が通り過ぎるが、それには目もくれず、男の左横を通り過ぎるように走りながら首元に一閃。頸動脈を切ったのか、大量の血を噴き出しながら、男はコンクリートの床に倒れた。これでスーツの男は全部だ。

あたりを見れば、血を流したり流してなかったりしながら倒れているスーツの男達以外、寝台の上で寝ている男の子を除けば人らしい影は見当たらない。どうやら白衣の男達は逃げ出したようだ。よし、手間が省けた。

「残すは」

俺は寝台に歩み寄り、また気絶している男の子の、左胸と右肋みぎあばら、さらに鳩尾みぞおちに繋がれている直径7〜8ミリ程の管を見て、痛そうだなあ、などと今自分がしたことで完全に矛盾したことを考え、

「よっと」

三つの管を同時に切断した。すると切断したところから水色の液体がちみちみと流れ出しやがるもんだから、一体何をしていたのだろうかと思ひ、目線で管を上に通っていくと、天井でその管は左に曲がり、そして壁に突き当たると下に下り、そしてそこにある、なんだかいろんなメーターがついている妙な機械へと繋がっていた。結局何なのかさっぱりわからん。あとで某にでも聞こう。

俺は視線を寝台へと戻し、男の子を抱え上げ、この工場の入り口へと歩き始めた。

そういえば、結局この男の子は誰なのだろうか。某にとっても、

俺にとっても関係のある人物。しかも未来で、という称号付きだ。これも某に聞く必要があるな。

いやしかし、この銀色半球の効果は、俺の想像をはるかに絶するものだった。俺の予想では、せいぜい身体能力が飛躍的に上がる程度かと思っていたのだが、まさか感覚すら超人的なものにしてしまうとは、未来の科学力、恐るべし。一度でいいから行ってみたいものだ。もしかしたら本当にネコ型ロボットなんてのにも会えるやもしれん。

それにしても、銃撃は掠るだけでも随分と痛いもんだ。帰ったらすぐに治療せねば。

そんなことを考えているうちに、すでに入り口の前まで来ていて、そして立ち止まっている。

なんで立ち止まっているのかと言えば、入り口から見える外の景色が、あまりにも安心するものだったからだ。

その景色とは、空一面に広がる夕焼けと、そしてそれをバックに、ヘルメットを片手に持った、久々のように感じる仏様の笑顔に、

「お帰りなさい」

その柔らかい笑みから発せられる温かい言葉を追加したやつときたもんだ。これに安心や落ち着きを感じられずにいられるだろうか。少なくとも俺は、かなりの安心を得ることができる。

俺はその安心できる景色に向かって、一言こう言った。

「疲れた」

そして、笑みを作ってもう一言。

「ただいま」

俺は安心の景色へと歩き出した。

第四章：その五（後書き）

読者の皆様のおかげで、なんとファンタジー部門のランキングに載ることができました！ほんとうにありがとうございます！さらによりよい作品にできるよう精進していきますので、これからも応援よろしくお願いします！評価・感想・メッセージお待ちしております！

第四章…その六

「さて」

と言って、某が俺に顔を向けてくる。現在の立ち位置は、まだ茜空は残っているものの、もう見えなくなってしまった夕日から順に、某、バイク、俺である。ああ、男の子も入れれば某、バイク、俺（手だけ）、男の子、俺だな。

男の子をずっと抱えているせいで腕がきつい、気を失っている年齢幼稚園児を地面に寝かせて話をするというのは、俺だって人の子。罪悪感というものが、俺の腕を拘束してくるってわけで、降ろせない状態にあるわけだが、でもきついもんはきつい。

どうにかして、地に伏せさせるわけでもなく、この両腕からチビ助を解放させる手立てはないだろうかと考えたところで思いつくのは、手ぶらのニコニコ仏様。なんだが強烈な既視感デジャブを感じたが、ここは敢えて故意的に無視し、それでは某さん。アンサー〜チェツク。

「……はあ。進さん、そのネタ、すでに八回目です。では僕も、八回目の質問に対して八回目の説明に入りますが、そろそろいい加減諦めてください。僕はその子とは極力関わってはいけないんです。今こうしているのも危ないくらいなんです。触れる、さらには抱くなどもつての他です。駄目なものは駄目なんです。理解していただけましたか？」

くっ……！ 諦めねえ、諦めねえぞ！！

「もういいです。分かっているものとして話を進めます」

一度溜息をついた某は、バイクのサドルを、掌てのひらを軽く乗せるように叩き、

「帰りはこのバイクは使いません。というか使えません」

意義あり！ どう考えてもガソリン残量を表すメーターはまだ半分も減ってないし、どこにも目立った傷は見当たらない。明らかに

使用可能ですが？ それを何故使用しないと？ お答え頂きたいですね、検事さん。

「今度の舞台はバラエティクイズ番組ではなく、法廷ですか……。それにしても、全く、この弁護士は、人のことを思いやる心つていうのを持ち合わせていないのでしょうか」

なんだなんだ、随分挑戦的な態度だな。俺は悪役弁護士か？

「当たり前です。人の健康状態を気にしない人間など、悪役そのものです。進さん、あなたはこの気絶していて、さらに体力もなかなか失っている男の子を、直風が冷たく、バランスも悪いバイクなんぞに乗せて、元来た道を数十分走って、それで果たしてこの男の子が何事も無く健康を害することは無い、などと言い切れるのですか？」

うっ……それは……。

「分かったのなら話を進めさせてください。今この子の両親は、ここから歩いて八時間ほどのところにある病院にいます。半自動移動物体が使えない今、僕たちに残された手は歩くことだけです」

は、八時間で……。

「安心してください。そんな長時間歩き続けていては、この子の前に僕らが倒れてしまいます。少しづつ休憩は入れていく予定です」

それにしたって八時間は長くないか？ 今から休憩無しで歩き続けたとしても、到着時刻は夜中の一時を回る。それに休憩も入れたら、軽く丑三つ時はいきそうだ。夜中だぞ？ 健全な一般高校生男児ならとっくにゴートウーベッドしてる時間だぞ？ やってられるか。

「いいえ、やって頂きます。あなたがいなくて、どうやって男の子を病院まで連れて行けばいいんですか？」

だからそれはさっきから言っているように、

「ですから、それは成りえないことです。ああもう、仕方ありませんね。納得していただけないのなら、歩きながらその訳を話します。ですから、進さん」

そう言つて某は本日二度目の真剣な眼で俺を見てくる。くそ、この状況から逃げれる要素すら見つからない。もうどうしようもないのか。

「進さん、そろそろ行きましょう。時間は有限です」

そう言つて、某は踵きびすを返し、山道を下り始めた。……つておや？

「某」

俺は某を呼び止める。

「なんでしよう？」

対する某は振り返る。

なんでしようつておまえ、こんな高級そうなバイクを、こんな山の中に放置する気か？ おまえの家がどれほどの大富豪かは知らんが、バイクの使い捨てというのはどうかと思うぞ。良く考えてみれば、おまえがいかに嫌いそんな環境破壊にもつながるわけだし。

「ああ、そのことですか。いえ、まあ、持つものは持ちましたし、それにこのバイクは、バイクであつてバイクでない、といいますか」
片手を顎あごにつけ、悩むようなポーズを取った某の肩には、いつのまにかリュックサックが下がっている。荷物を持ったというのは本当らしい。

「まあ少し歩いてみればその答えが分かります。ですから、まずは進みましょう」

そういつて某は一度微笑むと、再び踵を返し歩き始めた。

ち、もう呼び止めることができるような用件が思いつかない。妥協なのか？ここに來て妥協なのか？くっ、ここで諦めるわけには、

「はああ……」

だが、そんな心とは裏腹に、体の方はすでに妥協を認めていたらしく、それは溜息という形で現れて、俺の心にまで妥協を認めさせやがった。

ああ、くそ、もう八時間だろうが拉致蜜柑みかんだろうがなんだってんだ。人命救助も感動の再開も、全部俺が手伝つてやろうじゃねえか。
俺は一度、腕の中の男の子の気持ちよさそうな寝顔を見たあと、

先行する某を追いかけた。

しばらく歩き、ちょうど山を降りたところで、不意に某が足を止めた。なんだなんだ、一体どうした。

「来ましたね」

「来た、って一体何が来」

「たんだ？　　と言おうとした矢先、俺の左耳の横を何かが、ゴウ！、なんて音を立てながら通り過ぎていったのだが、その距離おそらくミリ単位！　ちよつと、ちよつと耳に掠りましたよ！？」　あと俺が、もう少し左にずれていたら、俺の耳、いや、俺の頭はどうなっていたことやら、考えただけで鳥肌が立ってくる。

それにしても、今の物体は一体なんだ？　まさかさっきのスーツのやつらがもう起きて……！！？　　だとしたらそれはまずい！　　某、これは急がないとまず……え？

俺が、意見を途中で止めたのも無理はない、と思ってほしい。俺は某に自分の考えを伝えるべく、某の方を向いたのだが、なんとそこには誰もいない。まさか、今の一瞬で連れ去られたかと思い、周囲を見渡すと、思いのほか近くにいたらしく、某はさっきまで立っていたところを軸に、そのまま仰向けで倒れていた。

ただ倒れていただけなら、撃たれたのかと心配し、すぐにその安否を確認するところなのだが、どうやらそういうわけではないらしい。その根拠は、仰向けになった某の顔が、いつもの柔和な笑顔だということと、その某が抱くように、仰向けになった某の胸のあたりに、何やら小動物チックな動きをする何かがいるということだ。

小動物チックなそれは、尻尾らしきものをぶんぶん振っているのだが、何か違和感を覚える。生物であって生物でないような、よく分からないがそんな感じだ。

某は懐^{なつ}いてくるそれを抱いたまま起き上がる。そして、

「進さん、それは何だ、と言いたげな眼ですね。ふふ、でも進さん、あなたはこれを何回も見ているはずです」

そういつて某は胸に抱くその顔をこちらに見せてくる。ああ、なるほど。どうりで違和感を覚えたわけだ。

正面を向いたその顔は、決して動物のものではなかった。角ばった表皮と銀色に輝く頬や額、眼にあたるところには、まるでモザイクで眼を隠すときのように黒い太めのラインがあり、そこには赤い丸がふたつ浮かんでいる。つまり、それは機械だったわけだ。

だが、全体的に小型犬を想像させるその動きは、もう実際の犬のそれと何ら違いはなく、本当に生きてるように見えるだから、一瞬生物かと思ひ違えるのも仕方ないだろう。

いやしかし、それが今のアイボのような大型ロボットだということとは確かに分かったのだが、何回も見ているとなると話は別だ。俺はそんなもんを見た覚えがない。

「本当にそうですか？　ほんの数時間前にはこれの背中の上にも乗っていたじゃありませんか」

乗っていた？　俺はそんな小さいものの上に乗った覚えは……いや、なるほど、そういうことか。

「ふふふ、種明かしは僕がしましょうか？　それともあなたが謎解きますか？」

任せろ。つまり種明かしはこうだ。その機械犬の正体は、さっきまで俺らが乗っていた白塗りバイク、とこういうことだろう？

「ご名答です。これは変形型機殻獣の“どっぐりちゃん”です。僕は裏ルートから易々と手に入れましたが、普通は在庫品切れが続出するほどの人気なんですよ。僕らの時代では」

なるほど、現代人と比べて、未来人の技術は凄まじく向上しているようだが、ネーミングセンスは恐ろしく後退しているらしい。それにしてもどっぐりちゃんって……発音の母音から一瞬、教室で夜、二人の生徒が紙と十円玉を用意して、虚空に質問すると、二人で指を乗せた十円玉が勝手に動き出す、というあの心霊ゲームを思い出してしまったではないか。

「失礼ですね。どっぐりちゃんの名前の由来は、“びっくり”する

ほどこわいい“どっぐ”から来てるんです。そんな、靈感が強い人がやっちゃうと悪霊呼び出しちゃうような遊びと同じにしないでください」

……やはり未来人はネーミングセンスがどうかしてるのだろう、と心の中でうなづくことで、ここは妥協。

「とはいえ、進さん。本当はもっと前から、あなたはこれを眼にしています」

そういうと某は、どっぐりちゃんを自分の左手首に寄せ、そして、「どっぐりちゃん、ウォッチモードです」

某がそういうと、どっぐりちゃんは一度、わんっ！、と吼え、いきなり全身を某の左手首に巻きつかせた。

巻きついた直後にどっぐりちゃんの背中が開き、そこに体が畳み込まれていくようにしてどっぐりちゃんはどんどん細くなっていく。さらに折り畳まるようにして今度は薄くなると、そこに現れたのは、俺が無理やり過去に連れていかれたときに見た、あのデジタル時計だった。

「普段はこの状態です。進さんも、何度かお世話になっていきますよね？」

お世話になったも何も、そこに映し出されるデジタル算用数字を見てから、俺は珍妙な事件に多々巻き込まれるようになったと言っても過言ではない。

「先ほど、裏ルートで、と僕は言いましたが、実は裏でもなんでもないんです」

突然そんなことを言い出した某の顔を見ると、なんだか久しぶりに卒業アルバムを見て過去を思い出してる、ひろうつこんばい疲労困憊の中年サラリーマンのような表情をしている。

「製作者が製作物を自ら買う必要なんてありませんしね。作ったものをそのまま自分のものにしてしまえばいいということです。懐かしいですね。これを作り始めたのもかれこれ4・5年前のことです」

4・5年前……って、11・12歳のときじゃねえか！　いくら

未来とはいえ、そこまで知能指数が上がってるわけがない！

「そのとおりです。未来とはいえ、人間自体はさほど変わっていません」

じゃあおまえは俺に嘘をついたのか？

「嘘ではありません。そして、付け加えるなら、それは非情な真実です」

すると某は田圃へと続く道を一瞥し、

「まずは歩きだしましょう。僕らの時間は有限です。そう、今の僕と、あなたにとっては」

某は、何やら意味ありげな笑みを一瞬俺に向けて放つと、再び踵を返し、田圃の中へと歩き始めた。

今の言葉と笑みに、何か意味があることは間違いないだろう。だが、この状況下、再び歩き始めた某を呼び止めて問いかけようとは思えず、とりあえず今は前に進むうと考えた俺は、腕の中の男の子を抱きなおし、そのとき男の子が、今にも消え入りそうな声で呟いた、かあさん、という言葉をしつかりと耳に入れ、そよ風で稲の苗が靡く田圃道へと歩き始めた。

「その男の子のこれからを話しましょう」

俺が追いつくと、某は前を向いたまま、急にこんなことを言い出した。

「ですがその前に、その男の子の両親の姓を教かばねえておきましょう。

彼らの姓は……」

某は一度沈黙し、

「……彼らの姓は、“某”です」

静かな、しかししつかりとした声でそう言った。

それにしても、某、なんて姓はそうそうたくさんいるものじゃない。となると、導かれる答えは一つしかない。そうだろう？ 某。

「ええ、そうです。この男の子の両親は僕と血縁関係にあたる人達。いわば先祖といったところです」

おまえがこの男の子を助けに行ったのは、それが理由か？

「はい。ご先祖様の辛い顔を見るのは嫌ですからね」

そういつて某は一度空を見て、そして溜息をつく。その表情は両眉を下げているもので、眼はどこか遠くを見ている。

だが、その表情には、単に先祖を思いやる気持ちだけではなく、何か他の意味も含まれているような気がしてならない。直感的にだが、そう感じたのは事実だ。それは何か聞いてみようかとも思ったが、なんせ相手は某だ。自分から言おうとしない限り、例え金一封を添えても言うことはないだろう。

それに、今回はなんだか、そのことについて話してくれるような気がする。これも直感的なものなのだが、とにかく今は某の話聞くことにしよう。

某は、上を向いていた顔を元の角度に戻すと、

「その男の子は、このあと、僕らがちゃんと病院に送り届けることによって両親と再会します。その後、再びあのスーツの男達に狙われるようなことは無く、平和な人生を送っていきます。そのときが来るまではね」

某は、握る拳に力を込める。

「そのときとは、彼の両親はすでに他界し、配偶者と共に暮らしながら迎えた還暦のころ。だいたい60歳あたりです。そのとある日に、彼は突然失踪します。彼の配偶者は警察に届出する^{とどけで}などして、彼の行方を捜しますが、見つかった手がかりといえば、彼がその日履いていた革靴の片方のみ。結局彼はそのまま発見されることなく、警察は捜査を中途断念。配偶者は悲しみのあまり、病にかかり、その後他界。全ては悲しみに包まれたままこの物語は終わりを告げたように思いましたが、実は続きがあります。そもそも、失踪した彼が見つからなかったのは何故なのか？答えは簡単です。彼はあの日、突如体が変化し、5歳のころの体に戻ったからです」

戻った？

「はい。全身の皺はなくなり、背も縮み、顔は童顔に変わり、見た

目はどこからどうみてもただの5歳児です。彼は自分に何が起きたのかさっぱり分からず、だがこの姿では帰って話してみても信じてはもらえないだろうと思い、悩んだあげく、一人寂しく生きていくことを決意します」

なんで突然そんな体が若返ったんだ？

「彼がその理由に気付くのは二回目の身体退行のときです。彼は原因は何だろうかと考え、自分の体が変わる60歳と、そして始まりの5歳のときに何かがあったと推測。さらに考えを突き詰め、原因は5歳のときのあの事件にあるのではないかと答えに至ります。突然スーツの男達に連れ去られ、体に妙なものを入れられた、あの事件にね」

某は悔しそうな表情になり、

「そのことに気付いた彼は、すでに両親を亡くし、愛する者も亡くし、自分を知る人すらいなくなった現状を見つめ、まるで自分は深い森の中の忘れ去られた一本の樹木のようなと考え、そして自分の名を変えます。“祐一”から“一樹”とね」

何！？ それじゃまさか……！

「そのあたりはご想像にお任せします。その後、彼はどうかして、自分をこんな風にした、あのスーツの男達に復讐したいと考え、そのためだけに研究を重ね、そして遂に開発に成功します。時間遡行を可能とする機械をね」

某は握っていた拳から力を抜くと、

「その後は言わずもがなというやつでしょう。それよりもただ先に行くことだけを考えましょう」

そう言ったつきり、某は黙りこくってしまった。

だが、そのあとにきた沈黙に、かなりの息苦しさを覚えた俺は、某に尋ねる。

「じゃあ、なんでおまえはこの男の子を助けなかったんだ？」

某は振り向くことはなく、少しの間を空けてから、

「……一つ、時間遡行に関する知識を教えましょう。時間遡行する

ものが、過去の自分と出会ってしまったと、そこで人生の歯車のようなものが狂います。定められていた運命から脱線する、といったところででしょうか。普通に暮らしていた場合、奇々怪々な出来事に遭遇することなどはそうそうありませんが、先で述べたようなことをすると、むしろそちらの方が多くなります。日常から非日常へ。常識から非常識へ。ちょうど今のあなたのような状況ですよ、進さん」

いや待て、俺がそれに当てはまるやつってことなのか？ 確かに俺は、非常識や非日常を体験しまくってるのは事実だが、じゃあ俺は今までに未来の自分に会ったことがあるのか、と聞かれても、そんなのはまったく記憶にない。

「それはそのうち思い出すはずです。具体的にいつかは言えませんが、近いうちに訪れます。まあとにかく、今は病院に向かって歩くことだけを考えましょう」

某は、まるでこの会話をさっさと終わらしたいような態度を取ると、歩調を速めた。

俺は、少し距離を置いてから元の速さに戻った某の背中を見つめつつ、某の過去と、自分の過去に対して、前者には何ともいえない感覚を、後者には記憶に対する疑問を覚えながら、その距離を縮めようとはせず、ただただ現状維持のまま田圃道を歩いていった。

まわりでは、そよ風が、田圃の稲の苗を一定方向に揺らしていた。

第四章：その六（後書き）

ランキングの順位が上がったり下がったりで一喜一憂する最近です。ですが、どのような評価にしろ、その人にはしっかりと見て頂けるといふ実感がもてますので、評価・感想・メッセージお待ちしております！

第四章…その七

その後、互いに口を利かないままひたすら直線道路を歩いていき、乳酸が溜まりに溜まってもうすでに動かなくなっているもおかしくない足を、無理やり前へ前へと進めること数時間。途中何度か座ったりするなどして休憩は取っていたのだが、さすがにもう足も、そして男の子を抱えている腕も、疲れや痛みが限界という名の、人間が色んな悟りを開ける領域にまで達し始めてきており、実際に腕と足が痛覚のあとにくる痺れとほんわかした温かみという悟りを開き始めていた俺は、さすがにもうやばいと某に強く所望し、その功績か、町のはずれの方にあるビジネスホテルに泊まることができた。もちろん宿泊代は某持ちで、時にして12時ごろの話である。

朝は6時に出発します、と某が言ったのを聞いたか聞いていないか際どいところで、部屋に入りベッドに潜り込み意識をどこか……いや、その行き先は知っているが、気持ちよく寝るためにここは敢えてその事実を伏せておいて、意識を目的地不明の所に飛ばす、とここまでの行為を完了させた。その後某が何か言っていたって知ったこっちゃない。

だが、朝起きてみれば状況は大きく変わっていた。ベッドに寝ているのは、俺、男の子……以上。部屋にいたのは、俺、男の子……以上。確かに俺は昨日、某がこの部屋で就寝したのをちゃんと確認してはいなかったが、それにしたってこの仕打ちはひどいんじゃないか？自分一人だけ帰りやがって、あいつ絶対、小学校のときとか友達と鬼ごっこなんかして遊んでいる時に、自分が鬼になってなかなか捕まえることができないと急に拗ねていきなり帰っちゃうタイプのやつだったはずだ。取り残された側の憤りと気まずい気持ちを少しは考えろ、この自己中が。

某のことだから、これからの行動を指し示す何かを部屋に置いていつているのではないか、と部屋をあちこち散策していると、

「やっぱりな」

案の定、入り口付近の床に一枚のメモ用紙と、それを抑えるためにかペンが置いてあった。それを拾い上げてみると、そこには目的地の病院に×印が描かれた簡単な地図が描かれており、さらにその下に『所要時間約2時間』と書かれている。交通機関を使えばもっと早く着くのだろうが、なんせ家族で出かけてそのまま移動したわけだから、一文無しどころか財布すらない。持っているのは携帯電話のみで、名義共々売りさばいてしまえば結構な金になるのだろうが、たかが徒歩二時間の道のりのために、余生を誰が使ったかも分からない携帯電話使用料金の多額支払いに使おうとは思えない。

っと、まずい。やってしまった。携帯電話という単語で思い出したのだが、親に家に帰らないという連絡をするのを忘れていた。帰ったらどんな剣幕で母さんが玄関前に立っているのだろうかを想像すると……ああもうだめだ。きつと俺の人生は今日限りで幕を閉じるだろう。我ながらご愁傷様である。

俺が部屋の入り口前で口をあんどり放心状態になっていると、

「……お父さん……」

と背後の部屋の内部から声が聞こえたわけで、それは俺の放たれていた心を強制的に呼び戻し、また、今俺がすべきことをはっきりと確定させた。

現在の時刻は5時50分ほど。今すぐにホテルを出ていけば、ほぼ当初の予定通りだ。

「よし」

といまいち微妙な気合を入れた俺は、男の子、もといリトル某に歩み寄り、今度は背中に負^おぶって、入り口の方に向き直り、そして歩を進めた。

ホテルを出て少し経ったくらいで気付いたのだが、こいつが起きて自分で歩いてくれればどれだけ楽だろうか。幸か不幸か、今は隣に某もいないわけだし、何より早朝から5歳児を負^おぶって歩く入学したての高校生、という妙ちくりんなこの絵図もなくなる。はは、

メリットしか思いつかないぜ。

というわけで俺は、背中で寝息をたてているリトル某を起こして歩かせようとしたのだが、いくらか考えが浅はかだった。起きた瞬間この小僧め、現在地と俺の顔を見るや否や、暴れだすわ叫びだすわで周囲の目が痛い何のつて。ここまでの経路を説明して、何とかリトル某を宥めたなだはいいものの、布団ふとんたたきを持ったおばちゃんはたが駆け寄ってきたときは、どうすればいいか本当に困った。まったく、小さくても大きくても傍迷惑なやつだ。

リトル某は、俺のことを信用したらしたで、今度は逆の意味でうるさくなった。聞いてもないことを話しかけてきたり、俺のことをヨウジマンだと言ってきたり、誰かどうにかしてくれ。ちなみにヨウジマンとは、ここ最近幼稚園児と小学校低学年を中心に視聴率を上げている、主人公が楊枝ようじを手にとって『変態!』と叫ぶとその楊枝の先から糸のようなものが大量に噴き出し、それを主人公がかき集めて体に巻いていくと、最終的にもこした全身真っ白のヒーローになり、一般人の齒の間に詰まった、敵キャラであるニクスジ―などを取っていくという、斬新といえば斬新なのだろうが、新しいものを目指しすぎたあげく本来の趣旨から外れてしまった感がどうにも否めないテレビ番組である。

その後も適当に質疑応答しながら、地図を辿って歩いていくと、以外と早く目的地に着くことができた。

俺も一緒に病院の中へ入るべきか考えあぐねていると、リトル某が今とは違う幼さ残り放題の笑顔で俺の手を掴んで引っ張っていくもんだから、もうこれは行くしかないのだろう。

病室にいくとすでに某ファザーは眼を覚ましており、無事だったのか、と俺も安心した。だが安心したのもつかの間、某両親の感謝の言葉の雨嵐あめあらしで、もうどうしたものやら。途中リトル某を助け出す過程を話す破目になったり、しまいは、

「お疲れになったでしょう？」

なんて聞いてくるものだから、俺はここ数日のことも考え、

「ええまあ、最近よく疲れます」

なんて答えてしまったがために、

「ではこれを」

なんて一枚のリゾートホテルのパンフレットを渡され、

「私達のグループが経営してる熱海のリゾートホテルです。毎回無料で最高級スイートルームをご利用していただけるようオーナーに命令しておきますので、どうぞご家族で旅行にいらしてください」

なんてことを言われたのに対して喜んでいいのか悪いのか。さらには、

「朝食はまだこのことです。私はこのような状況のため行くことはできませんが、もし良ければレストラン等で食事を奢らせてもらえないでしょうか？」

とまで言われたのだが、さすがにそこまでしてもらうのは悪く、また、俺にもこのあと用事があるため、この誘いは断り、その後少し会話したあと、何回目かわからない深々と頭を下げる謝礼を三人同時にされるのを見て、足早に病室から退散した。

病院の正面出入り口を出ると、柱にもたれかかるようにして某が立っており、俺が出てきたのに気付くと、

「おや、早かったですね。僕の記憶ではもうちょっと長かった気がしたんですが」

と呑気なことをいつもの笑顔で言ってくるもんだから、俺のこいつに対する苛立ちは今や表面張力状態だ。

すると某も俺の異変に気付いたのだろう。突然慌てたようすで、「し、進さん！ 大変です！ もうこんな時間です！ 今日大事な約束があるのでしょう？ 今からだとか相当急がなきゃ間に合いませんよ！」

そう言っただけのデジタル腕時計、もといウォッチモードの“どつぐりちゃん”を俺に見せてくる。その腕デジタル算用数字が表示する時間は……げっ！？ 9時05分！？ 集合時間は確か10時だからあと55分しかない！！ これじゃ相当急いでも間に合わないじゃ

ねえか!!

「運賃は差し上げますからバスを使ってください。そうすれば一度家に帰ってでも間に合うはずです」

そういつて某はポケットから財布を取り出し、それをそのまま俺に渡した。ナイス某! さっきまでのことは全部チャラだ! こうなった原因はおまえにあるような気もするがそれも含めて全部許してやる!

某と一度アイコンタクトをとって双方うなず頷くと、某は顔を駐車場側に向け、さらに駐車場出入り口よりやや左の方を指で指し示す。

「あのあたりに進さんの家の近くまで行けるバスのバス停があります。あと2分ほどで来るはずですから、急い」

俺は某の言葉を最後までは聞かず、代わりに片手を挙げて感謝の意を表すと、指し示された方に向かって走り出した。

瑠璃のあの性格からして、遅刻なんてしたときにはおそろく何かしらの罰が待っていることは間違いないだろう。あんたはこれからずっと私の下僕よ! なんて言われたらたまったもんじゃない。それだけは逃れなければ。

昨日とはまた違う緊張感が、前進する体に汗となって現れた。

第四章：その七（後書き）

話の展開がどうしても遅くなりがちで非常にもうしわけありません。次回は瑠璃とのデート（？）です。評価・感想・メッセージお待ちしております！

第五章：その一

東口前だと言っていたのに、駅の改札口手前の通路に仁王立ちで腕組みしてるやつがいた。

その状態だけでもそいつが夢矢瑠璃だということはわかるのだが、より確実に本人だと確かめるために遠目に顔を見れば、なんとまあ眉間に皺寄せご立腹のご容態である。駅の時計を見ればまだ10時5分前であり、それが俺の努力を証明していることも含めて、何故あいつは怒ってなどいるのだろうか。俺は間に合ってるじゃないか。瑠璃は汗を垂らしながら近づいてくる俺に……ってこれじゃまるで変質者だな。まあとにかくその視線をこちらに向けると、一度目を大きくしすぐにキツと睨んできた。俺が一体何をした。

瑠璃と残り約一步の距離まで近づくと、今度は瑠璃が一步を踏み出してきていきなり俺の胸座を掴んできやがり、顔をぐっと近づけると、

「おそい！」

くっ、一瞬期待してしまった俺の胸の高鳴りを返せ。第一遅いつてどういうことだ。まだ集合時間まで5分もあるじゃないか。

「あんたばかじゃないの？ 普通休日に集合っていったら15分前行動が基本でしょ？ それをあんたは10分もオーバーしてるのよ？ 10分よ10分？ ちよっと一汗掻いてお風呂でさっぱりするぐらいの時間を私は待たされたのよ？ ああ時間が勿体無いたらありゃしない」

どこの屁理屈世界の常識かは知らんが、生憎この世界この国この世代では、間に合えばいいもしくは2〜3分超えてしまっても融通がきくのが一般常識だ。それに10分ではそんな健康生活の一環のようなことはなかなか行えないぞ。

「うっさいわね。あんたこそ屁理屈世界の住人じゃないの。と・に・か・く！ 遅れたからには罰則を与えないといけないわね。そうね

……うん、よし、あんた今日私に何か奢りなさい」

黙れ屁理屈世界の女王様。何が『と・に・か・く』だ、何が罰則だ。何故俺がお前に何かも知れないようなものを奢らねばならんだ。断固拒否するぞ。

「あんたに拒否権はないの。それ以上講義すると罰則に追加条文するわよ？」

ふざけ……、

「はい奢るもの一品追加ー」

くっ……！！

「分かったならもう行くわよ。切符は買っておいだから金銭を遣よこしなさい」

はぁ。自然と溜息が出る。で、いくらだ？

「4万」

ふざけるな！！

時々揺れる車体の中。小さい頃はよく、何故進行方向と逆の向きに身体が持っていけないのかと疑問に思ったものだが、それも今では慣性の法則というたった5文字で片付けられてしてしまう。現在電車の中に俺と瑠璃はいた。

「はぁぁ……」

それにしてもさっきの駅でのことは失態だった。どうやらあの4万というのは冗談だったらしいのだが、こいつの場合それを本気で言ってる可能性の方が高く、実際あのときの俺もそう思ってしまったが故に叫んでしまったのが運の尽き。何の運が尽きたのかは知らんが、丁度あのとときすぐ隣を赤ん坊乗せた乳母車うはぐるま曳ひく若女房が通りすぎ、俺の叫び声ひきがねが引鉄に案の定赤ん坊が泣き出してしまい、泣き叫ぶ赤ん坊をあやす母親に何度も謝る破目はめになった。しかもそのせいで当初乗る予定だった電車に乗り遅れてしまい、瑠璃によるさらなる追加条文で奢る品が遂に3品になってしまった。あぁ、俺の財布が痩やせていく。

憐れみの眼差しを向けていた瘦せる予定ができてしまった財布から目を離し、流れていく外の風景を見る。瑠璃によればこれから行くのは隣町らしい。何故隣町なのかと訊いたところ、

「自分達の町だったらとつくのとうに気付いてるはずでしょ。だからまずは隣町から調べるのよ」

とのことらしい。なんだか灯台下暗しな気がしなくもないが、ここでどっかのついさっきまで一緒にいたニコニコ顔は思い出したくないのが本音なため、俺は再び外の景色に思いを馳せた。

ふと瑠璃に視線を向けると、なんとも詰まらなそうな表情で俺と同じように外を眺めていた。

アナウンスが隣町の名を告げると俺と瑠璃は電車を降り、人もそこそこプラットホームを抜け、階段を上り改札を潜り、そして駅を出た。

「よし、じゃあ行くわよ」

行くってどこに？

「適当に決まってるじゃないの。どこにいるかわからないからこそ未来人なのよ」

なんだその定義は。それじゃただの神出鬼没マンだ。

「何意味分らないこと言ってるの。いいから付いて来なさい。まずはあのあたりから行くわ」

そういつて瑠璃が指した方を見ると、その先には大通りがあった。というか本当にまったく計画無しなのかよ。ああ、先が思いやられる。

「何ぼさっとしてんの。そんなんじゃ今日一日で回りきれないわよ」
気付けば瑠璃はすでにそっちに向かっていた。このあたり全部見て回るつもりなのか、と肩を落しながら瑠璃に追いつき、そして肩を並べて歩き始めた。

当然未来人なんてものは見つかるわけがなく、あっちこっち探し

て体力的に限界を感じつつあった俺は、走り回る瑠璃に休憩を申し出たのだが、なんとそれが受理されたのは必死に交渉したり時々ぼそっと言ってみたりしながら一時間程経ったあとであり、その間も走り続けていた瑠璃はなぜか疲れを全く見せず、

「そうね、そろそろお腹も空いてきたことだし、昼食にするのも悪くないかもね」

なんていって今度はどこか食べるところを探し始めた。

結局、駅の近くにあった喫茶店で昼食をとることとなり、窓儀のテーブルにつくや否や俺は椅子にぐったりと身を委ねた。瑠璃は頬杖をつきながら、

「情けないわねえ。あんた何も運動してないでしょ。中肉中背の身体とその体力の無さが物語ってるわ」

なんて可哀想なものを見る目で言ってるやがる。ちっ、誰が可哀想なものだこんちくしょう。確かに体力がないのは認めるが、あれだけの時間歩いたり走ったりしてればたとえ陸上部の奴だって少しは疲れるだろうよ。まったく疲れを見せてないお前が異常なだけだ。

「い、異常……。わ、私は全然普通よ！　もうこれ以上ないくらい普通！」

おや？　なんだろうか。瑠璃は異常と言う言葉に急に動揺した。こいつの性格からしてそんなことは言われなれてるだろうに、一体どうしたものであろうか。

それっきり瑠璃は無言になってしまい、また俺もどうやって話を打ちかけていいものか分からず、結局その沈黙は注文した料理が運ばれてくるまで続いた。

「はむっ……。ん、やっぱりおいしいわ、ここのナポリタン」

瑠璃は食べ慣れた感じでほいほいとナポリタンを巻いたフォークを口へと運んでいく。ここにはよく来るのだろうか。

「ほむっ……。中学のときに歩いてたら偶然見つけてね。それ以来わりと頻繁に来るわ」

言い終わると瑠璃はまたナポリタンを口に運んでいく。本当にお

いしそうに食っているのだが、俺も同じものを食べているはずなのに何故だか食欲があまり湧かない。それもそのはず、今瑠璃が食べているナポリタンこそ、罰則第一条奢りその一であり、その予想以上の値段の高さに疲れが五倍増しになったからである。うう、なんだかしよっぱい気がする。

「あんた何泣いてんのよ。そんなに金が惜しいならバイトでもすりゃいいじゃない」

そんな学校の校則を完全無視した発言をするやつが手に持ちストロー銜くわえて吸っているのは、今度は罰則第一条その二の“トロピカルマンゴーバナナシェイクEX”である。EXってなんだよ！と突っ込みなるところだが、その金額を見た途端俺は白めを剥いて口から泡を噴きかけた。この店は俺と俺の財布に対して風当たりが強い。

しかも困ったことに罰則はまだ第一条その三が残っている。次はどんな高額商品が飛び出すのかと冷や汗一筋待ち構えていると、瑠璃が店内の中央付近に視線を移した途端いきなり立ち上がり、

「……トイレ行ってくるわ」

と言に残しそそくさと化粧室の看板の方へ。それだけのためなのにあんな緊迫した言い方は一体どうしたのだろうかと疑問に思っていると、

「進君だったよね？」

と声がしたもんだから誰かと思ひ、声のした向かいの席に顔を戻せばどっかで見たことがあるようなないようなといったところの人物がいた。

「私同じクラスの森下真紀。進君と話すのは初めてだね。どうぞよろしく」

どうもさっぱりした性格らしい。それはその一言一言きっぱり言う話し方からも容易に推測できる。俺は彼女と軽く握手を交わした。「で、早速なんだけど、彼女、どう？普通に会話できてる？無視したり、冷たかったり、暗い雰囲気になったりしてない？」

突然そんなことを聞かれても正直困る。少なくとも無視は今のところないが、あとの二つは微妙に掠っているようなそうじゃないような際どいところだ。

「そう。じゃあ彼女は楽しそうにしてた？」

ああ、それなら自信持っていえる。走り回って俺の腕を引っ張っているときのあいつの笑顔は偽者ではないだろうから。楽しそうにしてたさ。

「へえ。じゃあやっぱりもう大丈夫になったのかな……」

そういつて森下は考えるような素振りを見せる。一体何が大丈夫になったのだろうか。瑠璃は何か問題を抱えているのか？ というか君は瑠璃とどういった繋がりか？

「小中と幼馴染みたいなのね。問題っていうのが正しいのかは分からないんだけど、一応そういうのがあるのよ彼女は」

その問題ってのは？ 人には話せないようなことなら別に話さなくてもいいけど。

「いやいや、全然話せないようなことじゃないけど、でもこれ聞いたら進君は少し驚くかもしれないよ」

驚く？

「うん。きつと驚く」

俺が瑠璃に関して驚くこと、一体なんであろうか。非常に気になる。話してくれないか？

「分かった。実は彼女ね、高校入って進君と話すまでは誰とも口聞かような人じゃなかったの」

あの天真爛漫そうなあいつが？

「うん。小学校5年生くらいだったかな。彼女、それまでは今の進君が知っているような性格だったんだけど、夏休みが終わってちょっと経ったくらいから急に不登校になっちゃってね。6年生になったらまた学校に来るようにはなったんだけど、以前とは比べ物にならないくらい別人な性格になってたのよ」

さっき言ってたようなネガティブそうなやつか？

「うん。私達が以前のように話しかけても『うるさい』『あっち行って』『私と関わらないで』の三本通し。昼休みになるといつもどこかへ逃げるように教室から出てっちゃうし、ほんとどうしたんだろうと思って、私もクラスの皆もあれこれ手は尽くしたんだけどやっぱりだめだ。彼女の親にまで理由を聞きに行っただけで親すら分からないって言うし、もう打つ手がなくなっただけで次第に皆諦めていっちゃったんだ。それに、決定的だったのが呪い魔女事件」

呪い魔女事件？

「うん。あんまりにも彼女が何も答えてくれないもんだからクラスメートの女子が一人キレちゃってさ。彼女のこと殴っちゃったのよ。そしたら彼女、その女子のこと睨んで『関わらないでよ！』って叫んで、そしたらその瞬間殴った女子が全身痙攣^{けいれん}し出して倒れちゃってさ。倒れた女子の横で彼女、『私に関わると……死ぬわよ』って」

それで呪い魔女か……。

「もう私もどうにもできないと思ったし、それにあんなの偶然に決まってると思いながらもあの娘の二の舞になるのは嫌だったしね。彼女には触れないことにしたまま月日は過ぎていったんだけど、そんなときに現れたのが」

俺ってわけか。

「そそ。で、こっから先は誤んなきやいけないことなんだけど、どうしても気になっちゃってちょっと二人を尾行してたの。で、見てるかぎりではもう大丈夫そうなのかななんて思ったわけ」

まあそこまで理由を聞いたら怒る気も起きないさ。

「ありがとう。で、今それを確かめるために丁度彼女がいなくなっただけで聞いたってわけ。もう一度聞くけど彼女本当に楽しそうだった？」

「進」

森下の質問に答えようと口を開きかけたところで突然名を呼ばれる。声のした方に振り向けばそこにいるのは無表情の瑠璃だった。

「進」

瑠璃はもう一度俺の名を呼ぶと俺の腕を掴んで歩き出す。俺は一度森下の方を見た。すると森下は意を決したように頷き、

「あ、あの、瑠璃？その、尾行してたのはあやま……」

瑠璃はいきなり立ち止まる。そして進行方向に顔を向けたまま単調にこう告げた。

「うるさい」

いつもと明らかに違うトーンの声に俺は何も言えなくなる。なんだ、もう大丈夫になったはずじゃなかったのか。

瑠璃はそれだけ告げるとまた歩きだした。腕を掴まれているため、俺も自動的に歩かざるを得ない。森下の方を見ると、彼女が何かを言おうか言わまいか躊躇しているのが明らかに分かる。

結局森下の声を聞くことなく、瑠璃と腕を掴まれた俺は喫茶店を出た。出たところで瑠璃は俺の手を離すと、いつもより歩調やや速めで歩き始める。向かう先にあるのは駅だった。

「瑠璃……」

「……………」

俺が声を掛けても瑠璃が返事をするのではなく、俺たちは微妙な距離を開けたまま駅へと向かった。

「瑠璃……」

俺が独り言として呟いた声にも、瑠璃が反応することはなかった。

第五章：その一（後書き）

読んで下さっている読者の皆様。誠にありがとうございます。突然ですが宣伝です。新しい短編小説を書きました。題名は「幸災の天秤」というもので、幸いと災いの均衡とその崩壊をテーマにして書いた5000文字弱の小説です。まだ読んでいないという方は是非読んでみてください。できれば評価なんかくれたりするともうむちゃくちゃうれしいです。では評価・感想・メッセージお待ちしております。

第五章：その二（前書き）

更新が遅くなりました。すべてはあの冬休みの宿題とかいう名の邪鬼のせいです。がんばって終わらせたんでこれからは通常どおり更新していきます。

第五章…その二

一言で言えば気まずかった。

あのあと電車の中でも俺たちの間に会話はなく、どうしたものかと考えていたのだが、ときどき瑠璃が、

「ねえ進」

と言い出すもんだから、何だと返事をしてやれば、

「……ううん、やっぱりなんでもないわ。気にしないで」

と返事が返ってくるパターンの会話と言えない会話が数回あったのが結局のところだ。

何かを決心したような顔で話し掛けられ、そして思い詰めた表情に変わったあと、諦めたように溜息混じりでの『気にしないで』。どんなに鈍感なやつだってこいつが何かを思い悩んでいることは、この場に立ち会えば十中八九、いや十中十超などと即席四字熟語が作れるくらいに察しが付く。こんな状況の場合、ちょっと気の利く奴ならば、お悩み相談承りますいらいっしやいませーくらいのことは考えるだろう。

実は俺もそんなお節介野郎共せつかいのメンバーの一人なため、瑠璃にその悩みを話してみろよと催促してみたのだが、

「……………」

別に言葉が通じない訳ではなく、本当に聞こえてないのか無視してるのか、俯いたままあるいは外の景色を見たまま返事のへの字すらも遣よこそうとしない。ビデオレターじゃないんだから反応くらいしやがれ。くっ、なんだこの敗北感は。

何もすることがないと時間というのは長く感じるものらしいのだが、どんなものだって必ず終わりは来るらしく、沈黙を保ちながら案の定電車はわが町の駅のホームで停車した。改札を抜ければあとは右と左に別れまた明日である。別にこれ以上一緒にいる理由もなく、俺たちはやはり無言のまま定石に従い、それぞれの家路に着い

た。

何かを忘れていることなど全く思いつきもしないまま、瑠璃が何を悩んでいたのかだけを考えながら玄関を開けると、それと同時に母さんのニードロップが俺の眉間を打ち抜いたのは、まあ深く考えれば言うまでもない。弁解に励んだものの、怒鳴ったり瞳をうるうるさせたりしてところどころと表情を変える母さんを見るのは実は微妙に面白かった。それ以上のいたたまれなさやるせなさを感じていたのも事実だが。

翌日、教室に入った俺を見つけるや否や、それまで読んでいた『頭のいい人が読む本』などというナルシストにもほどがあるというかそれ書いたやつふざけてんのかといったくなるハードカバーの本を、音を鳴らせて閉じて俺を無表情に睨みつける野郎がいた。ナルシストと言っただけで考えが至るような、言わば自尊心の塊のような男、その名も張祐樹である。

何事かと思いつながら目線を合わせていると、

「間抜け面提げてないで早く来たまえ。貴様のような腐れ凡人と長時間目線を合わせていては、この高貴な私の瞳が黄金色の輝きを放たなくなってしまう恐れがある。有り得ない話だがね」

俺はお前の脳髓が有り得ないと思うぞ。

「凡人の戯れ言にいちいち反応してる暇はない。いいから早く来たまえ」

こっちこそ色んな意味での超人の妄言に付き合ってる暇はないのだが、ここで反発してもおそらくやつはまた妙ちくりんな発言をしてくるに違いない。無視してもきつとそうだ。一体どうしたものやら。

しかしまあ、メガネナルシストの呼び出しを断る明確な理由は俺にはない。それに某が言うにはこいつは一応一般人の部類に分類されるらしい。奇怪な出来事の予約発言ではないだろう。それに何よりあの黒ぶちメガネの中から覗く鋭い眼が実に不快だ。ここは仕方

ない、どうしても自分のとこまで来て欲しくて仕方がない我が俤ガキンチョの為に、俺が少し大人になってやるとするか。

「ふん、やっと来たか。どうやら最近の凡人はたかが5メートルほどの距離なのに机が配列してあるだけでどう進めばいいのかわからなくなるらしいな。昆虫以下だ。まあそんなことはどうでもいい」

そういつて張は机の中から徐に一枚の紙を取り出し、

「さて本題に入るぞミニマム脳みそ。とは言っても用件はひとつなのだが、まあそんなことも今はどうだっていい。この文字の羅列をどこかで見た記憶はあるかね？」

見れば紙の上には『subjugation S T. P-1』
と書いてある。と、おや？これはたしか……。

「見たことがあるのかね？」

……いや、よく食べる食パンの袋に書いてある言葉に似てただけだ。見たことはないぞ。

「そうか。ならばもう用はない。即刻に立ち去りたまえ」

そう言つて張は再びあの頭のおかしい本を読み始めた。もう俺のことなど本当にどうでもいいらしく、チラリとすらこっちを見てこない。俺はそんな張を一度無表情に睨みつけたあと、歩を進めて自分の席に着いた。

俺は椅子に座り、窓の外、青い空の中、疎らな雲が右から左へ流れていくのを眺める。眺めながらも、俺はその景色を見てるわけではない。俺が見てるのは頭の中にある先ほど張に見せられた文字だ。実はさっき嘘を吐いた。俺にはあの英語のスペルやら文字やらを、食パンの袋などではなくしっかりと見た記憶がある。

それは一昨日某とリトル某を助けに行ったときだ。スーツの男達を全員地に伏せさせ、リトル某に繋がっていたチューブを切ったあと、そのチューブの出発点にあたる機械にあの文字の羅列を俺は見ている。

張にそれを伝えなかったのにはいくつか訳がある。もっとも大きな理由はただ単に張に反抗したかっただけなのだが、だがそれ以前

のもっと根底の部分には某が関係している。

工場の帰り道で某は自分の過去を、宛^{あたか}も他人の事のように話してきた。だがそれはおそらく他に口外して欲しくないという気持ちの表れだろう。普段笑顔しか表情を見せないあいつが、あの時だけはその鉄仮面を脱いで真剣な表情になったり、さらには顔を苦痛に歪めていたりもしたことからも、そう推測できる。

他人^{ひと}の個人情報に関わり、さらにはその本人が伝え広まることを望んでいないのなら、それを口外することはすべきではない、と無意識のうちに俺の心が俺の脳にそう語りかけていた。だから俺は張に嘘を吐いたのだ。

俺は視線を空から教室内へと戻す。ぐるっと見回すとなんとまだ瑠璃が来ていないではないか。昨日のあれがよほど精神に対してきつかったのだろうか。当事者ではないためその気持ちは分かるように分からないが。

結局そのまま瑠璃が来る前に朝のショートホームルームが始まり、そしてその日瑠璃が学校に顔を出すことは無かった。

放課後、谷川が、

「適当に動きやすそうな格好に着替えてもつかい学校に来い。急げよ」

となんだかだるそうな表情で言ってきた。なんだろうかと疑問に思いつつも、帰宅後なるべく急いで準備して学校に向かったところ、谷川はすでに昇降口前ど真ん中で意図が全くつかめない堂々たる腕組み仁王立ちをしていた。なんだか見えていて恥ずかしい。

だが谷川は俺が来たことに気付くと、何を血迷ったか突然狼化して俺の許^{もと}まで駆けてきやがった。誰か人が見てたらどう説明するつもりだ。

「てめえが遅すぎっからだこの野郎。おら、行くぞ」
行くってどこに……あ。

「簡単に説明すんぞ」

景色が歪む。どうやら谷川は例の早口言葉をすでに終了させていたらしい。

「じじいからの呼び出しらしい」

歪む景色はその色を段々と暗く変えていく。もうすでにまわりにあったものがなんなのか判別がつかなくなっている。

「詳しいことまでは知らねえが、なんだかでっけえイーターがこっちの世界に来ちまった可能性があんだってよ。で、今回のはその討伐のための会議みたいなもんだ」

そのままの動きで谷川が『クロス』と言ったところには、すでにあたりは真っ暗だった。

「まあとにかくいけば分からあ。よし」

そういつて谷川は超人的な早口言葉を始める。そして、
「カタストロフ」

闇が崩れ始める。いくら二度目とはいえ、それが非日常的で実に幻想的なことはまったく変わらなかった。

気付けばまわりはすでに前来たときと同じ風景だった。商店街のようなストリートのはるか先に城が見える。谷川の言うじじいというのはおそらくあの王様らしき人であり、またその人の呼び出しというなら目的地はたぶんあそこだ。

「ちっ、前よりやや遠めについちったか。まあいい、進、行くぞ」

いつの間にか人間の姿に戻っていた谷川が歩き出す。俺もその背中が続いて歩き始めた。

このころの俺はまだ自分がそのイーターを見たことがあることに気付いていなかった。

第五章：その二（後書き）

そろそろ新年ですが、これからもよろしくお願いします。2007年になってから読んだ方、明けましておめでとうございます。

第五章：その三（前書き）

またまた更新おそくなりました。言い訳がましいのですが、原因はPCが故障してたのと、期末テストの2つにあります。待っていてくださった読者様方、申し訳ございませんでした。

第五章…その三

長い一本道をえっさはいさ歩む。相変わらず気温は高く、生理的現象により身体中の毛穴から汗が大量に噴き出してくる。この真夏の炎天下のような暑さはどうにかならないのか。

「ぶつぶつ言っただえさっさと歩け。門までもうちよいだ」

もうちょいだ、などと言っていて、さらに門の姿はでかで見えているが、ここで騙されてはいけない。この門は通常では考えられないくらいの大きさであり、以前見た記憶からして今の大きさだとまだ距離があることは少し考えれば分かる。ああ、早く着かないだろうかと早く着かないだろうかと革靴買わないだろうか。

「落ちて着けそして気確かに持て。てめえそれ以上脳みそイカれたら取り返しつかなくなるぞ」

失敬な。俺は断じて変態露出狂ではないぞ。

「そこまで言っただえというかてめえマジでそっち側の人間だったかというかもう着いたぞ変態誘拐癖露出狂」

だから何度言ったら分かる。俺は断じて変イタしゅケピオロペね。「ついにイカれやがったかご愁傷様。そんなてめえに発狂特典として、それ以上俺に近づいたらもれなくてめえが腰にぶら下げてる黒いL字型で全身蜂の巣式肉抜き大サービスだ、っておい、どうした。おい！」

「……………ん……………」

遠くで何かが聞こえる。

「……………きるに……………」

それは聞いたことのある声で。

「…しん……………やく……………おき……………」

むしろ聞きなれた女の人の声。それは、

「しん！ 寝てないではやくおきるによいるんけるん」

語尾が明らかにおかしい、いつもどおりの姉だった。きっと幻覚。俺はとりあえず現状を確認した。とにかく広いフロア。高そうな絨毯。中央やや奥から始まる幅広の階段。あの奥には確か王様（仮）がいるはずだ。となるとここは王室前の広間か。

俺が身体を起こすと眼前に手が差し出された。俺は開いてこちらに向けられたその手を一度半目で見つめると、敢えて無視して起き上がった。頭が少し痛く、身体がフラフラする。

「お姉ちゃんを無視した!？」　それとも一人で起き上がれる強い子だっという自己主張!？」

頭が痛いせいか意味の分からないつつこみが聞こえてくる。きつと幻聴。

それにしても谷川はどこだろうか。というよりどこで逸れたのだろうか。思い出そうとしても門に辿りつく少し前までの記憶しかない。暑さにやられたか。

「うう、体言止めのつつこみという難度ウルトラCの技を持ってしても弟君は振り向かず。お姉ちゃん8000のダメージ。ところがどっこい、なんとお姉ちゃんはお姉ちゃんにしかできない精神的な自己回復を使うことによって、むしろ回復前よりパワーアップできるのだ! ……ってあれ? 進がない?」

幻覚が意味不明な幻解説を幻握り拳を掲げながら幻熱弁してる間、俺はなんともウザったい幻感覚を覚えながらすでに階段を上り始めていた。

「あ、いた! 止まれー!」

幻覚相手に反応してる暇は無い。行く先を遮る扉の向こうでは、もうすでに会議とやらが始まっているかもしれないのだ。ああ、急がねば。

「止まってって言っても止まってくれない、そんな君には奥の手だー!」

突如後方から聞こえていた足音が消えた。何事かと思い、後ろを振り向くとどこにも姉の姿は無い。代わりに、

「つーかまーえたー♪」

幻聴と肩に手を置かれるという幻感覚の再来。背中を水で撫でられるような現実の感覚を覚えながら再び扉の方に顔を向ければ、予想通りの満面の笑みがあつた。幻覚であつて欲しい。

「ふふふ、逃げる弟にはどんなお仕置きをしてあげよつかなあ？
くふつ。これもいいしなあ、あれもいいしなあ」

明らかに危機感を覚えなくなるニタニタ笑いの姉の指は奇怪な動きをしている。お仕置きのイメトレか、はたまた脳内デモンストレーションか。いずれにせよ姉の指の動きを見てる限りでは生還率が極端に低そうなことは明らかだ。これ以上ないくらい怖い。怖い、逃げれない。肩はいまだにもう片方の手でがっちりと掴まれたままなのである。ああ、どうやら俺の短い人生も終わりが近づいてきたらしい。ドンマイ、俺。いい夢見ろよ、俺。転生したら普通の家庭に生まれたいです。

と、俺が自暴自棄になりかけたところで突然、

「……おやや、エマージェンシーだよーん」

姉が眉尻を下げながら溜息を吐いた。それと同時に肩から圧迫感が失せる。

「じゃ、進。気を……いんや、門限守りなさいころすてーき」

そう言って片手を挙げた姉は、そのとき俺が瞬きをしたあとにはもうすでにそこにはいなかった。というか我が家には門限などない。サイコロステーキは結構好きだ。どうでもいいな。

と、ちよつと待て。忘れ物は忘れてから気付くというが、似たような理由で、何故姉はここにいたのだろうか？ここは物理的には来れるはずがない世界。我が姉はそんな壁もよよいと超えてしまえるような変態なのだろうか。そんなばかな。いや、しかし、変態か。変態とは周囲から見て異質な存在を指す。その方向からのみで考えてみればあながち不適合ではない、というより完璧だ。ああ、完璧な変態、まさに姉のことである。だが、そんな有機物生命体と二親等以内の存在が自分であるとはなんたることか。それではまるで俺

にも変態の素養があるみたではな

「なんだ起きてんじゃねえか。んなとこ突っ立ってぶつぶつ言っ
ねえで早く中入れや」

顔を上げれば、眉間に皺を寄せて扉を両手で勢いよく開いたら
し谷川がいた。眉間に皺、扉を勢いよく……結婚式の邪魔をする
気か！

「話が飛躍しすぎだ馬鹿野郎。それも脱線した状態で。んなこと
り、あととはめえが来りや会議始められんだ、話はあとでゆっく
りとイヤホン越しに聞いてやるから早くしろ」

姉に関しては考えると面倒なので、ひとまず考えないことにし
よう。

そんなこんなで王室内。

谷川が開けた扉から中に入ると、予想だにしない数の人がいた。

人と人の隙間がほとんどないくらいだ。半分くらいはこの城に常駐
してるであろう軽い防具等を装備した兵士としかいようがない奴
らだが、残り半分はおそらく俺や谷川と同じようにあっちこっち
の世界を行き来してる奴らだろう。私服姿がよく目立つからな。

遠くに見える王様（仮）に近づくためには人を掻き分けて進まね
ばならないほどだが、正直面倒なのでこのままここにいたい。いた
いのだが、

「到着したことを伝えに行くぞ」

とのことらしく、仕方なく人を掻き分け進もうとしたら、

「馬鹿野郎。この人ごみの中進んでたら日が暮れちまう。退こうに
も退けないくらい人が詰まってっからな。つーわけだからちよつと
身体貸せ」

何する気だ、と言おうとして谷川がいるはずの背後を振り向こう
とした直前。突如背後で微風が渦巻き、そしてほぼ同時に俺の両脇
から灰色の毛で覆われた手が出てきた。うひゃひゃ、くすぐったい。
「力抜きやがれ。持ちづらい。いくぞ」

その言葉の直後、俺の視界にはたくさんの頭頂が映っていた。段々と小さくなるたくさんの頭頂の中、禿げてるやつもいるな。などと呑気に観察してられるのは、今の自分の状況が概ね理解できていて、尚且つこの先の展開が予想できたからだ。そして予想通り、俺の身体は空中において一瞬停止し、そして、

「よっと」

前方、王様（仮）のいる玉座に向けて俺の体は飛んだ。たくさんの視線がこちらを見上げてくる中、その視線の持ち主の頭上を通り過ぎ通り過ぎ、

「着地どうすっかなあ」

考えてねえのかよ！と突っ込みたくなったが、徐々に近づく玉座と地面を見ていてはそんな余裕はない。今の俺と谷川の位置関係だと先に地面または玉座に衝突するのは俺だからだ。

正面の王様（仮）の方を見てみると、ちょうど目が合った。かと思ったら王様（仮）は目を瞑り、そして一步左にずれた。結果、今まで王様（仮）がいたところに人影は失せ、玉座だけが眼前に迫っており……って眼前？

「とりゃ」

背中に踏まれたような感覚。それと同時に眼前の玉座に向かって加速。そのまま一直線に頭から

「ぐえっ」

玉座に突っ込んだ。意識が飛びそうになったが、

「リカバー」

とどこからともなく聞こえてきた声が耳に入った直後、全身を襲った鈍痛は寝違えたような首の痛みだけになっており、位置的には玉座共々4〜5メートル進んだところにいた。でもなんで首だけ。

「随分と派手な演出だな進君」

玉座近くにいた兵士2〜3人に手伝ってもらい身を起こすと、王様（仮）が無表情で腕を組んで言ってきた。だがちょっと待った。この過激スタントは俺の計画ではなく谷川の所為だ。もしあの思い

出したくもない部屋に連れて行かれるのだとしたら、それは谷川だけの話であって俺は違うと主張したい。

「しかし実際にぶつかったのは君であろう？」

それは確かにそうなのだが、しかし！

「まあ二人の処理についてはまたあとで考えよう」

そんな理不尽な！

「さて、まだ一人来ていないようだが、まあいつものことだな。説明を始めるでしょう」

俺の悲痛の叫びを完全無視の方向性で話し始める王様（仮）。この会議のあとの俺の処遇については身の安全を諦めるものとして、俺が最後の一人じゃなかったのか谷川？

「俺はてめえが来れば会議が始まるって言っただけで全員集まったとは言ってねえ」

全員集まらなくて会議を始めてもいいのか？

「あの人はこういう会議には一切来ねえ。じじいもそれ知ってつかあの人に来なくても会議始めんだ」

あの人？谷川が言うにしちゃ随分と畏まった言い方だな。

「当たり前だ。姉御は唯一俺が尊敬してる人だ」
会議に参加しないような人なのか？

「普通ならできねえことをやってのけちゃうすげえ人なんだよ。この会議を欠席し続けることなんて俺だって無理だ。すぐに捕まって強制送還だからな。ところが姉御は捕まらない。というか捕まえられないし、たとえ捕まっても逃げれる人だ」

逃げることに特化した能力の人なのか？

「そうじゃねえ。あの方は動くのが見えねえんだ。というか動いてる時間そのものがない」

それじゃ結局動いてねえじゃねえか。

「違えんだよ。動いてるんだが、そうしてる時間が存在しねえんだよ。だから俺らには動きが見えねえ」

まったく、体力バカの言うことは意味が分からない。

「あ？　そうとしか言えねんだよクソが。喧嘩売ってんのか？」
いや、俺商人じゃないし。

「そうじゃねえ！」

「おまえら、少し黙れ。お仕置き追加な」

「そんな！？」

そんな！？

「おい、ハモるほどの仲良しタッグのために拷問器具2つほど増やしておけ。じゃあ今話したイーターの特徴だが……」

言いながら王様（仮）は再び前を向いた。谷川は何やら白め剥いて放心状態になっている。俺も全身に鳥肌が立っている。そりゃあただでさえ死にかけるお仕置きなのに、その上拷問器具2つ追加ってことは……いや、考えるのは止めよう。

谷川はさつき、その姉御という人物が『動いているが、その時間が存在しない』と言った。これはどういうことであろうか。動くが、時間が存在しない。彼女自身は普通に動くのだが、その動いてる過程は俺らの時間には存在せず、つまりは瞬間移動しているように見えるということであろうか。姿が消えて別のところで現れる。ん？　なんかついさつきそんな光景を目の当たりにしたような……あ。いや、いやいやいや。それはない。というかあって欲しくない。欲しくないが、しかし――。

「…というわけだ。じゃあ担当場所についてだが…」

頭に浮かぶ変態の顔の所為で、王様（仮）の話し声など耳に入らずがなかった。

第五章：その三（後書き）

評価基準が変わり、現在ファンタジーランキング50位。皆さんの評価・感想・メッセージをお待ちしております。

第五章…その四（前書き）

単純に更新遅れました←一ヶ月のブランクでしょうか。

今回の話の前知識…「タマちゃん」とあるゲームのキャラクターで、緑色のまん丸浮遊生命体。関西弁使用。赤になると爆発5秒前で、黒色はやくざさん。

第五章…その四

……谷川。落ち着いたか？

「ああ、安心しろ。俺はスイカの種はきちんと放物線を描かせて飛ばす派だ」

谷川は虚ろな視線を天井に固定したまま口だけを動かし言葉を放った。俺はそれを同じ高さから横目で見ている。俺たちは今個々の寝台の上にいた。

「しかしあれだな。あの丸みが何ともイカすな。それにあの淡い緑色。かあ、たまらん」

谷川は徐に両手を上へと突き出し、何やら虚空に浮かぶ妄想球体を愛でている。どうやらまだショックが抜けきってないらしい。何のショックかなど思い出したくもない。

「な、おめえもそう思うだろ、進」

いきなり話の矛先が俺に向いた。何をどう思えというのか。あれか、今も愛で続けてるその妄想球体についてか。丸く、淡い緑色。最初のネタがスイカだということから予測するとメロンあたりであろうか。なんとか話を合わせておこう。

「そうだな。あれはうまいよな」

言うとき谷川は驚愕の表情を持って飛び起き、

「おめえあれ食ったことあんのかよ！？」 何味だ！ 何味だったんだ！」

どうやら貧困家庭に育ったらしいことを言い始めた。しかも何味って。メロン味以外にどう表現しろと？

「爆発はしなかったか！？」

あれはそんな危険物だったのか。平気でスーパーに並んでいることを考えると恐ろしいな。

「赤とか黒とかはいなかったか！？」

ひどい腐り方だな。店頭に並んでいるわけがない。

「そうか…。実は食べ物だったんだな……。タマちゃん」

果物に名前を付けるイタい人間発見。しかもタマちゃんて。

「元気にしてるだろうか…」

いつ購入したかによるな。場合によっちゃ赤や黒になっているだろう。

「こんど会ったら食べてみっかな」

自殺願望もあるようだ。やめとけ、胃が溶けるかもしれんぞ。

「王水!？」

残念ながらメロンでは金は溶かせない。人の体調が溶けるように悪化するだけだ。

「タマちゃん……グッジョブ」

そういつて谷川は再び布団を被^{かぶ}った。終始意味が分からない。

谷川が死んだように寝入ったのを見計らって少し身体を起こしてみる。寝台から角度をつける毎に節々が軋みと痛みをあげている。筋肉も硬直しているところや小刻みに震えているところがある。それだけえげつない拷問だったということだ。

あのときの王様（仮）の目はヤバかった。とにかくヤバかった。死んだ魚の目にデーモンの目とメデューサの目を足して3掛けくらいヤバかった。人を平気で殺してそうな目をしてた。

「実際に人を殺したことはないが殺しかけたことはあるな」

言葉と共に木のドアが軋む音と、部屋と廊下の温度差による冷風。誰にというわけでなく言い忘れていたが、王城敷地内は何故か熱帯ではなく、むしろ寒いくらいで、それに準じて城内も寒く、しかし部屋内部は暖房で温めてある。だから冷風が流れ込んできたというわけだ。

そしてその冷風を肌で感じた瞬間に鳥肌が立った。だがそれは決して風が冷たいから、とかそういう理由ではなく、その証拠に背筋を冷や汗が伝う。心臓の鼓動がいつもよりかなり速い。

「どうした、そんなにダラダラと汗を流して。部屋が暑かったか？」
コツコツと響く革靴の底が固い床を叩く音が近づいてくる。その

音に対しておまえの所為だ、などとは死んでも言えない。家系全代が呪われる可能性だってある。

「ほう。私の所為とな。それは私の目を宛も殺人鬼のように表現したのと同様しているのか」

はい死んだ。もうだめだ。父さん、僕はもうすぐあなたのところに行きます。お茶とお菓子用意しておいて下さい。

「死後計画と依頼はもっと歳を取ってからにしろ。そんなことで私は人を殺しはしない」

嘘吐け。信じられるわけが

「そんなことで殺しはしない」

……はい、分かりました。分かりましたからその背中に回した手を元の位置に戻して下さい。

「……ちっ」

この人殺る気満々だったよ!!?」

「なんのことかな?」

同時に王様（仮）は背後の開けっ放しにしてあるドアに向けて、背中で掴んでいた何かを投じた。その姿形は王様（仮）に隠れて見えなかったものの、

「サクッ」

という音と、

「いやあああああ!!? 赤が! 赤が迸るううう!」

という悲鳴プラス駆けていく足音で、ついさっきまで自分がどんな危機的状况にいたのかがよく理解できた。

「あ……最近、食事の用意ができた合図を人の悲鳴に似た音にしてみたんだ。どうかな?」

無理があると思います。

「……掃除終了の合図とか」

無理があると思います。

「……日本からハワイ沿岸までの太平洋北西部および日本海の水深100mまでの大洋に生息し、温帯域の回遊魚で、日本付近では春

から夏に日本列島を北上し、初冬から春に南下する魚には？」

鰯ぶりがあると思います。

「……秋の食材として庶民に愛され続けて云十年。和菓子洋菓子に利用され、食卓にも並ぶ世界各国御用達のブナ科の落葉樹の種子には？」

栗があると思います。

「それだけでできれば大丈夫。君は何も心配することはない」

もはや心配することしかないような気がするが、ここは敢えて心配しないことにしておこう。

「さて」

王様（仮）の表情が引き締まる。ギャグパートは終わりということであろうか。

「先ほどの会議での話は聞いていたかな？」

どうやら真面目な話に入るらしい。しかし入ろうにも俺はその話をほとんど聞いていない。きちんと言うべきか、それとも…。

「まああの調子じゃきつと聞いていなかったんだろがな。私がここに來た理由もそこにあるわけだしな」

王様（仮）が心を読んだかのようなことを言う。

「で、とりあえず最初から説明するが、隣で白目剥いてる犬を起こしてくれるか？」

背後を見れば確かにアホが白目を剥いている。どうやって起こそうか。

「これを使うがいい」

そう言って王様（仮）が砲丸を渡してきた。7. 26 k gの大人男子用だ。さあどこに落とそうか。

「鳩尾いけ、鳩尾」

ほい。

俺の手から離れた重鉄球は、加速に加速を重ねて目指す場所に吸い込まれるように……

「自由落下の重力加そぐふっ」

胸骨の下あたりにめり込んだ。直前に吐いたセリフは何か予知していたのだろうか。的中したわけだが。

谷川は少しの間呼吸すらしていない状態だったが、

「味噌田楽！」

と言って飛び起きた。本格的に脳細胞がイカれて来たのかもしれない。ご愁傷様とでも言っておこうか。誰かに言われたことがある気がするのはいのせいだろう。

「い、いい今のは何だ！？　なんかこう、頭の中が一瞬春を迎えた感じになったぞ！　タマちゃんか！」

まだ引っ張るのかそのネタ。いい加減元に戻れ。

「で、何の用だ。じじい」

だからっていきなり戻るなよ。対応しきれねえじゃねえか。

「ああ、お前らが雑談に夢中になって聞き逃した討伐対象についての話をしに来た」

あんたも普通に返すなよ。少しはうろたえろよ。

「で、全部話すと長くなるから討伐対象についてだけ話すぞ」

俺の突っ込みお構いなしに王様（仮）は口を開いた。

「まず対象イーターの身体的特徴だが、容姿の大小は不明、その形容も不明、おそらくは幻姿型だと思われる」

幻姿型？

「まるで幻のようにその姿をコロコロと変えるからその名称が付いた。このタイプは見つけづらいから厄介だな」

変幻自在ってやつだな。というより、イーターってこの間のマントヒヒみたいなのばかりではないのか。

「ああ、いろんな種類がいる。まあそれは奴らが食ったマイナスの感情の種類と質によるものだがな。だからこそ千差万別だ。種類こそ分けることができるが、同じ奴など一匹たりとも存在しない」

さて、と言葉改め、

「話を戻すぞ。身体的特徴は今話したとおり幻姿型なのだが、今回は出生元がどうもおかしい」

おかしい、というん？」

「イーターが精神世界を出るのは、こっちで暴れて我々に討たれかけたとき、たまたま転移シールドを発生させてしまったというのが常なのだが、今回のイーターはそっちの世界で出生を確認されている」

つまりあれか、本来こっちの世界で出てくるはずの奴が、何故か俺らの世界で生まれやがった、とそういうことか。

「うむ。そしてその原因として考えられる理由は恐らく一つ」

王様（仮）は眉間に皺を寄せ、

「何者かがイーターの幼生をそっちの世界に持ち出し、そしてそのまま養ってイーターにしたということだ」

「ちよっと待てよじじい」

耳のすぐ近くからした声に振り向くと、谷川がいつの間にか俺の隣に座っていた。胡坐に立て肘といった体勢である。

「ならなんでいちいちそんなことをしたんだよ？　良い理由じゃあねえんだろおけどな」

それに関しては俺も同感だ。何が目的でその何者かはそんなことをしたのだろうか。

「残念ながらそれはまだ不明だ。第一まだ本当に何者かが持ち出したかどうかすら思案段階なのだ。全く、謎だらけでさすがに私も嫌気が差してくる」

「で、結局俺らはどうすりゃいいんだよ」

谷川が本来の話題を持ち出す。一番の問題はこれだ。内容によっては学校も休まなければいけなくなる、なんてことはないだろうな。「安心しろ。元々一般人の君にそんなことはさせない。ただ、進君も犬も、それらしいものを見つけたらこちらへの連絡を即行してほしい。意思の疎通を可能にする力を常備発動させておくから、それで連絡してくれ。今はまだそれだけだ」

言って王様（仮）は羽織っているマントの内側に手を入れる。

「進君」

「どうやら用件があるのは俺らしい。

「念のためこれを持っていてくれ。それを使えばしばらくの間能力を発動することができる」

王様（仮）が渡してきたのは何やら錠剤のような物体だ。飲めばいいのか？

「ああ。一回一粒で十分だ。もしもの場合以外は使うな。いざという時に薬が切れては話にならんからな」

よし、と前置きし、

「とりあえず今回の用件はここまでだ。あとは帰って与えられた任務を遂行してくれ。連絡するだけだけだな。こちらからも何か連絡することがあれば常時連絡する。じゃあ仕事も溜まっていることだし、私はそろそろ下がらせてもらおうとするかな」

そして王様（仮）は踵を返して歩き始める。が、扉をでようかというところで突如立ち止まった。振り向きもせず、どうしたのであるのか。

「進君」

「どうやらまた俺に対する用件らしい。なんであろうか。」

「君には確か姉がいたな」

いきなり姉が話題に出てきた。そのせいでさっきのことを思い出してしまったではないか。俺が会議の説明を聞き逃した、最も根本的な理由である。

「彼女に無断欠席と変態は止めろと言っておいてくれないか。おかげでこっちでの彼女も素行が悪くて困る。話はそれだけだ。ではまた次の機会に」

言葉に1テンポ遅れて木のドアが軋み、もう一度軋みを上げた後、部屋に入ってくる冷風は途絶えた。

「っしや」

爪先から、ほとんど音を立てずに谷川が寝台から降りる。降りた直後にこちらに振り向き、

「まあとにかくまずは帰ろうぜ。どうせ何するわけでもねえんだ。」

あれこれ考えてても時間の無駄だっつの」

谷川は踵を返し歩き始めた。俺も寝台から降りてその背中について行く。

歩きながら俺は考える。広間でのこと、会議中の谷川が言っていた姉御、王様（仮）が最後に言った忠告の依頼。完全無欠の超絶変態一般人であるはずの姉が、今日精神世界に三回も関わっている。

一体全体どういふことなのか。実は俺が知らなかっただけで、姉は以前から精神世界と関わりを持っていたというのか。そしてその姉が谷川に尊敬されるような人物なのか。

城の正面玄関を出る。あとは直線上にある巨大門を通れば、谷川が早口言葉を唱えるだけで元の世界に戻る。だが、そんなことよりも……

「……ん？おい、ぼーっと突っ立ってねえで早くしやがれ。帰れなくともいいのかよ」

ああ、悪い。今行く。

俺は再び足を踏み出す。そしてさらに一歩、さらにと踏み出しながら一つのこと思考を巡らしていた。

姉は一体何者なのだろうか。

第五章：その四（後書き）

評価・感想・メッセージお待ちしております。

第五章…その五

翌朝、いきなり来た脳内の響く“連絡”とやらで目が覚めた。

『あー、総員、聞こえているか？聞こえた者は『尊敬してます』と言え』

消えて失くなれ。

『ん？ おかしいな。確かに届いてるはずなんだが。おい鈴、^{すず}波長レベルを滅殺級まで上げ…』

やだなー王様ったら。尊敬してるに決まってんじゃないっすかあ。
『おお、どうやらちゃんと届いていたようだな。鈴、波長レベルはそのままに頼む、ってなんでそんなあらかじめ魔女が渡してくる林檎の正体が分かっているような目をするんだ。もつとにこやかにいけ、にこやかに』

反面教師め。

『進君。何か場にそぐわないことが聞こえた気がするのだが気のせいだろうか』

なんということだ。かなり小声で言ったはずなのに。

『その発言こそ小声で言うべきだがな。まあ冗談はこの辺にして本題に入るぞ』

おほん、と王様（仮）が咳をする。あ、いや、さっき王様と言って否定されなかったからもうそろそろ（仮）は外すか。

とまあそんなことを思いながら、自室のベッドをのそのそと這い出る。自室に留まらないのは、このまるで脳内にコンサートホールがあるんじゃないかと言いたくなるような響きが、実際のコンサートホールよりも防音対策がばっちりなため、特に周りを気にすることはないからだ。たぶんだが。

『昨日の件についてだが、なんと昨日の夜遅くにそれらしき物体を発見したと連絡が入った』

早すぎだろう、と思いながら階段を下りる。

『今日手の空いてる者にはその搜索を行ってもらいたい。まだ確実な情報ではないため、手の空いてる者だけな。よって手の空いてる者は『愛しています』、空いていない者は『慕っています』と言え』
ゲロ吐いて死ね。

『ははは。今他意の感じられる発言をした数名の者は、今度こちらに来たとき手厚く迎えてあげよう。全身から血を噴き出すほど喜べること間違いなしだ。期待しておけ』

もう人生半ば諦めるつもりで居間に続く扉を開ける。目に入ってきた食卓に並ぶ皿を見る限りでは、今日の朝飯は納豆に白米に味噌汁といったところだろうか。

『まあともかく、搜索地域は今私に無限の愛を誓ってくれた者のみに伝える。それ以外の者は連絡を切るのですそのつもりで。一度教えたことだが、何か発見したら一度頭で城のイメージを描いてから連絡しろ。ではまた』

それっきり声がなくなる。やっと聞くに堪えないドSヴォイスから離れられたということだ。嬉しいことこの上ない。

俺は椅子に座り、納豆を手取る。さて、朝飯を頂くとしよう。

「なんでてめえも走ってんだよ！」

んなもん遅刻するからに決まってるだろう。

「そうじゃねえ！　なんで並列して走ってんだって聞いてんだ！」
そのまま返す。

「それは俺もてめえも朝時計見忘れてて、気付いたときにはああやべえってなってたからで：ってなんで俺が答えてんだよ！？」　俺の質問だよ！？」

ノリツツコミやつてる暇あんならちよつと遠回りしてこいよ。いい運動になるぜ。

「もし遅れた場合に言い訳しづらいだろおが！　はっ、もういい先いくぜ」

言って谷川はスピードを上げる。負けてたまるか。

「ちっ、しぶてえやつだ。だが俺の本気には勝てねえぜ！」

セリフが古い上に寒い、さらに臭いな。そんな言葉がほいそれと出てくるお前のチンケな脳みそに圧巻だ。

「ぶっ殺すぞ!? まあいい、どっちにしろてめえじゃ俺にはついてこれねえ」

なめるなよ。

「いいや無理だ。なぜなら……」

谷川の周囲に風が巻く。っておい、まさか。

「なぜなら俺は狼だからだああ!!」

言ったときにはすでに体表は灰色の毛並みが覆っており、前に伸びた鼻と口、そしてそこから覗く牙が雄々しさと自信を物語っている。ってかほんとに変身しやがった。絶対アホだ。分かりきったことだが。

「ははは! おっさきー!」

させるかああああ! ……………

校門前。

「はあ……はあ……。へっ、やったぜ、まだ3分もありやがる」

ああ、非常に助かった。

すでに人間の風貌に戻っていた谷川が心底驚いた風な顔で振り向く。目見開いて、口かっぴらいて、まるでアホの代名詞を見てる気分だ。いや、実際にそうだったな。

「うるせえよ! ってかなんでてめえがいるんだよ!？」

理由なら説明したろう。非常に助かった。なんなら一文付け足すか? 運搬ご苦労様。

「てめえ俺に掴まってやがったな! どうりで少し重いと思ったらそういうことか! くそ、てめえの涼しそうな顔がこの上なくムカつく。謝罪しやがれ、謝罪!」

私、罪犯シテナイヨ。

「なんでいきなり片言なんだよ!? なんちゃって中国人かよ!？」

イスラムの方で頼む。

「どうだっていいじゃねえか！……っってもういねえし！？」

俺は足早に下駄箱に行き、下から上へと履き替える。いちいちアホの発言に付き合ってられるほど俺は暇じゃない。遅刻なんぞまっぴらご免だ。急がねば。

結果的に言うと、俺も谷川も遅刻はせず何とか始業に間に合った。ただ俺よりも谷川の方が僅かに遅れを取っていて、俺が教室に入った直後に、階段を全力疾走で上ってきた谷川と横から現れた白川がヘッドヒッティングをかまし合い、二人して泡吹いて保健室に運ばれて行ったときには正直噴き出しそうになった。やや非道染みた行為である気がして堪えはしたが。

その後一時間もすれば谷川はすっかり復活したらしく、皺を寄せた眉間にガーゼが付いているという滑稽な顔立ちで教室に入ってきた。どこからともなく小さな嘲笑が聞こえてきたのは言うまでもない。人によって見方はそれぞれだと思うが、俺の場合は突如開いた第三の眼が白め剥いてる状態か、剃っても剃っても生えてくる眉間の眉を隠すためという隠蔽作業のどちらかに見えたため、これまた噴き出しそうになった。というか噴いた。これだけ周りで嘲笑の小さな嵐が起きてるんだ。もはや誰だかはわかるまい。

結局そのまま止んでは誰かが思い出し笑いで再び噴き出し、それにつられて全員クスクス笑い出すというなんちゃってエンドレスループが続く内に昼休みとなった。今日は授業が身に入ったやつはいたのだろうか。

「そんな総体的な心配するくらいなら少しでも授業に集中するべきだと思うわ。何事も始めが肝心なのは昔から言い伝えられてきたことだしね」

なんだか懐かしい声がすぐ目の前、頭上から降ってくる。いや、実際に声を聞いていないのはたったの一日なのだが、それを何故だか懐かしいと思ったのは、まあ世間一般でよくあることにしておこ

う。

何かに妥協した俺は顔を上げる。するとそこにはやはり予想通り瑠璃がいた。腕組み仁王立ちというこの姿勢は、もはやそのポーズだけでこいつだと言えるような、言わばこいつの代名詞のようなものにまで成り上がっているやもしれん。

「何をぶつぶつ言ってるのよ。それより面白い噂を耳にしたんだけど」

瑠璃は何やら試すような騙すような笑みを浮かべる。その人を嘲笑うかのような口端を歪めただけの表情はなんだかメドゥーサを思わせる。と、そんなことはどうでもよくて、

「今なんか軽くひどいことを言われたまま流されたような気がするんだけど」

気のせいだ。それよりもう平気なのか？

瑠璃はふう、と溜息を吐き、

「ああ、ただの風邪だわ。ヘーキヘーキ」

と言う口元は皮肉ったような笑みを浮かべているものの、どこかぎこちない感じがある。本当に風邪だったのか？

「だからそう言ってるじゃない。風邪は風邪であって風邪でしかない風邪なの。分かった？」

さっぱり分からんからもう一度聞かせてくれ。本当に、風邪だったのか？

「……だからそう言ってるじゃない」

やっぱりな。

三度目の正直という諺があるように、今の三回目の質問に対し、瑠璃は露骨に表情を暗くした。これが一昨日のことを暗示する以外何であるというのか。やはり結構なダメージがあったようだ。

瑠璃は顔を俯かせたまま唇を軽く噛んでいる。そういえばあの日の帰りの電車で瑠璃は俺に何かを言おうとしてたがあれは何だったのであろうか。

「そんなことよりも噂よ、噂！」

急に顔を上げた瑠璃によって俺の疑問はあっさりと回避されてしまった。まあ俺だって人の嫌がることに無理矢理干渉しようなど、そんな王様レベルのSっ気を所持しているわけではない。それにこの件に関しては、きっと瑠璃が話す決心がついたら話してくれるだろう、と勝手に思いこんでる所存である。

さて、話を戻すとして、その噂とは？

「これは朝、登校途中に偶然にもはつきり耳に入っちゃった男子生徒二人が話してた内容なんだけど」

長い前置きはいいいから本題に移れ。

「うるさいわね。ちよつと緊迫感を出そうとしただけじゃない」
そう言って瑠璃はぶすつとした表情になる。どうやら逆鱗に吐息を掠らせてしまったらしい。分かった分かった、それで？

「ふん。気乗りしなくなっただけど仕方ないから話してあげるわ。広まるからこそ噂であるわけだし。で、そいつらの話によると、そいつらはどうやら昨日の放課後、学校に忘れ物をしたからって男二人で教室まで、その忘れ物とやらを取りに来たらしいのよ。全く、まだ夕方な上に男だっていうのに一人で学校に来ることもできないなんて、チキンにも程があるわ」

……さてさて、よもやそれが本題って言うんじゃないだろうな。

「あんた馬鹿じゃないの？ 今のは噂も何も事実じゃない。チキン二人が学校の忘れ物を取りに来た。たったこれだけのことだわ。そんなのクラスの新聞係だって記事にしようと思わないわ。問題はその後にあるのよ」

その後、か。確かこの話の時間帯は放課後。昨日の放課後……いや、まさかな。

「そいつらは何事もなく忘れ物を教室から奪取すると、そのまま特に寄り道をすることもなく学校を出ようとしたんだけど、遂に来たわ。ここで問題発生よ」

瑠璃の瞳の奥が、田圃に浮かぶ火の玉よろしく不気味に光る。よくない前触れであることは間違いない。間違いないのだが、いやい

やまさか。

「そいつらは見てしまったのよ」

「ごくり、と何かを飲む音が自分の喉から響く。」

「——人間の胸座むなぐら掴んで今にも襲おうとしてる狼男をね」

瞬間、俺は目の前が真っ白になるのを感じた。だが、少し後ろにふらつといきそうになったところで何とか踏みとどまる。そうだが、ここで倒れてどうする。過度な反応を示せば自分が当事者だと言っているようなものだ。あれは、特にこいつには知られてはいけない。理由はないが、動物的直感というやつだろうか。

「しかもそのあとすぐに、狼男も人間もパツて消えていなくなっちゃったらしいわ。進、これは事件よ。もう調べるしか道は残さ」
待て。

「何よ？」

瑠璃は眉根を寄せ、昨あからさまに嫌そうな顔をする。さて、つい焦って、待てなどと言ってしまったが、別段良い考えがあるわけではない。どうすべきか。とりあえずこのままその非現実的な真実の噂をただの噂にしなければ。

「調べるも何も、そんなのがいたかどうかお前ははっきりと確認したわけではないんだろ？それに狼男を発見したっていうやつらの会話だって信憑性に乏しい。疲労、視力、光彩、見間違える理由なんてたくさんあるだろ。また、億万歩譲って仮にいたとしても、その狼男はお前の前には生涯現れないだろうよ。確率の問題だ。つまり、いずれにせよ調べるだけ無駄だということだ」

正確には、調べられては困る、だがな。

「あんたの説教は聞き飽きたわ。もういい、一人で調べるから」
そう言うとう瑠璃は頭の上から蒸気をぶんすか出しているかのような歩き方で席に戻っていった。できれば調べて欲しくないのだが、奴にそれを言えば言うほど逆効果なのは今再確認させられたことであり、これ以上刺激せずに狼男さんを見つけてくれないのを願うばかりである。

さて、余計な心配事が増えてしまったが、そうそうそればかりを気にしているわけにもいかない。何故かと言えば、丁度今俺の腹の中で名前がいまいちはっきりしないことで有名な腹の虫が鳴いたからだ。

戦いなどする気はないが、腹が減っては戦はできないものらしいので、まずは弁当にありつくことにしよう。

第五章：その五（後書き）

評価・感想・メッセージお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7383a/>

俺の非常識女神様

2010年10月9日07時02分発行